

高知県

野市町本村遺跡調査報告書

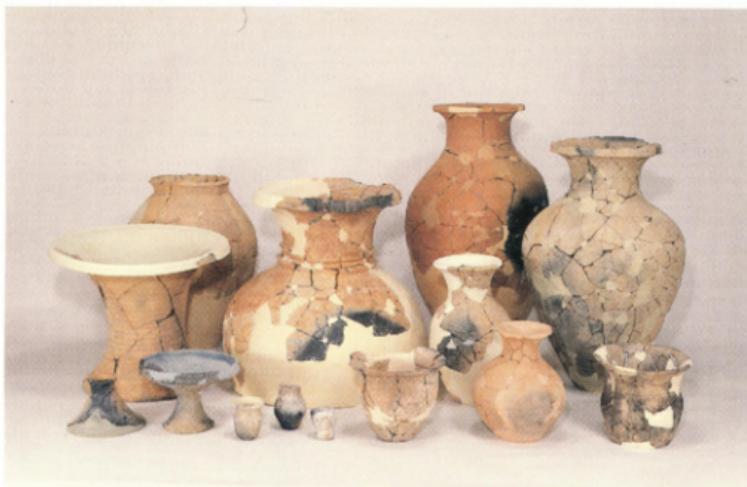
1993

野市町教育委員会

本村遺跡発掘調査報告書

野市町埋蔵文化財調査報告書第3集

巻頭カラー



出土土器集合写真



ガラス製勾玉 表



ガラス製勾玉 裏

序

この度、平成3、4年度に実施しました本村遺跡の報告書を刊行する運びとなりました。

野市町は近年、人口が増加しそれに伴う開発行為も増加する傾向にあります。この様な一方で本町の主要産業である農業の近代化も進めています。本村地区においても圃場整備事業の進展が図られておりましたところ、弥生時代の遺跡である本村遺跡が発見されました。

野市町では、貴重な文化財を保護・保存し後世に伝える方途を検討いたしましたが、発掘調査によって、記録保存を行い、その成果を広く公表し、郷土の歴史解明に資することになりました。

発掘調査では、弥生時代中期の小集落を中心に、縄文時代～中世までの遺構・遺物が発見されました。特に弥生時代中期の資料は、高知県において初めての発見となったものも多く、野市町の弥生時代を明らかにするだけでなく、県内の歴史の発展過程を解明する上で貴重な資料になりました。

今回の報告が、埋蔵文化財への一層の理解を深めていただく一助となり、考古学研究の資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本調査にご尽力いただいた（財）埋蔵文化財センター及び高知県教育委員会、調査に携わった方々にお礼申し上げますとともに、本村地区の方々、本村地区土地改良区の文化財への深いご理解とご協力に感謝申し上げます。

尚、今後とも文化財保護行政に邁進してゆく所存ですのでご指導、ご協力をよろしくお願ひいたします。

野市町教育委員会

教育長 弘田忠士

例 言

1. 本書は、高知県香美郡野市町に所在する野市町本村遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は、野市町埋蔵文化財調査報告書第3集である。
3. 本書に収録したのは、1991年度に実施された三度の試掘調査、1992年度に実施された本調査である。
4. 調査は野市町教育委員会が主体となって実施した。各役割分担は以下のとおりである。

調査員	坂本憲昭	……財団法人 高知県文化財団	埋蔵文化財センター	調査員
庶務担当	小松大洋	……野市町教育委員会		社会教育主事
5. 本書の執筆、編集は、坂本憲昭が行った。
6. 本書に用いた遺構記号は以下のとおりである。

S A	柵列	S K	土坑	S D	溝	S X	正確不明遺構	Pit	柱穴
-----	----	-----	----	-----	---	-----	--------	-----	----
7. 出土遺物は野市町教育委員会が保管している。なお出土遺物の注記は、以下のとおりである。

91年度試掘調査	91- 9 NH
92年度本発掘調査	調査Ⅰ区 92- 9 NH
	調査Ⅱ区 92- 9 NH谷西
8. 遺構平面図作成にあたっては、グリッドを組んで行なったが、軸線は任意で設定し、調査Ⅰ区ではアラビア数字とアルファベットで表した。調査Ⅱ区は、調査Ⅰ区のグリッド杭G-4を(0.000,0.000)としてアルファベット軸をY軸、アラビア数字軸をX軸としてグリッド杭に座標をのせた。尚、図面中Nは磁北である。
9. 調査にあたっては、ご理解、ご協力をいただいた地元改良組合をはじめ、地元住民のかたがたおよび関係各位には、記して謝意を表したい。
10. 調査現場、整理作業では多くの方々の協力を得た。名前を記して謝意を表したい。
(現場作業)
石川康人、井上郁夫、井上速男、井上博恵、白木山里、馬地節子、小野川和子、片岡真弓、門脇あつ子、門脇ひろみ、加納末雄、狩野孝子、貞岡重道、佐野宣重、杉本認喜、武吉真裕、中野三徳、野中勝徳、百田進一、宮本幸子、湯本好美
- （整理作業）
大原喜子、高橋千代、竹村延子、田村美鈴、橋田美紀、松木富子、宮地佐枝、山中美代子、山本裕美子、矢野雅、吉本睦子
11. 現場での発掘調査並びに、整理作業、報告書執筆では埋蔵文化財センターの先輩諸士に多大のご指導、ご援助をいただいた。記して謝意を表したい。

報告書要約

1. 遺跡名 本村遺跡 (91-9 NH, 92-9 NH)
2. 所在地 高知県香美郡野市町本村
3. 立地 三宝山から続く低丘陵 (標高約30m)
4. 種類 弥生時代中期後半の集落
5. 調査主体 野市町教育委員会
6. 調査契機 団体営による圃場整備事業
7. 調査期間 平成4年5月11日～7月31日 (本調査)
8. 調査面積 4,500m²
9. 検出遺構 堪穴住居址6棟、土坑3基、溝状遺構16条、性格不明遺構1基、振立柱建物2棟、旧谷状地形の自然遺構1ヶ所
10. 出土遺物 繩文の石鎚、弥生中期後半土器、鉄鎚、石鎚、石包丁、石斧、ガラス製勾玉、古式土師器、須恵器、土師器、土師質土器
11. 内容要約 本遺跡は、三宝山から続く低丘陵上に立地した弥生中期後半から後期前半の集落と考えられる。出土遺物は四線文を主体とした土器を中心に、石器、鉄鎚、ガラス製品等が出土しており、高知県における同時期の様相を知る上で貴重な資料を提供した。

本文目次

I 調査に至る経過	1
II 地理的環境	3
III 歴史的環境	5
IV 調査の概要	6
V 遺構	17
VI 遺物	47

図版目次

第1図 野市町位置図	2
第2図 野市町地形図	2
第3図 周辺遺跡分布図	4
第4図 試掘調査トレンチ位置図及び本調査区割り図	9
第5図 調査I区地形図	11
第6図 基本層序	13
第7図 S T 1 実測図	17
第8図 S T 2 実測図	19
第9図 S T 3 実測図	21
第10図 S T 4 実測図	22
第11図 S T 5 実測図	24
第12図 S K 1 実測図	25
第13図 S K 2 実測図	25
第14図 S K 3 実測図	26
第15図 S D 1 ~ 5 実測図	27
第16図 S D 6 実測図	28
第17図 S D 7 ~ 10 実測図	29
第18図 S D 11, 12 実測図	30
第19図 S D 13 実測図	30
第20図 S D 14 実測図	31
第21図 S D 15, 16 実測図	31
第22図 S A 1 実測図	32
第23図 S X 1 実測図及び遺物出土状況実測図	33

第24図	S T 6 実測図	36
第25図	S B 1 及び調査II-A区ピット実測図	38
第26図	S B 2 実測図	39
第27図	旧谷状地形発掘調査区実測図	40
第28図	S T 1~5 出土土器実測図	57
第29図	S T 6, SK 1, 2 出土土器実測図	58
第30図	S K 2 出土土器実測図	59
第31図	S K 2, 3 出土土器実測図	60
第32図	S K 3, SD 1, 5, 6, D区包含層出土土器実測図	61
第33図	SD 6 出土土器実測図	62
第34図	SD 6 出土土器実測図	63
第35図	SD 7, 8, 10, 13~16, II-A区ピット出土土器実測図	64
第36図	S X 1 出土土器実測図	65
第37図	S X 1 出土土器実測図	66
第38図	S X 1 出土土器実測図	67
第39図	S X 1 出土土器実測図	68
第40図	S X 1 出土土器実測図	69
第41図	S X 1 出土土器実測図	70
第42図	S X 1 出土土器実測図	71
第43図	S X 1, 包含層出土土器実測図	72
第44図	包含層出土土器実測図	73
第45図	II-A区 旧谷状地形埋土中出土土器実測図	74
第46図	II-A区 旧谷状地形埋土中出土土器実測図	75
第47図	II-A区 旧谷状地形埋土中出土土器実測図	76
第48図	II-A区 旧谷状地形埋土中出土土器実測図	77
第49図	II-A区 旧谷状地形埋土中出土土器実測図	78
第50図	II-A区 旧谷状地形埋土中出土土器実測図	79
第51図	II-A区 旧谷状地形埋土中出土土器実測図	80
第52図	II-A区 旧谷状地形埋土中出土土器実測図	81
第53図	II-A区 旧谷状地形埋土中出土土器実測図	82
第54図	II-A区 旧谷状地形埋土中出土土器実測図	83
第55図	II-A区 旧谷状地形埋土中出土土器実測図	84
第56図	ミニチュア土器実測図	85
第57図	ミニチュア土器実測図	86

第58図 鉄鑿, 石鑿実測図	87
第59図 石鑿実測図	88
第60図 石包丁実測図	89
第61図 石包丁, 石斧実測図	90
第62図 石斧, 石剣, 刺片実測図	91
第63図 ガラス製勾玉, 管玉, 故石実測図	92
第64図 故石実測図	93
第65図 故石, 叩台実測図	94
第66図 叩台, 砥石実測図	95
第67図 砥石実測図	96
第68図 砥石, 性格不明石器実測図	97
第69図 性格不明石器実測図	98
第70図 付図 調査 I 区全体図	

表 目 次

第1表 周辺遺跡分布表	4
第2表 ST 1 ピット計測表	17
第3表 ST 2 ピット計測表	18
第4表 ST 3 ピット計測表	20
第5表 ST 4 ピット計測表	22
第6表 ST 5 ピット計測表	23
第7表 SA 1 ピット計測表	32
第8表 SX 1 ピット計測表	33
第9表 ST 6 ピット計測表	37
第10表 SB 1 ピット計測表	37
第11表 SB 2 ピット計測表	39
第12表 調査 I 区ピット計測表 1	41
第13表 調査 I 区ピット計測表 2	42
第14表 調査 I 区ピット計測表 3	43
第15表 調査 II-A 区ピット計測表	44
第16表 遺物観察表 1	99
第17表 遺物観察表 2	100
第18表 遺物観察表 3	101

第19表	遺物観察表4	102
第20表	遺物観察表5	103
第21表	遺物観察表6	104
第22表	遺物観察表7	105
第23表	遺物観察表8	106
第24表	遺物観察表9	107
第25表	遺物観察表10	108
第26表	遺物観察表11	109
第27表	遺物観察表12	110
第28表	遺物観察表13	111
第29表	遺物観察表14	112
第30表	遺物観察表15	113
第31表	遺物観察表16	114
第32表	遺物観察表17	115
第33表	遺物観察表18	116
第34表	遺物観察表19	117
第35表	遺物観察表20	118
第36表	遺物観察表21	119
第37表	遺物観察表22	120
第38表	遺物観察表23	121
第39表	遺物観察表24	122
第40表	遺物観察表25	123
第41表	遺物観察表26	124
第42表	遺物観察表27	125
第43表	遺物観察表28	126
第44表	遺物観察表29	127

写 真 目 次

写真1	調査区遠景	調査区調査前風景	131
写真2	調査区調査前風景	S T 1 完掘状態	132
写真3	S T 2 完掘状態	A区完掘状態	133
写真4	B区完掘状況	S K 2 遺物出土状況	134
写真5	S T 3 完掘状態	S X 1 完掘状態	135

写真6	S K 3 完掘状態	S D 6 完掘状態	136
写真7	S T 4 完掘状態	D区端部完掘状態	137
写真8	S D13, 14完掘状態	S T 5 完掘状態	138
写真9	S T 6 完掘状態	II-A区ピット完掘状態	139
写真10	調査区完掘状態遠景		140
写真11	遺物出土状態1		141
写真12	遺物出土状態2		142
写真13	出土遺物1		143
写真14	出土遺物2		144
写真15	出土遺物3		145
写真16	出土遺物4		146
写真17	出土遺物5		147
写真18	出土遺物6		148
写真19	出土遺物7		149
写真20	出土遺物8		150
写真21	出土遺物9		151
写真22	出土遺物10		152
写真23	出土遺物11		153
写真24	出土遺物12		154
写真25	鐵鎌	石鎌	155
写真26	石包丁	石斧	156
写真27	器台状ミニチュア土器	ガラス製勾玉、管玉	157

I章 調査に至る経過

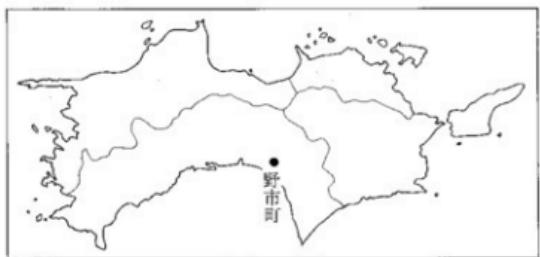
野市町本村遺跡の発掘調査は、野市町本村地区の区画整理事業に伴う緊急発掘調査として、平成3年度に試掘調査を実施し、続いて平成4年度に本発掘調査を行った。

本村地区は、園芸農業の盛んな野市町の中でも、花卉園芸を盛んに行っている地域であるが、同地区では排水路を有しない水田が多い。現在ある用排水兼用の水路は、老朽化が進み漏水も見られる。このため地区内の耕地は常時地下水位が上昇しており、半湿田の状態で主要作物のスカーチスの生産性の向上にとって大きな妨げとなっている。また農道の整備も遅れており大型機械の導入ができないことも生産性向上を阻害する一つの要因となっていた。このような状況を受け、同地区では、平成3年度より土地改良組合を組織し、約10.5haを対象に平成5年まで農林水産省より補助金を受け区画整理事業を行うこととなった。

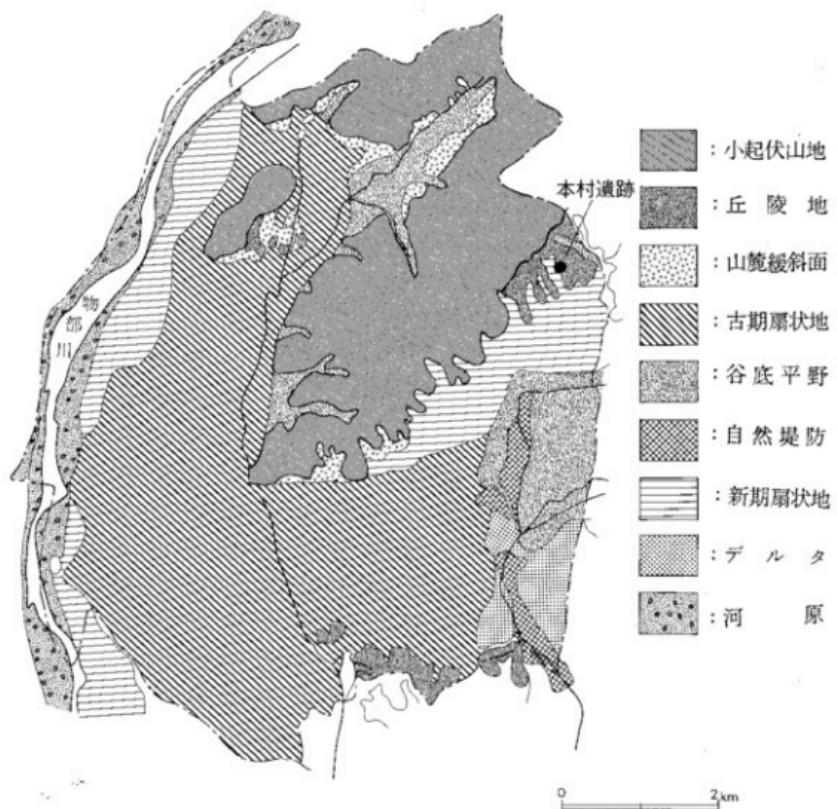
当該工事区域内には、遺物の散布地である野市町本村遺跡の所在が高知県教育委員会により確認されており、平成3年9月より事業に先立つ試掘調査が実施された。試掘調査は平成3年度中に合計3回に及び、野市町本村遺跡が弥生時代の集落遺跡であることが確認された。特に11月14日より行われた第二次試掘調査は一部本調査を兼ねて行われ、堅穴住居址2棟を確認し記録保存を行い計画地中央部に位置する低丘陵に集落が営まれていたことを確認した。

このような試掘調査の結果を受け、文化財保護部局と開発部局との間で数度にわたる協議が持たれ、本村遺跡保存の方途が探られたが、現状での保存は困難であるという結論に達し、工事が地下の埋蔵文化財に影響を与える範囲を発掘調査し、本村遺跡の性格を明らかにするとともに記録保存を行うことになった。発掘調査は野市町教育委員会が主体として行われたが、同県教育委員会には、埋蔵文化財専門職員が配置されておらず、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターより専門職員の派遣を受け平成4年5月11日から7月31日まで調査が行われた。

調査は前年度、堅穴住居址が確認された調査区中央部の低丘陵が当該工事において全面的に削平されるため、この部分を中心に行うことになった。高知県では丘陵部の本格的な調査は現在まで行われておらず、今回の本村遺跡の発掘調査に大きな期待がかけられていた。本調査は、高知県において丘陵部に営まれた弥生時代の集落の全体像解明の端緒を開く契機となった。



第1図 野市町位置図



第2図 本村遺跡の位置

(土地分類基本調査図「高知」より)

II章 地理的環境

野市町本村遺跡の所在する香美郡野市町は、高知県の中央部に広がる高知平野の東端に位置し西を南国市、東を香我美町に接し、北側は開拓山地で土佐山田町と分けられる。南側は吉川村、赤岡町と境を接し土佐湾へと向いている。町役場の位置は北緯33度33分37秒、東経133度42分12秒である。面積は約23.15km²、人口約1万3,000人で、古代以来交通が発達し、現在も県都高知市と県東部を結ぶ幹線である国道55号線が走るなど交通の便が良く、近年は高知市郊外のベットタウンとして人口が年々増加している。主要産業としては、江戸時代に漁港施設が整えられて以来、穀倉地帯として米作が盛んであったが、現在は温暖な気候と交通の便の良さを生かした近郊型の園芸農業が盛んになっている。

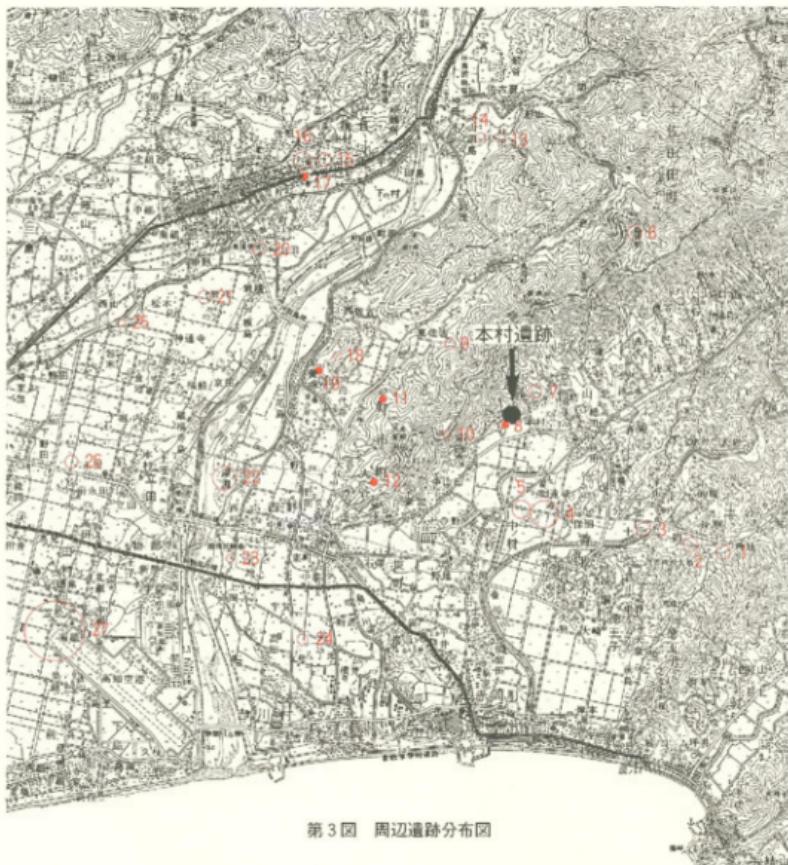
野市町は自然地理学的には、山地部と物部川左岸の古期扇状地性の台地状平地に大別され、これに付随する形で野市町の地形はいくつかに分類することができる。(第2図参照)

現在の市街地は、物部川の下流左岸に発達した古期扇状地性の台地状平地に立地している。この古期扇状地性の台地は海拔高度40~10mを測り、同町から南に向かって高度を下げ、沖積平野につながる。古期扇状地は同町山下を扇頂として秋葉山系西端の三宝山山麓部でさえぎられた物部川の堆積物が東南側に広がることで形成されたと考えられる。このように野市町の地形を特徴づける物部川は、その源を剣山山地の白髪山(1,770m)に発し山間部を仏像構造線に添って西南流し吉川村に至って土佐湾へ注ぐ。その流域は1市3町2村に及び、多くの河岸段丘を形成し、その河口に肥沃な香長平野を形成する。また物部川はその流域の多くの人々を養い、文化を育てた川でもある。その流域に添っては縄文時代の遺跡を始め弥生時代、古代、中世と連続とつづく数多くの遺跡が見られる。その代表が河口の南国市田村に広がる田村遺跡群であろう。

もうひとつ野市町の地理的特徴付けをなしているものに、野市町のほぼ中央部に位置している山地がある。特に開拓山(368.2m)を最高峰とし三宝山へと続く秋葉山系は同町の中央部に位置し、南に向かって多くの支谷を発達させている。この山系の斜面は全般に緩やかであるが基盤岩石であるチャート石灰岩の分布により急峻な斜面をなす部分も見られる。三宝山は地質学的に有名であり、秩父帯と四万十帯の境界をなす仏像境界線がその南麓を走り北側と南側の地質構造を分けている。

本村遺跡の所在する本村は秋葉山系南の丘陵地に位置する。この丘陵地は起伏が小さく約70mで定高性が見られ谷の開析が進み、谷状の地形が多く見られる。谷底平野は南に向かって高度を下げながら海岸に至る沖積平野へと続く、この沖積平野は、香宗川、山北川の堆積作用によって形成されたものと考えられる。香宗川は流域に多量の木器が出土し弥生前期の遺跡である下分遠崎遺跡が所在する。今回の調査によって本村遺跡は貴重な資料を提供すると共に本村周辺に弥生中期の丘陵地に立地する新たな遺跡の存在の可能性を推定させることになった。

参考 野市町教育委員会『野市町史』上巻



第3図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡分布表

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	鶴原遺跡	弥生～古墳	10	猪ヶ崎遺跡	弥生	19	父養寺古墳	古墳
2	坪原遺跡	縄文～中世	11	翁ノ内古墳	古墳	20	原遺跡	弥生～古墳
3	十万遺跡	縄文～近世	12	大谷古墳	古墳	21	大瀬遺跡	奈良～平安
4	下分遺跡遺跡	弥生	13	林田遺跡	弥生～古墳	22	諸國遺跡	弥生～近世
5	曾我遺跡	縄文～中世	14	森田シタノガ遺跡	縄文～近世	23	北地遺跡	弥生
6	熊河洞遺跡	弥生	15	ひのき遺跡	弥生～古墳	24	下井遺跡	平安
7	宮家城跡	中世	16	ひのき古墳	弥生～中世	25	金地遺跡	弥生～中世
8	大峰山古墳	古墳	17	伏原大塚古墳	吉墳	26	甲村遺跡群	弥生
9	兎ヶ岩洞穴遺跡	弥生	18	龜山窪跡	平安	27	田村遺跡群	縄文～近世

III章 歴史的環境

野市町本村遺跡は、香美郡野市町に所在する弥生時代中期の遺跡である。香美郡には縄文時代以来の遺跡が数多く見られ、香美郡が高知県においても早くから開けた地域であることを物語っている。香美郡の遺跡の分布は大きく2つに分けられる。ひとつは高知県と徳島県の県境にその源を発する物部川の流域と、香我美町と野市町を分けて流れる香宗川の流域とに大別される。

特に物部川流域には多くの遺跡が見られるがその代表的なものが、河口右岸に広がる田村遺跡群であろう。田村遺跡群は縄文以来中世の環濠集落までの複合遺跡であり高知県下最大の遺跡である。この田村遺跡は物部川河口流域の弥生時代初期の母村と考えられ弥生文化、初期農耕の伝播を考えるうえで重要な遺跡である。また間楽山地をはさんで野市町と隣り合う土佐山田町でも、高知県東部の弥生後期の土器型式、ひびのきI式・ひびのきII式の標準遺跡であるひびのき遺跡等多くの遺跡が所在する。特に弥生時代中期の洞穴遺跡である龍河洞遺跡は三宝山によって当野市本村遺跡につづく遺跡であり、時期的にも同一と考えられ、本遺跡の性格を解明するうえで重要な遺跡である。

香宗川流域では香我美町の下分遠崎遺跡、十万遺跡が縄文晩期の遺跡である。下分遠崎遺跡は弥生時代初期の土器が発見されるとともに、多量の木器が出土したことから香宗川流域の弥生時代の集落の母村的役割を担っていたと考えられる。またすぐ隣の曾我遺跡では奈良時代～平安時代の遺物遺構中心であるが弥生時代の遺物も含まれており、地域的には下分遠崎遺跡と同一遺跡群と考えられる。この遺跡の他にも押原遺跡、稗地遺跡等が弥生時代の遺跡として知られている。

野市町にも多くの遺跡が所在し、その歴史は深淵遺跡出土の遺物によって縄文時代まで遡ることができる。弥生時代では前の曾我遺跡等を挙げることが出来るが、本遺跡と同時期と考えられる弥生時代中期の遺跡は町内の平野部では現在調査されてない。しかし、三宝山では同時期の高地性集落と思われる遺跡が2つ報告されている。同町は古墳時代に入ても集落は営まれ続地方豪族の萌芽がみられ、近年調査が行なわれ大きな成果を得ることが出来た大谷古墳や本村に所在し、この地区を考えるうえで見逃すことの出来ない大崎山古墳などの古墳が築かれた。また古代に入ても、深淵遺跡から二彩陶器、縁種陶器、墨書き土器等が出土しており、官衙関係の性格を持つ遺跡と言え、この地域が社会的にも経済的にも順調に発展した事をうかがわせる。

同町の遺跡の中でも特に本遺跡との関係が注目されるものとして、三宝山の上に営まれた鬼ヶ岩屋洞穴遺跡と笛が峰遺跡がある。弥生時代中期は遺跡が低地から比較的の高地である丘陵上や山頂部に上がってくる時期であり、これらの遺跡は比較的低い位置に営まれた遺跡の物見の役割を担うものと考えられ、低丘陵上に営まれた本遺跡との関係は同時期の社会的状況などを明らかにする上で重要である。

IV章 調査の概要

本村遺跡は、平成3年度に行われた3度の試掘調査、それに引き続いた本発掘調査が平成4年度に行われた。

1. 調査区の概要

調査対象地は、香美郡野市町本村玉尾1241、ハブヤシキ744-1等の約10.5haである。北側は三宝山山系である。この山系の南斜面は開拓の進んだ丘陵地になっている。当該工事対象区中央部にはこの山系より派生した標高約30mの低丘陵が位置し、同工事対象区を東西に2分している。平成3年度の試掘調査では工事区域内すべてを対象に任意のトレンチによる調査が行われ、平成4年度に行われた本調査ではこの丘陵を含む西側部分の馬蹄形をした谷を調査区域とした。調査は前年度実施した試掘調査によって遺構の存在が確認された谷の東側斜面に約1,500m²を調査区に設定して行われた。調査区の調査前の状況は段畝状に開墾され蜜柑畑となっていた。現況から削平が行われた部分が多く遺構の残存状態は良くないであろうと予想された。しかし、一部には緩やかな斜面となり平場をなしている部分がありここから試掘調査で遺構が確認されておりこの部分を中心に調査I区を設定した。試掘調査でこの斜面に對面する谷の西側斜面から土器の集中出土地点が確認されており本調査では調査II区を設定した。なお調査I区は各段ごとにI-A～F区に分けられる。調査II区はII-A～B区にわける。

2. 調査の概要

(1) 試掘調査の概要

- ① 平成3年度に行われた第一次試掘調査は、9月9日から行った。調査は工事区域内がすべて対象であるが、道路、水路等埋蔵文化財に影響を与える部分に任意に2m×4mのトレンチを設定して行った。中央部の丘陵は全体が削平の対象となるため確認調査が必要であったが蜜柑畑であったため第一次試掘調査では行えなかった。この試掘調査では県道山北線に接した標高約15m程の所では地下水位が高く約1m掘り下げる、水が出始める状況であった。18ヶ所のトレンチの内、遺物包含層が確認できたのは隣り合った2ヶ所のみであった。このうちTR14では弥生土器が多量に出土し本発掘調査が必要と判断された。
- ② 第二次試掘調査は11月14日から前回の調査で残された丘陵の南半分を対象に行われ、丘陵西側斜面（馬蹄形の谷東側斜面）から2棟の住居址が検出された。この部分については当圃場整備工事のため今回の調査で記録を行い丘陵南半分の調査を完了した。
- ③ 第三次試掘調査は、第二次試掘調査の結果を受け平成4年1月16日から丘陵の北半分の西側斜面の調査を行い、遺跡の広がりを確認するため実施した。結果、遺構の可能性のある遺物集中出土地点が確認される。段畝によって削平されている部分はあるが、遺物包含層が西側斜面に残っていることが判明し工事に先立つ本発掘調査を実施する必要があると判断された。

(2) 本調査の概要

本発掘調査は平成4年5月11日から7月31日まで行われた。I-A区では、近世と考えられる土坑5基、溝2条が検出された。弥生時代と考えられる遺構は土坑1基のみで埋土からは弥生土器の細片と磨製石斧が出土している。I-B区は柵列と考えられる遺構1条、方形の土坑が検出されこの土坑からは弥生時代中期の土器と伴に鉄鏃が2点出土している。I-C区からは溝状遺構、土坑1基、竪穴住居址1棟が検出されており何れも弥生時代中期の土器が出土している。また、斜面を段状に整地した段状遺構と考えられる遺構が検出され埋土からは鉄鏃を含む多量の土器が出土している。I-D区は溝状遺構、ピット群、竪穴住居址1棟が検出され埋土からガラス製勾玉、管玉が2点出土した。I-E区は削平が著しく、遺構、遺物ともに確認できなかった。地形的に考えても遺構、遺物ともに存在の可能性は低いと思われる。I-F区では竪穴住居址を1棟検出できたが、残存状況は不良でその他の遺構については確認できなかった。I-D区では弥生時代の溝状遺構、古代と思われる溝状遺構が検出されている。

II-A区は大きく2つに分けられる。ひとつは、試掘調査において弥生土器が多量に出土した地点である。ここは谷状地形が埋まると考えられ、今回の調査においても多量の弥生土器が出土した。もうひとつは、旧谷をはさんだ南側と北側で検出されたピット群である。このピットからは土師質土器が出土している。II-B区では竪穴住居址が1棟確認されている。

本遺跡の出土遺構、遺物ともに弥生時代中期のものが大半を占める。

3. 基本層序

本村遺跡の調査区は大きく2つに分けることができる。基本層序も山側の調査I区と、谷状地形が土砂によって埋没した調査II-A区ではその堆積状況はまったく違う。

(1) 調査I区

調査I区は現況段畠であるが、丘陵の西側斜面であり、その現況段畠端部に堆積した土層が残存している状況であった。遺構が検出できたのは黄橙色粘質土と黒色粘質土である。黄橙色粘質土はこの丘陵を形成している洪積層と思われ無遺物層である。黒色粘質土層は基盤層である黄橙色粘質土が有機物によって土壤化したと考えられるが、この土層にも遺物は入っていない。遺物包含層は暗灰色粘質土と茶褐色粘質土であるが、暗灰色粘質土中には、古墳時代の遺物が若干ではあるが混じっており、純粹な弥生中期後半の包含層ではない。茶褐色粘質土は遺構の埋土であり、ほぼ弥生中期の包含層に相当すると考えられるが、残存状況は良くない。この上層については遺物をほとんど含まないが土壤化された土と黄橙色粘質土のブロックが混じった層がみられこの丘陵部が何度も開墾によって段畠が広げられたときの物と考えられる。

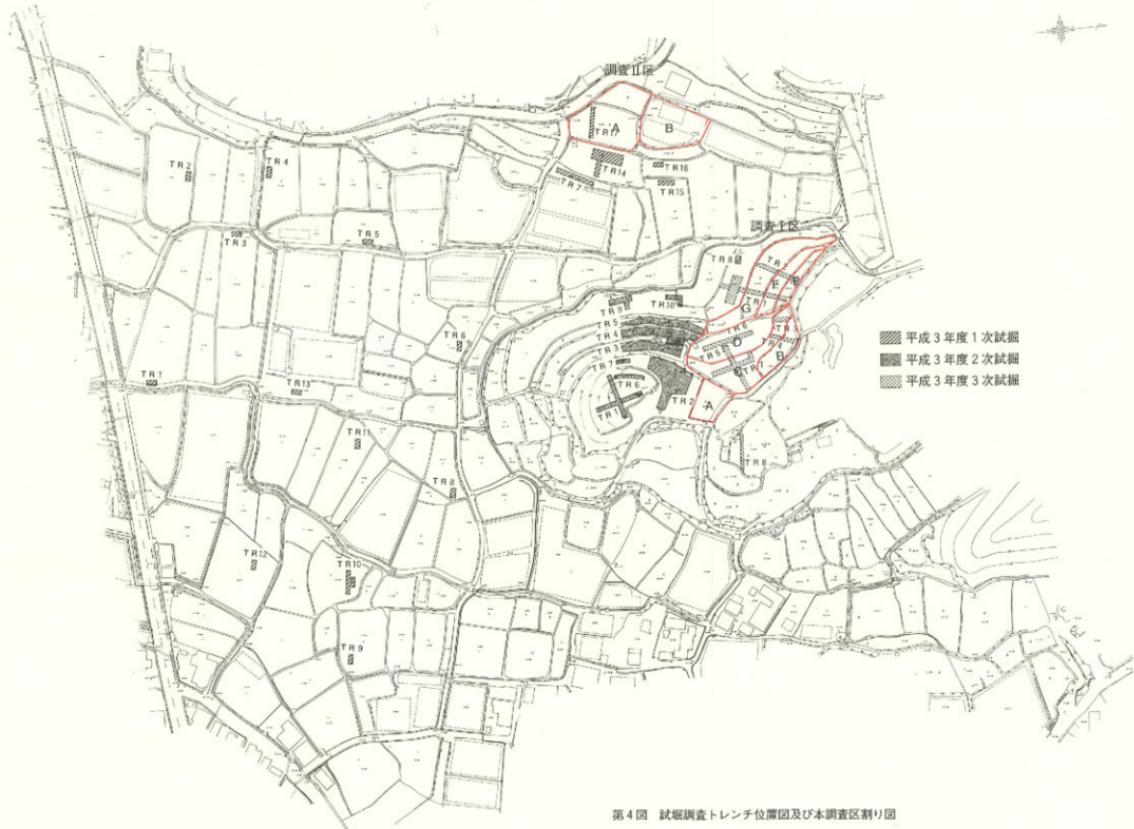
(2) 調査II-A区旧谷状地形

調査II区から検出された旧谷状地形の埋土中からは弥生土器が多量に出土した。埋土は粘土層と砂礫層が互層になっている。わずかに有機物を含み黒色化している層もみられるが、弥生

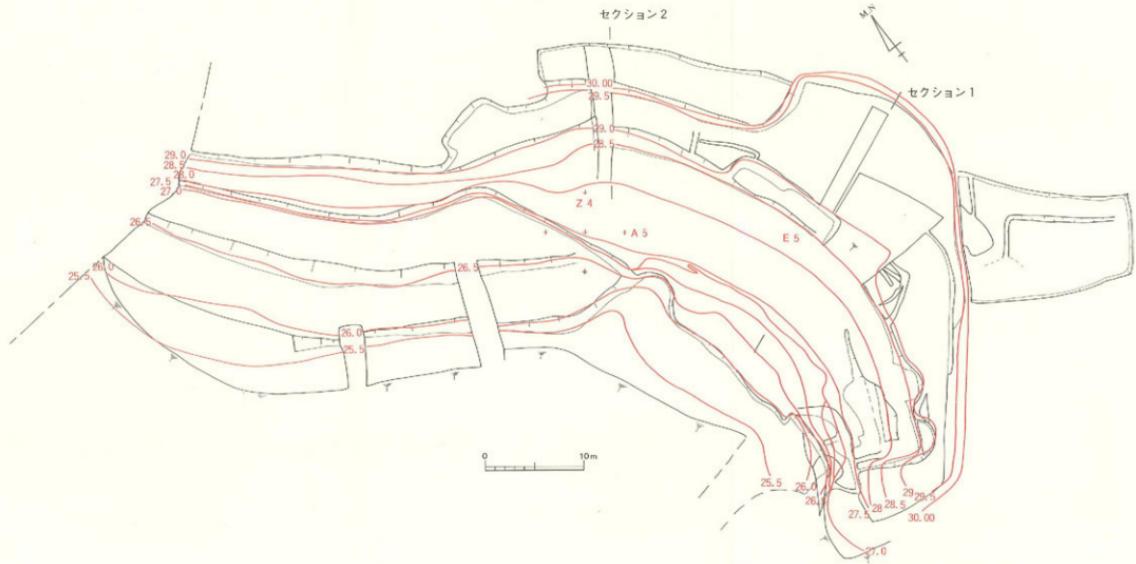
時代前期と後期初頭に起きたと考えられる斜面の崩壊によって埋没したと考えられる。現在もこの部分については地下水位が高く、旧谷状地形を埋めた山土は土質粘土化している。地山は調査Ⅰ区と同じで黄橙色粘質土で、旧谷状地形の基底層も黄橙色粘質土だが粘土化しており黄白色粘土である。

(3) 調査Ⅱ-B区

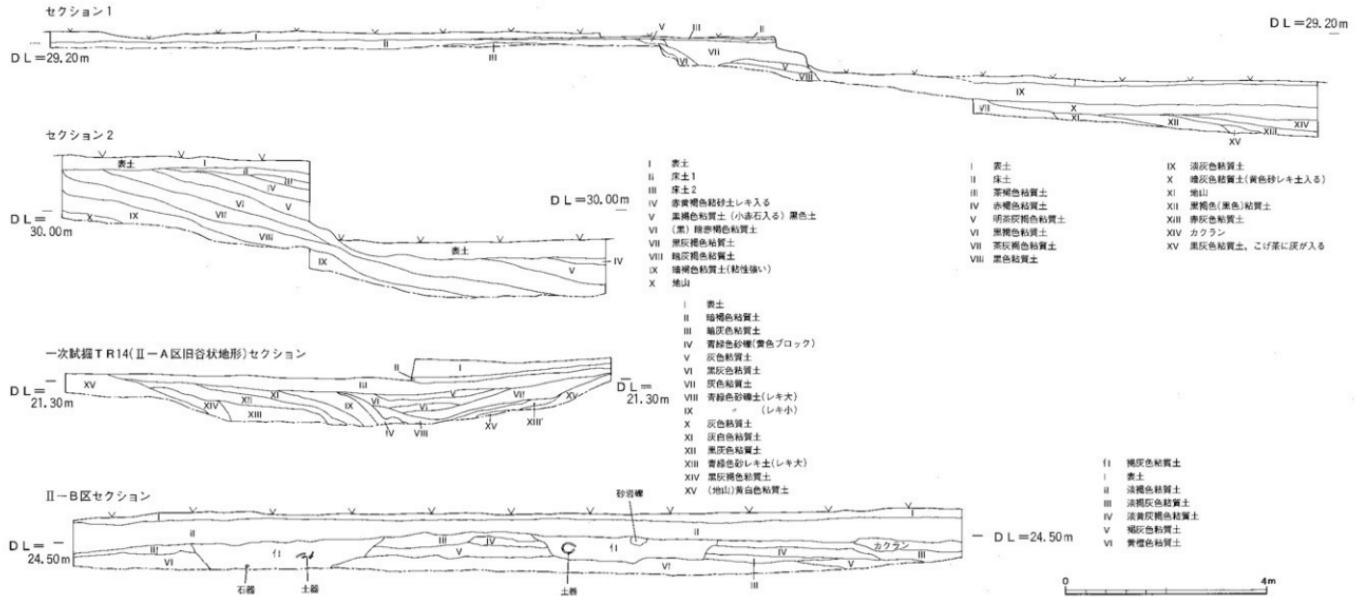
調査Ⅱ-B区は、Ⅱ-A区の北隣で一段上の標高約23.3mである。Ⅱ-A区と違い丘陵の張り出し部にあたり、住居址が検出されたように丘陵の緩斜面であったと考えられ、その層位は調査Ⅰ区とほぼ対応すると考えられる。基底層は黄橙色粘質土である。遺構の埋土は褐灰色粘質土で、淡褐灰色粘質土から掘り込まれており、遺構を平面プランで確認することは困難であった。Ⅱ-B区からはST6が一棟検出されているが、セクション図ではST6と同一の層位から掘り込まれ、同じ埋土の遺構が確認できる。住居址よりやや小さく掘り込みも浅いことから土坑であったと考えられる。包含層は、やはり段畝として造成された時に削平されたものと考えられる。



第4図 試掘調査トレンチ位置図及び本調査区割り図

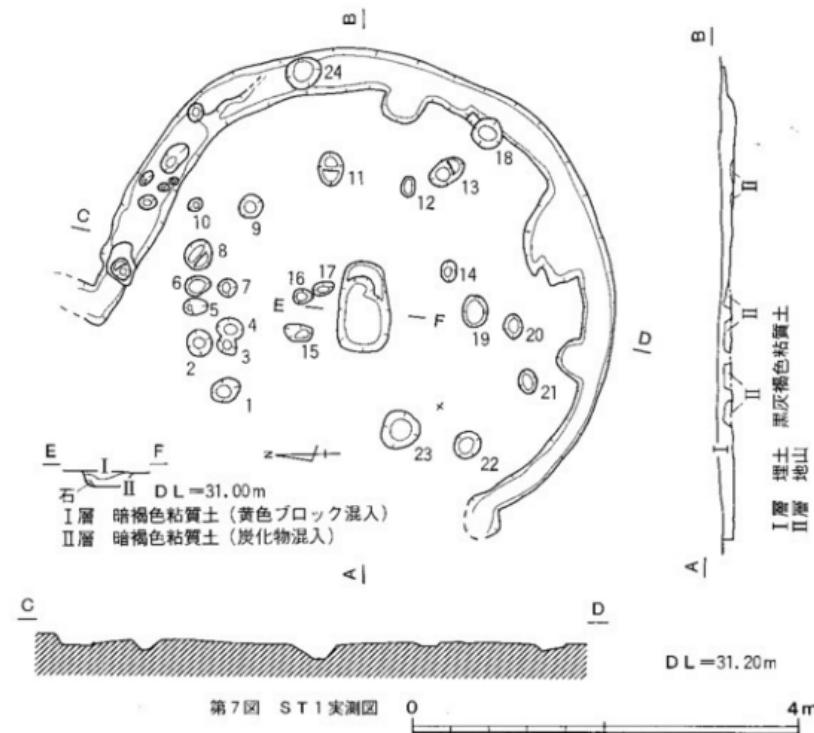


第5図 調査I区地形図



第6図 基本層序

V章 遺 構



第7図 ST 1 実測図

調査Ⅰ区

ST 1

ST 1は丘陵頂上の下段(標高約31.0m)

から検出された。近世に行われたと考えられる開墾によって、掘り方は削平され、壁は殆ど残存していない。平面プランは表土直下から検出され半円形状を呈し直径は約5.2mを測る。岩盤を掘り込んで作られている。床面からは、中央ピット、柱穴及び小ピット、壁溝を検出した。床面は平坦で標高30.8mを測る。

中央ピットは、ほぼ住居址の中央に位置し長軸100cm、短軸65cm深さ約15cmを測る角丸の長方形で底は2段になっていた。長

第2表 ST 1 ピット計測表

ピット番号	平面プラン	横(底×高さ)	深さ(cm)	蓋 物	備 考
P 1	楕円形	44×30	15		
P 2	楕円形	50×30	26		
P 3	不整形な円形	25×20	17		
P 4	楕円形	39×32	4		
P 5	楕円形	26×18	3		
P 6	楕円形	39×20	3		
P 7	不整形な円形	23×20	28	外生土器	
P 8	同上	39×32	10		
P 9	同上	25×25	33		
P 10	同上	15×15	4		
P 11	楕円形	35×28	5, 18		
P 12	不整形な楕円形	22×15	3	外生土器	底面が2段
P 13	楕円形	49×25	7, 50		
P 14	同上	23×17	3		
P 15	不整形な楕円形	39×19	16		
P 16	同上	23×15	6		
P 17	同上	24×15	9		
P 18	円形	32×32	32	外生土器	
P 19	楕円形	35×25	4		
P 20	不整形な楕円形	39×20	6		
P 21	楕円形	25×20	4		
P 22	円形	39×30	17		
P 23	不整形な円形	42×43	39		
P 24	同上	38×33	24		

軸方向はN-83°-Wであった。埋土は暗褐色粘質土と炭化物の混じった暗褐色粘質土の二層に分層される。これらから中央ビットは炉として使用されたと考えられる。

ビットは概して浅く主柱穴になりうる径が20cm以上の比較的大きなビット、深さ30cm以上のビットから推測すると円形に住居址を巡るものであったと考えられる。

壁溝は住居址の壁に沿って巡っており幅約40cmを測り深さは深いところで約10cmで3ヶ所の張り出し部分がある。柱穴となりうるビット3個が壁溝中から検出されている。埋土中からは弥生土器片が出土しているが図示できたのは、No.1の平底の底部のみである。その他砥石、敲石が出土している。

住居址の埋土は單一層の暗褐色粘質土で削平によってほとんどなくなっていた。遺物の出土も少なかったが、大部分が床面上からの出土であった。弥生土器が約70点出土しているがいずれも細片で図示出来たのは、No.1, 2の2点のみであった。また石製品もNo.441の石包丁の1点と、その他、砂岩の河原石、擦痕が若干みられる円礫が出土したのみで時代の特定が出来る遺物の出土はなかった。ビット、中央ビット、壁溝の埋土は同一の暗褐色粘質土であった。ビットの埋土からの土器の出土も少なくP7, P12, P18のみである。中央ビットからは弥生土器片が4点出土している。いずれも細片で図示できなかった。

S T 2

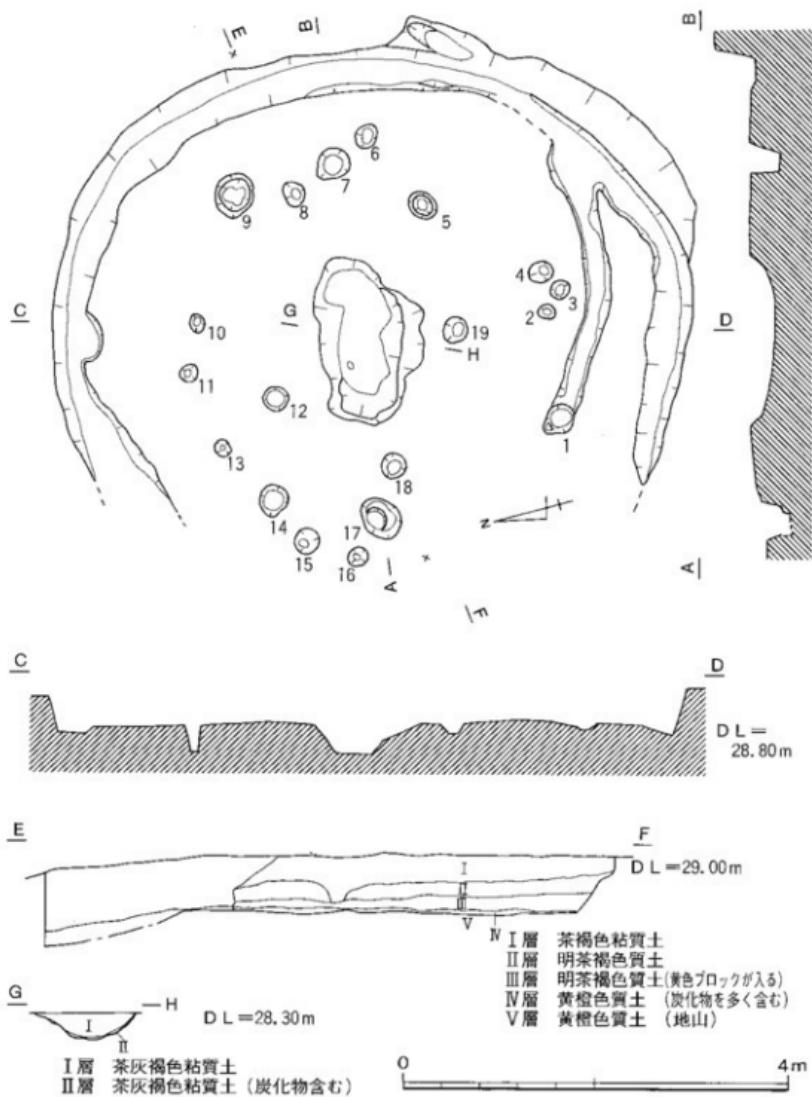
S T 2はS T 1が検出された真下に位置する現況標高約29.2mの段階から検出された。プランはやや椭円の半円形を呈し椭円の長軸は約6.7mを測る。残存の状況は比較的良好で斜面側では表土下からは、約80cmの壁高を測ることができる。開口側は後世の段階による削平によって壁は残存しないが床面は削平をうけていないとみられる。岩盤を掘り込んで作られており、床面は平坦で標高約27.8mである。床面からは、中央ビット、ビット、壁溝が検出されている。壁高は途中で2条に分かれている。

第3表 S T 2ビット計測表

ビット番号	平面プラン	径(横×縦)cm	深さ(cm)	遺物	備考
P 1	楕円形	40×35	25		
P 2	円形	16×18	22		
P 3	開口	21×20	17		
P 4	楕円形	27×22	10		
P 5	開口	33×26	25		
P 6	開口	25×22	24		
P 7	不整形な楕円形	40×30	33		
P 8	開口	30×22	30		
P 9	開口	50×40	60		
P 10	円形	20×18	30		
P 11	不整形な円形	20×18	23		
P 12	円形	26×25	3		
P 13	開口	18×18	20		
P 14	不整形な楕円形	34×30	10	弥生土器片	
P 15	円形	27×25	15		
P 16	開口	18×18	27		
P 17	不整形な楕円形	47×60	38	弥生土器片	
P 18	円形	28×27	6		
P 19	開口	27×25	28		

中央ビットは住居址のほぼ中央に位置し長軸180cm、短軸110cm、深さ約28cmを測る不整形な楕円形を呈し、底は2段になっている。長軸方向はN-87°-Wである。拡張の可能性も考えられるが、埋土的には区別できない。中央ビットの底は炭化物が堆積し1層を形成しており炉として使用されたと考えられる。

検出されたビットは、19個で埋土は全て同一であった。主柱穴となり得る柱穴はP 1, P 5,



第8図 ST 2 実測図

P7, P9, P14, P15, P17であるが、その他にピットの直径が20cm以下だが深さが20cm以上のP2, P6, P8, P10, P11, P13, P16が検出されている。

壁溝は住居址の壁際を巡るが途中2条に別れ、一方は、壁際に巡る壁溝に並行する様に端部で約65cm内側を巡る。埋土中からはほとんど遺物は出土していない。二条に別れる壁溝はこの住居址の建て替え、拡張の可能性を推定させるが、他の遺構と同様に埋土の差異は認められず、確定は出来ない。

住居址の埋土は3層に分層される。表土下のI層は整地層と思われ、ここから掘り込んだピットが検出されている。遺物は弥生土器、近世陶磁器が出土しており近世に整地されたと思われる。II・III層は明茶褐色粘質土層で弥生土器が入り上のほうのI層との境には、わずかに近世陶磁器が混じるが下III層の部分は弥生時代の純粹な包含層である。IV・V層は黄橙色粘質土層である。床面上には炭化物を含んだIV層が約4cmの厚さで堆積している。住居址の埋土中からは、弥生土器片が出土しているが残存状況は不良で図示出来る土器は少なく、No.3・4の底部、高坏脚、凹線の入った壺の口縁のみであった。石製品ではNo.424の凸基式有茎石鏃が出土している。石包丁は、No.442の形態的には打製であるが研磨によって仕上げられたものが出土している。床面からは炭化物が多く検出され、炭化物が検出される範囲からはサヌカイトの剝片が多く出土し住居址内において石器が製作されていたと考えられる。中央ピットからは壺と思われる土器片、砥石が出土している。ピットからの出土はP14, P17から土器の細片が出土している。いずれも図示できなかった。並行する2条の壁溝より、住居址の建て替えの可能性が考えられる。北側の壁は拡張されておらず、掘り方の弧は内側をめぐる壁溝の弧と一致する。建て替え前の住居址は元5.2mの直径を持つものであったと考えられ、ほぼ時期を経ずに拡張されたと考えられる。

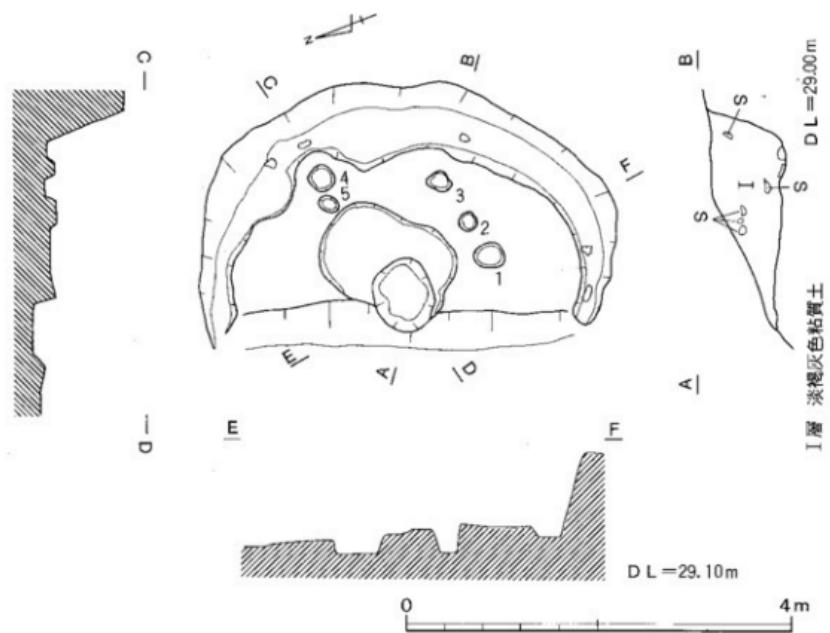
S T 3

S T 2と同じ段から検出されSK3をはさんで北に並ぶ。標高は、ほぼ同じ28.9mを測り、岩盤を掘り込み作られる。プランは他の住居址と同じく半円形を呈して直径約4.5mである。残存の状況は斜面側半分が良好で、床面からの壁高は79cmを測る。しかし、西半分、開口側は壁から約2.2mの所から後世の開墾によって、床面まで削平されている。床面からは中央ピット、ピット、壁溝が検出されている。

中央ピットは住居址のほぼ中央部に位置する。ほぼ円形にちかい楕円形で直径0.8m、深さは約21cmであった。長軸方向はN-73°-Wである。底には炭化物が堆積しがとして使用されたと考えられる。この中央ピットを囲む形で楕円形状の約5cmの浅い掘り込みが確認されている。この掘り込みの埋土は炭化物が混入しており、性格は不明だが何らかの機能を持ったもの

第4表 S T 3 ピット計測表

ピット番号	平面プラン	基(幅×奥)cm	深さ(cm)	遺物	備考
P 1	不規則な楕円形	30×28	2		
P 2	同上	20×17	29		
P 3	同上	27×20	10		
P 4	不規則な楕円形	28×25	9		
P 5	不規則な楕円形	22×15	28		

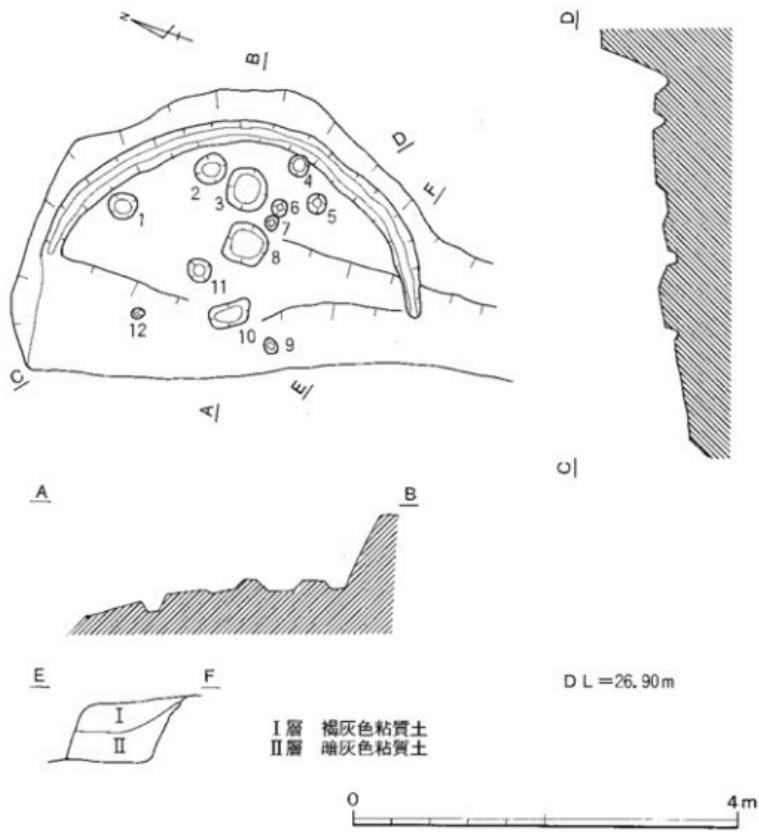


第9図 ST 3 実測図

とは考えにくい。ピットは5個検出されたが西半分の床面が削平されているため、西側部分では検出できなかった。主柱穴は確定できないがP 2～P 4の可能性が考えられる。

壁溝は、壁際を巡り、東側奥の幅は約35cmである。P 4を避ける様に幅を狭くするが、P 4を越えると半円状に張り出す。深さ12cmであった。その他の遺構と同様に西側半分は不明である。

住居址の埋土は淡褐色粘質土に黄色の砂岩のブロックが入る単一層色であるが、やや下半分の色調が濃い。土質は同一である。埋土中から遺物の出土は少ない。床面からの出土としてNo. 7の長頸壺がある。口縁外面と口唇部には凹線文が施されている。その他図示できなかつたが凹線文の口縁の壺、甕の底部等が出土している。その他検出されたピット、壁溝の埋土は單一で褐色粘質土であった。ピットからの遺物の出土はないが、壁溝からはミニチュアの壺（No. 10）がほぼ完形で出土している。また、ほぼ同一地点から口唇下に刻み目をもつ貼り付け口縁の壺の口縁部も出土している。その他、凝灰岩製で両面から抉った砥石の可能性のある有孔石製品（No. 504）が出土している。中央ピットからは炭化物の層から砂岩製のミニチュアの器台、粘土製のミニチュア器台が各1点出土している。



第10図 ST 4 実測図

ST 4

調査D区端部から検出された住居址である。

D区端部は後世の開墾によって、山側の斜面の土が盛り土されており調査前の標高は、28.4mで、下段とは調査前の比高差が約2.5mであった。この客土を除去した結果、住居址が検出された標高は、26.8mである。他の住居址が基底層を掘り込んでいるのと違い、黒色土層から掘り込まれてい

第5表 ST 4 ピット計測表

ピット番号	平面プラン	底(長×短m)	深さ(m)	遺物	備考
P 1	円形	30×28	14		
P 2	椭円形	30×35	8		
P 3	円上	52×42	10		
P 4	不整形な椭円形	25×20	4		
P 5	不整形な円形	22×20	12		
P 6	円形	18×18	4		
P 7	円上	18×18	4		
P 8	方形	44×45	4		
P 9	不整形な円形	15×15	18		
P 10	不整形な長方形	44×25	15		
P 11	椭円形	27×21	10		
P 12	円形	12×12	10		

る。壁高は68cmであった。平面プランは西側半分が削平されたため、半円形状で検出され直径は4.25mであった。床面の標高26.0mで床面からは中央ピットと考えられる方形のピット、ピット、壁溝が検出されているが削平のため、西側では遺構は検出できなかった。中央ピットの主軸方向はN-89°-Wである。

検出できたピットは12個である。埋土は、暗灰色粘質土である。黄橙色のブロックが入るものと入らないものとに別れるが、基本的には同一のものと思われる。P1、P2が主柱穴と思われるが、構造形式は不明である。P3は円形のピットで42cm×52cm、深さ10cmと他のピットと比べると大きく炉及び貯蔵穴の可能性も考えられる。

P8が中央ピットになると考えられ、44cm×45cmの方形で深さは4cmであった。埋土中からは炭化物は検出されず、炉として使用された可能性は否定できないが用途は不明である。

住居址の埋土はI層褐色灰色粘質土とII層黒灰色粘質土の2層に分層できる。I層からはサヌカイト片がII層に比べて多く出土している。土器は、凹線文を持つNo.13の広口壺、貼り付け口縁の壺、口縁を肥厚し沈線状の凹線文が施されたNo.14の壺、復元口径が33cmと25cmになる口縁外面に装飾が施された大型高壺（No.19・20）の口縁が2個体出土している。ミニチュアも2点が出土している。石製品は管玉が2点壁溝中より出土するのみである。その他住居址の埋土出土で、注目される遺物としてガラス製の勾玉が挙げられる。壁溝から出土した2点の碧玉製管玉がこれに伴うと考えられる。

S T 5

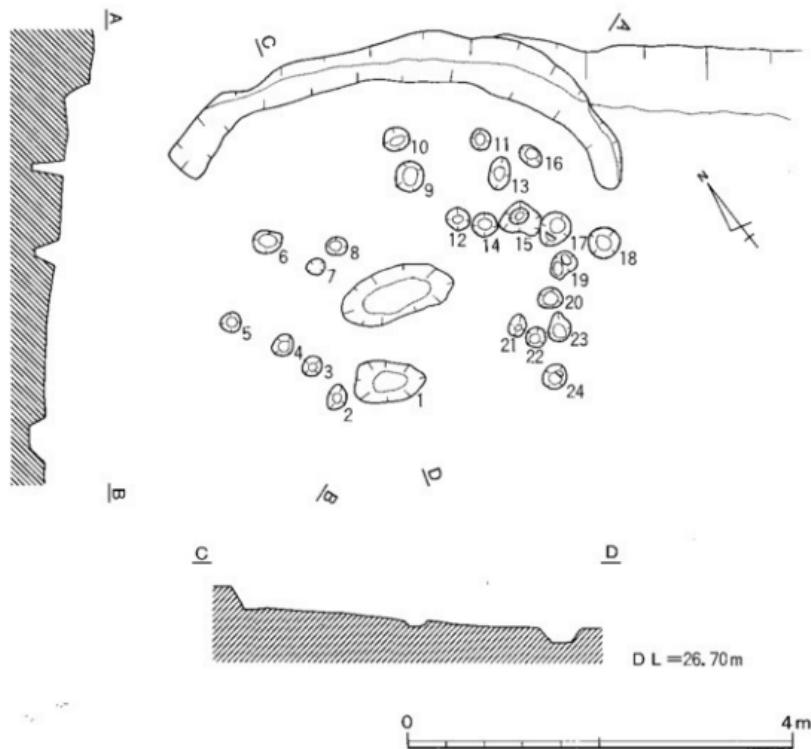
S T 5は、調査G区の北側、調査区域のほぼ北端から検出され、他の住居址からはやや離れた。段畳によって削平されており、壁、壁溝は一部しか残存していない。復元した住居址の大きさは、直径約5.6mで、標高26.4mの平坦な段の中に収まっており、床面からは中央ピット、ピットを検出することが出来た。岩盤を掘り込み作られ、段畠造成による削平のため残存する壁高は24cmであった。中央ピットは住居址の中央に位置し長軸121cm、短軸53cmの楕円形を呈する。長軸方向はN-69°-Wで断面U字状である。埋土中からは炭化物は検出していないが、図示できない細片の土器とサヌカイト片が出土している。ピットは24個検出され埋土は全て同一であった。主柱穴と考えら

第6表 S T 5 ピット計測表

ピット番号	平面プラン	（横×高）cm	深さ（cm）	遺物	備考
P 1	不整形な楕円形	74×43	14		
P 2	同上	21	21		
P 3	円形	22	9		
P 4	同上	22×23	7	焼土+器	
P 5	同上	20×20	11		
P 6	同上	30×28	20	赤土土器	
P 7	同上	18×18	8	同上	
P 8	同上	23×20	7		
P 9	同上	30×30	21		
P 10	同上	35×27	39		
P 11	同上	25×22	35		
P 12	同上	25×23	4	赤土土器	
P 13	楕円形	36×24			
P 14	円形	27×27	26		
P 15	不整形な楕円形	45×32	21		
P 16	楕円形	28×20	34		
P 17	楕円形	46×33	27	発生土器	底面が2段
P 18	円形	32×32	18		
P 19	不整形な楕円形	36×25	9, 28		底面が2段
P 20	円形	25×22	10		
P 21	楕円形	23×20	7		
P 22	円形	21×21	18		
P 23	不整形な楕円形	32×25	19		
P 24	楕円形	27×27	7		

れるピットは、P 1, P 5, P 6, P 9, P 14, P 20, P 24であり、5本柱の構造が推定される。P 14は長軸74cm短軸43cm、深さは約14cmを測る楕円形で他のピットと比べて大きく長軸方向もほぼ中央ピットと一致する。埋土中からは炭化物、焼土は検出されず、貯蔵穴の可能性も考えられるが、主柱穴となりうるピットが多いことから建て替えが行われた可能性もありその時期の炉跡とも考えられる。壁溝はほとんどが削平され、上段側に約1mが残っており幅は広いところで約35cm、深さ1.2cmが残るのみであった。

遺構の埋土は全て同一で黒褐色粘質土であった。遺物は、住居址の埋土が削平されているためほとんどなく、わずかに中央ピット、ピット壁溝から土器、サヌカイト剣片が出土したにすぎない。この住居址から約5m離れた所から、緑色変岩の局部磨製石斧が出土している。



第11図 ST 5 実測図

SK 1

SK 1は、調査A区標高約30.7mの端部の表土直下から検出された。検出された平面プランは長軸方向がN-3°-Wの長方形であった。この土坑は後世の段畑造成、蜜柑畑に伴う溝によって一部切られており、検出された長軸は約5.0m、短軸2.5m、深さ約23cmを測る。底面は、標高約30.0mで平坦な面をなす。埋土は黒灰褐色粘質土であった。埋土中からは、弥生土器片が出土しているが、図示できるものは少ない。

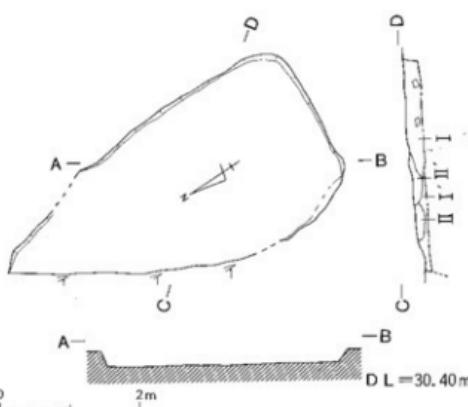
No.30はしっかりした平底の底部である。石製品では御荷鉢緑色岩の磨製石斧No.451が出土している。調査A区では、SK 1の他には弥生時代の遺構と考えられるものは検出されていない。SK 1は弥生時代中期の土坑と考えられる。

SK 2

標高約30.4mの調査B区から検出された。平面プラン方形を呈し、主軸方向はN-52°-Wで、南側が開墾によって削平されている。規模は2.5m×2.2mで深さ約43cmである。底面は標高30mで平坦な面をなす。岩盤を掘り込んでおり埋土は淡灰褐色粘質土の單一層であった。

埋土中からは、鐵鏃をはじめ多量の遺物が出土した。出土した土器は、大部分

が弥生土器中期の土器、土師器と考えられるNo.51も出土している。弥生中期の土器では壺で、口縁端部に凹線文が施された筒状の頸部を持つ広口壺、貼り付け口縁の口縁部、平底の底部、No.42の脚付き壺の底部等が出土している。壺では、くの字に強く屈曲した口縁で壺部は拡張され四線文が施されたものが出土している。また、台形土器や円盤充填法による高壺が出土し、ミニニアも3点出土しておりいずれも煮型である。No.421・422の鐵鏃2点が出土していることが注目される。サヌカイト剣片も出土している。また、東隅では、床面から炭化物が検出される。土坑の時期は不明であるが、弥生時代中期の可能性が考えられる。



第12図 SK 1 実測図



第13図 SK 2 実測図

SK 3

SK 3は、調査C区から検出された。ST 2, ST 3に、はさまれた標高29.0mから検出され、ほぼ同じ標高で並ぶ。平面プランは不整形な角丸方形で後世の削平により、西側が切られた状態で検出された。長軸方向はN-21°-Eである。規模は2.8m×1.7mで、深さは約38cmである。

平面プランが検出された時点では住居址と考えられたが、完掘してみると、住居址と比べると壁高はかなり浅く、ピット、壁溝は検出されず土坑と確認された。岩盤を掘り込みつくられ、底面は平坦な面をなす。埋土はST 3とほぼ同一の淡灰褐色粘質土で礫が混入する。埋土中からは、土器が多く出土している。

出土土器は床面から出土しており弥生中期の土器に限定される。出土した土器は、壺、壺等で、壺は筒型の頸部を持ち口縁罐部が拡張され凹線文が施されるものと貼付口縁のものに分けられる。No.52は上胴部のみの出土であるが上胴部に位置した最大径は約40cmを計り、筒状の頸部には断面三角形の突帯が二条巡らされて波状文が施される。口縁は大きく開き罐部は上下に拡張され四条の凹線文が施されている。装飾が著しい壺である。石製品では、方形で中央部には双孔が穿たれた石包丁No.443が出土している。時期は出土遺物から弥生時代中期後半から後期が考えられる。

SD 1～SD 5

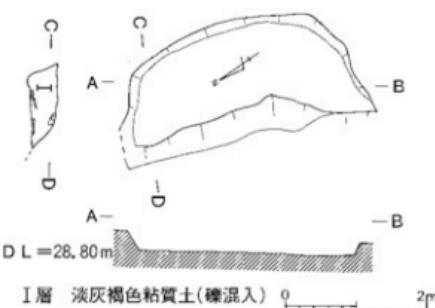
SD 1～SD 5は調査C区から検出された。等高線に添うように密集した5条の溝状遺構である。SD 4は2条に分かれ下段南方向に流れる。

SD 1の規模は幅約40cm、深さは13cmで約1.5mしか残存していない。断面は台形状で北から南に向かって延びSD 4と合流すると考えられる。

SD 2は幅約55cm、深さ約11cmで2.2mが残存しSD 1と同じく断面は台形状を呈し南に向かって延びSD 4に合流する。

SD 3もSD 1, SD 2とほぼ同じ規模、方向で、幅35cm、深さ約9cmを測り、断面は台形を呈しSD 4と合流すると考えられる。

SD 4は、北から南に向かって約1.7m延びたところで2条に分かれ、どちらも西方向に向



第14図 SK 3実測図

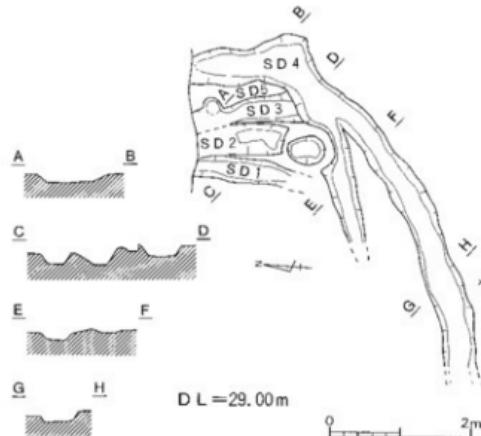
かって平行して延び S D 4 A には S D 1 ~ S D 3 が合流すると考えられる。規模は S D 4 A が幅約 35cm 深さ 9cm である。S D 4 B は幅約 55cm, 深さ約 15cm であり、断面形は台形を呈する。

S D 5 はわずかに 1.4m 残存し S D 1 ~ 4 と平行に並ぶ深さは約 5cm である。

埋土は、S D 1, S D 2 が黒色粘質土に褐色粘質土が混ざった土である。S D 3 は黒色粘質土、S D 4, 5 は黒灰色粘質土である。埋土中からは

弥生土器片が出土している。S D 1 からは No. 59, 60 が出土しており 2 点とも

筒状の頸部から大きくひらいた口縁部を持ち口縁端部下側には刻目が施された壺の口縁部である。出土土器の時期は弥生中期と考えられる。溝状遺構の時期も同様に弥生時代中期から後期にかけてと考えられる。



S D 6

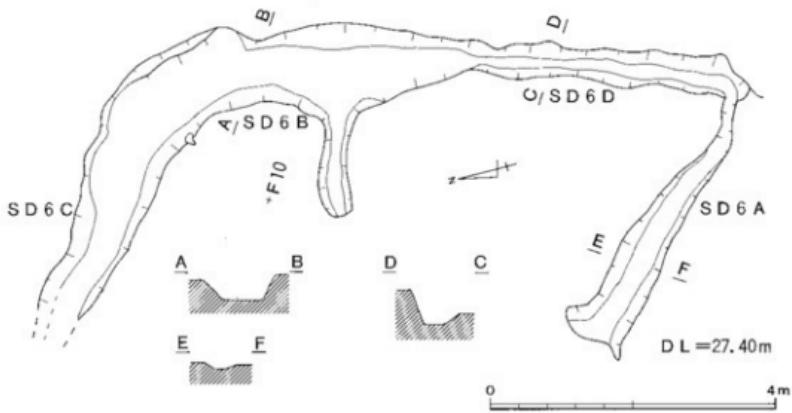
第15図 S D 1 ~ 5 実測図

S D 6 が検出された位置は、調査 D 区で、S K 3, S T 2, S T 3 の下段にある。標高は 27.4m を測り検出時の平面プランはコの字状で西方向に向かって開口する。等高線に添つて斜面に掘り込まれ南東に延びる S D 6 B, D とその両端から西方向下段に延びる北側の S D 6 C, 南側の S D 6 A 部分に分かれ、中央部よりやや北東に短いもう 1 条の溝状遺構が検出されている。S D 6 B, D の規模は長さ約 7.7m で幅は約 40~90cm で S D 6 D 側が狭くなっている。深さは S D 6 D は約 16cm を測り S D 6 B 側は約 10cm である。S D 6 D は斜面下側の立ち上がりがしっかりしており断面形は U 字型を呈する。S D 6 B 側では立ち上がりがはっきりしなく断面形は台形状である。S D 6 C は、幅約 60~120cm 深さ約 20cm を測り約 4m が残存している。S D 6 A は S D 6 D の屈曲部分でわずかに途切れるが約 4m が残存しており幅約 35~105cm で深さは約 10cm であった。

埋土は、S D 6 C を除いてほぼ同一の茶灰褐色粘質土で底面近くがやや濃い色調になっている。S D 6 C は 2 層に分層でき上層は褐色粘質土で下層は黒灰褐色粘質土である。遺物は埋土中から多量に出土しており図示できるものも多いが定形品の出土はなかった。土器は壺、甕、高壺、ミニチュアが出土している。壺は、大部分のものが頸部が筒状で口縁部が大きく開くもので貼付口縁の器形が多く出土している。口縁端部に凹線文が施されたものでは、端部が拡張

されたものとそうでないものに分けられ、拡張されたものはNo.62・63でNo.63は頸部に断面三角形の突帯が1条巡る。またNo.67は口縁端部は拡張されず下部に刻目が施される。No.70は直線的に立ち上がりわずかに外反する装飾のない口縁部を持つ小型の壺である。壺は、くの字状に強く屈曲し短く外側に開く口縁部を持ち端部は凹線文を施された器形が出土する。凹線文を有する器形はさらに、端部が拡張されたものとそうでないものに細分できる。その他では貼付口縁で壺型土器と考えられるNo.72~75が出土している。瓶、壺とともに平底の底部である。高坏は円盤充填法でハの字状に開く脚をもち端部は拡張される。拡張された端部に凹線文は施されてないものも出土している。各部外面は直線文、鋸歯文、矢羽状文が鋭い原体で施されている。ミニチュアでは壺型のものが出土している。また土鍤も1点出土している。石製品では、円基式有茎石鍤1点、円基式無茎石鍤1点が出土し合計2点の石鍤が出土している。その他では敲石、河原石が出土している。

コの字状に溝状造構が巡り多くの遺物が出土していることから、溝状造構を伴い斜面をテラス状に整形した段状造構の可能性も考えられるがテラス部と考えられる部分が削平されているためその性格は不明である。時期は弥生時代中期末から後期と考えられる。



第16図 SD 6 実測図

SD 7~10

調査D区から検出された。調査C区のSX1の下段にあたり標高は約27.0mから26.0mにかけての緩やかな斜面から4条の溝状造構が密集する形で検出された。これらの溝状造構はほぼ等高線に添い北から南に延びる部分と、これから直角に屈曲し西方向に延びる部分に分けられる。

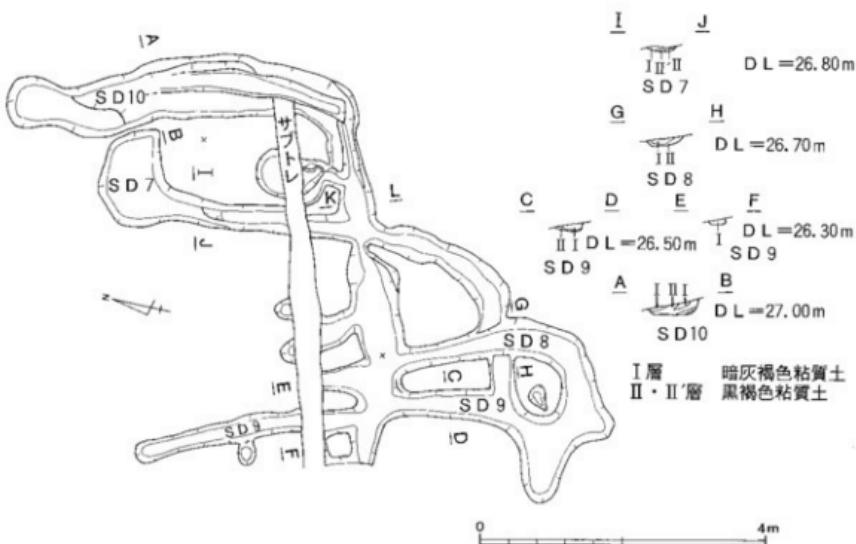
S D 7 は南方向に 5 m 延び屈曲し西方向に流れ 4 m が残存している。幅は約 35~55 cm で深さは約 10 cm で断面形は U 字状である。

S D 8は、約3.5m南方に伸び屈曲し西方向に向きをかえS D 7と合流する。幅は約30~50cm深さは約20cmで断面形はU字状である。

S D 9は南方向に約5.2m残存し、S D 7と合流する幅約30~40cmで深さ約2~12cmの規模である。断面形はU字型である。

S D10は検出された溝状構造の中心的な溝と考えられ、S D7～S D9はこの溝状構造を横切り合流する。規模は南北方向に約4.5m延び屈曲して西方向に向きをかえ約5.2m残存する。幅は70～85cm、深さは一部深い部分と深い部分があるが約25cmであり断面は台形状を呈する。

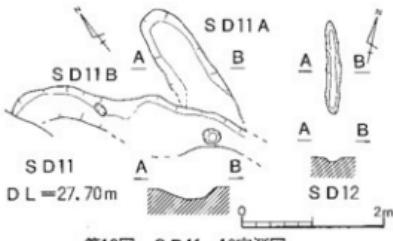
埋土は2層に分層でき上層が暗灰褐色粘質土で下層は黒褐色粘質土である。埋土中からは遺物の出土は少ない。溝状遺構が検出された調査D区端部の遺物の出土は少なく包含層出土の遺物がその大部分を占める。この溝状遺構の時期、性格とも不明であるがピット群が周りで検出されておりそれに伴う可能性も考えられる。



第17図 SD 7~10実測図

SD11

SD11は、調査D区端部のS T 4の北側から検出された。SD11は等高線には添うSD11Aと斜面に添うSD11Bに分けられる。この溝状遺構の規模はSD11Aが幅約50~90cmで約3.3mが残存している。深さは、斜面下側の立ち上がりがはっきりしなく、斜面上側からの底面までの深さは約8~12cmを測り断面形は舟底型である。SD11Bは南方向にのび約1.7mが残存し幅約65cmで深さは約6~12cmで断面形はレンズ状を呈する。埋土は同じで暗灰色粘質土である。埋土中からの遺物の出土は少ないが、甕の底部でしっかりした平底で底部近くの外面にはタキ目が残る土器片が出土する。この溝状遺構の性格は不明で自然のものとも考えられる。時期は弥生時代中期末から後期と考えれる。



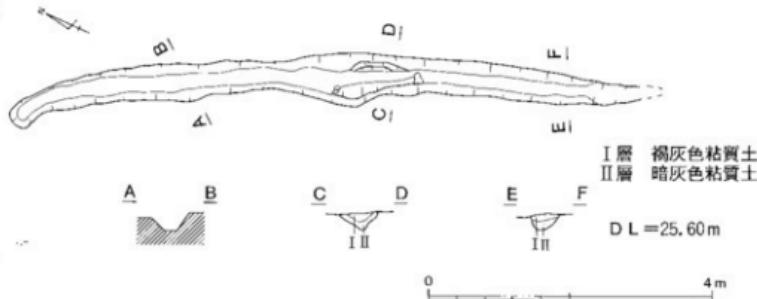
第18図 SD11, 12実測図

SD12

SD12はSD11のやや東から検出され、北方向から南方向に約1.3mが残存し幅約15cm、深さ約4cmの規模の小さな溝状遺構で埋土はSD11と同じであった。埋土中から遺物は出土しなかった。

SD13

SD13は、SD14に隣接し等高線に添ったN-24°-W方向に延びる。約9mが残存し、幅は約40~80cmを測り深さは18~22cmを測る。断面形は台形を呈する。埋土は2層に分層でき上層は褐灰色粘質土で下層は黒灰色粘質土で遺物はこの層に入っている。遺物の出土は少ない。1点形態的に縄文時代の石斧と思われるものが出土しているのみだが、土器の口縁部では貼付口縁、凹線文が口縁端部に施されたもの、端部が拡張されず横ナデ調整されたものが出土している。



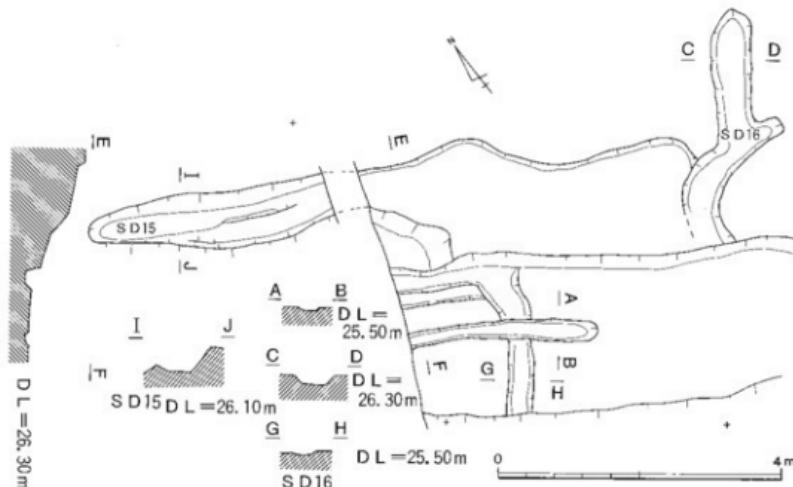
第19図 SD13実測図

SD14

SD14は調査G区南から検出された等高線に直行してN-47°-E方向に約2.2mが残存し幅約40cm、深さは約16cmであった。埋土は二層に分層でき上層が茶灰褐色粘質土に黄橙色砂礫が混入する。下層は底面近くにわずかに堆積する黒色土であった。遺物は少量しか出土していない、完形品の出土遺物はない。端部が拡張された口縁部、平底の底部が出上している時期は弥生中期末から後期と考えられる。



第20図 SD14実測図



第21図 SD15, 16実測図

SD15

SD15は調査D区北側、段状に削平された端部から検出され等高線に添っておおよそ東西に延びる部分と斜面に添って南北に延びる部分に分かれると思われ、規模は、東西に延びる部分が約3.5m残存して途中試掘トレンチによって切られるが、その後1m続き屈曲し南に方向をかえ約2.2mが残存する。深さは等高線に添って斜面に掘られた部分が比較的の残存状況が良好で約25cmを測り断面形は台形状を呈し、幅は約1mである。斜面に添った部分は断面形は台形で幅約35cm、深さ約9cmである。埋土は褐灰色粘質土と暗灰褐色に分かれるが遺物はどちらか

らも少量しか出土していないなく図示できたのは、No.103のみである。時期的には他の遺構と同様の時期である弥生中期末から後期が考えられ、性格的にはSD 6と同様の性格を持つと考えられ、斜面をテラス状に整形した遺構の可能性が考えられる。

SD 16

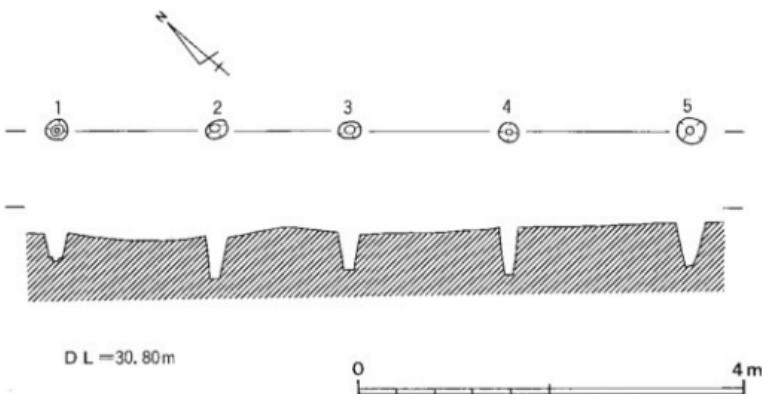
SD 16はSD 15に隣接する溝状遺構で、ほぼ東西に約2mが残存し、幅約60cm、深さ約13cmの溝状遺構であり段畝によって南側が削平されている。断面形は浅い台形状を呈し埋土は黒灰褐色粘質土で、埋土中からは、当遺跡では唯一の古代末11C後半と考えられる土器師範、No.106が出土している。時期は古代以降と考えられ、性格は不明だが自然の溝と考えられる。

SA 1

SA 1は調査B区から検出された。5個のピットが約1.6m間隔のほぼ等間隔でN-41°-W方向に直列する。埋土は淡褐灰色粘質土でP 1からのみ弥生土器が出土している。出土した遺物は少量で、細片であるため図示できなかった。欄列と考えられるが時期は遺物が少なく明らかでない。

第7表 SA 1ピット計測表

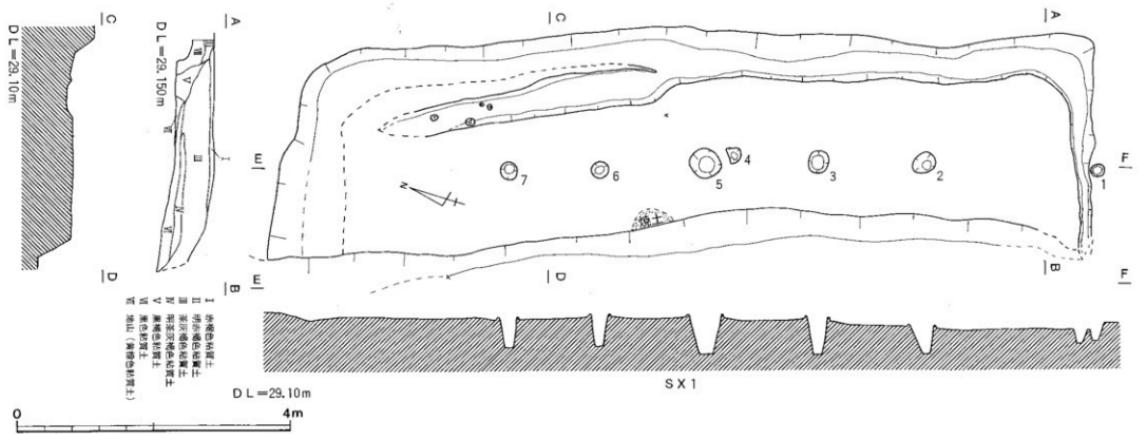
ピット番号	平面プラン	幅(横×奥)	深さ(cm)	遺物	備考
P 1	不整形な円形	23×21	28	弥生土器	
P 2	楕円形	25×20	44		
P 3	円形	23×17	42		
P 4	円形	22×22	49		
P 5	椭円形	30×25	46		



第22図 SA 1実測図

S X 1

調査C区から検出されたが、C区で検出された他の遺構から少し離れて検出された。C区は現況密柑畠で、比較的広い面積約570m²の平場を持つ。検出された平面プランは長方形で長軸12m、短軸2.9mを測り地山を長方形の段状に整形しており長軸方向はN-15°-Eである。残



第8表 SXピット計測表

ピット番号	平面プラン	W(幅)×L(長)	深さ(m)	遺物	備考
F 1	円形	20×20	8		
F 2	楕円形	37×28	39		
F 3	円形	32×30	53		
F 4	円上	23×23			
F 5	円上	50×47	68	生土器、石器	
F 6	円上	38×37	41	生土器	
F 7	円上	27×26	47	生土器	



第23図 SX 1 実測図及び遺物出土状況実測図

存状況は比較的良好で壁高は約30cmであるが南西側は削平されていた。床面は平坦で、2条に分かれる壁溝、直線的に並んだピット、焼土が検出されている。

床面は地山と考えられるが、地山の上には土器片が少量入る明茶灰褐色粘質土の土層がみられ、この層からピット、壁溝が掘り込まれている。この層が床面の可能性が高い。

壁溝は、住居址の縦際を巡るが、北側では2条に分かれ、一部壁溝は2条が平行して流れ両方とも途中で切れる。幅は、50~70cmで深さは、深い部分で約16cmである。埋土は両方ともに黒褐色粘質土で埋土的には差が認められない。埋土中からは土器片が出土しているが量的には出土量は少ない。

ピットは床面と考えられる地山の面から約10~15cm浮いた状態で検出された。P1は直径深さとともに他のピットに比べて小さく壁溝の外側から検出された。残りのピットは、P4を除き掘り方の直径約25~35cmで深さは、約40~60cmを測る。ほぼ1.6mの等間隔で直線的に並ぶ。P5は直列するピットの中心に位置し直径は約50cmで、深さは68cmを測り中心柱と考えられP4は添え柱と考えられる。埋土は茶褐色粘質土で、やや黄橙色の疊が混入する。埋土中からは、住居址の埋土出土の土器とほぼ同時期と思われる土器片が出土している。またP5からはサヌカイト製の門基式無茎石鏡が出土している。

焼土は、端部から検出された。半円形状で半分切られた形で検出された。検出面の標高は28.6mで範囲は45cm×40cmである。焼土に伴う遺物は検出されなかった。

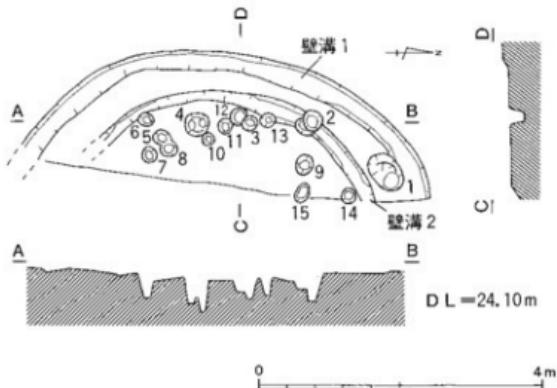
後世行なわれた開墾によって削平を受けている。また表土層下は客土がみられ、かなり人手が入っており表土層からは繩文時代と考えられる石鏡、須恵器片等が出土している。S X 1の埋土は2層に分層できる。上層は明茶灰褐色粘質土でこの層で多量の遺物が出土する。投棄されたような状態で出土し、出土範囲は、やや偏りがみられ南半分が多い。出土土器の器種構成は壺、甕、高坏、鉢である。壺は、筒状の頸部から大きく聞く口縁を持ち端部は拡張され凹線文が施されたもの、貼付口縁で刻目が施されたものと、そうでないものに分けられる。直口壺、長頸壺、把手付の水差し型土器も出土している。甕ではくの字状の強い屈曲を持つ口縁部で端部が拡張され凹線文が施されているものと、くの字状に屈曲した口縁部を持つが端部は拡張されず横ナデによって仕上げられたものが出土する。底部は壺、甕ともにしっかりした平底である。高坏では、円盤充填法により製作される。脚端部は拡張され凹線が施されるものがほとんどで、脚部外側は金属器を使って施文されたと考えられる直線文、鋸歯文がみられ、矢羽状文も見られる。円孔が施されたものも出土するが透かしのあるものは1点も出土しない。坏部に凹線文を施されたものが大部分を占めるがわずかに凹線文が施されていない脚部も拡張されない浅い坏部を有する器形も出土している。器台では、大型の器台で口縁端部、外面全体に凹線文が施された鼓状の器形が出土している。この器台にも透かしはない。鉢では胴部球形のものが中心で、口縁は短く屈曲する。口縁端部は拡張されたものと貼付口縁のものに大別され、拡張されるものは凹線文が施されたものと、横ナデされたものにさらに分けられる。貼付口縁のも

のは2点出土している。No.199は平底の底部からやや内湾気味に立ち上がり中胴部よりやや上に最大径を有し、短くなめらかに開く口縁をもつ鉢である。ミニチュアは全部で9点出土している。鼓型をした器台状のものは4点出土していおり約半数をしめる。その他では壺型のもの、鉢型のものが出土している。石製品では、石鏃、石包丁、蔽石、砥石、磨石が出土している。石鏃では、凹基式無茎石鏃1点、凸基式有茎石鏃が1点出土しており、ピット出土の石鏃と合計で3点出土している。石材は全てサヌカイトであった。石包丁は1点出土しており、直線刃半月形で中央部には双孔が穿たれるNo.445である。石材は粘板岩である。鉄器では、No.423の鉄鏃が1点出土している。時期的には、弥生中期末～後期の土器が埋土中から多量に出土するが、No.201・202は、古墳時代に入るものと考えられる。若干であるが古墳時代の遺物が混入するため遺構の時期は不明と言わざるを得ないが弥生時代中期後半の可能性が考えられる。

ピット

I区からは、103個が検出されており、A～F区全てから検出されているがD区端部から30個が検出されピットが集中している。検出されたピットからは遺物の出土は少ないが出土した遺物はほとんどが弥生土器片であった。ピットは大部分が柱穴と考えられる。しかし、ピットが集中するD区端部では建物はたたなかった。D区端部のピット群は包含層から弥生土器が大半であるが、土師器、須恵器も出土しており、弥生の掘立柱建物、古代の掘立柱建物が存在した可能性も推定される。

調査II区



第24図 ST 6 実測図

ST 6

ST 6は、ST 1～ST 5が調査I区から検出されたのに対して、調査II区から検出された住居址である。調査前標高約25mの谷部をはさんで調査I区と向かい合った東向き斜面から検出した。

黄橙色の地山を掘り込み作られており、平面プランは段畝造成によって東側が削平されているため、約5m程しか残存していない、長径、短径とも不明な楕円形を呈する。この住居址は建て替え、拡張が行われており、先に検出されたのは建て替えられた後の住居址で床面は、標高約23.9mで、この住居址に伴い検出されたのは壁溝1と、P 1～P 6である。建て替え前に営まれていた住居址は、床面を約2～5cm掘り下げると壁溝2とP 6～P 15が検出できた。中央ピットは検出されていない。

壁溝2は壁溝1とは同心円で内側約30cmから検出されている。壁溝1は幅約28cm～33cmで深さは約6cmである。壁溝2は幅約25cm～30cmで深さは、深いところで約7cmであった。

ピットは総計15個検出されている。ピットの残存状況はいずれも良好で、直径はほとんどが20cm以上で深さも20cm以上のものが大半である。建て替えられた後の住居址に伴うP 2～P 6は柱間が約90cmで直列する。

住居址の埋土は単一の褐灰色粘質土で、埋土中からの土器の出土は多くない。図示できたNo.25の壺の胴部から底部にかけては、しっかりした平底の底部を持ち、最大径は胴部中央下位に位置する外縁はハケメ調整で内面には指ナデがこる。No.27は蓋である。床面は二時期のものに別れ、先に検出された建て替え後の床面は黄橙色に黒灰褐色が混じった土層でこの張り床を除去すると拡張前の黄橙色の地山の床面が検出される。床面からの遺物の出土はほとんどみられなかった。

SB 1

調査II-A区から検出された。桁行3間、梁間1間の規模で棟持柱は検出されなく上部構造は不明である。ピットの埋土は黒灰色粘土で埋土中からの遺物の出土はなく、ピットの深さは2～12cmで浅く、表土直下で検出され後世の削平のためかなり削られていると

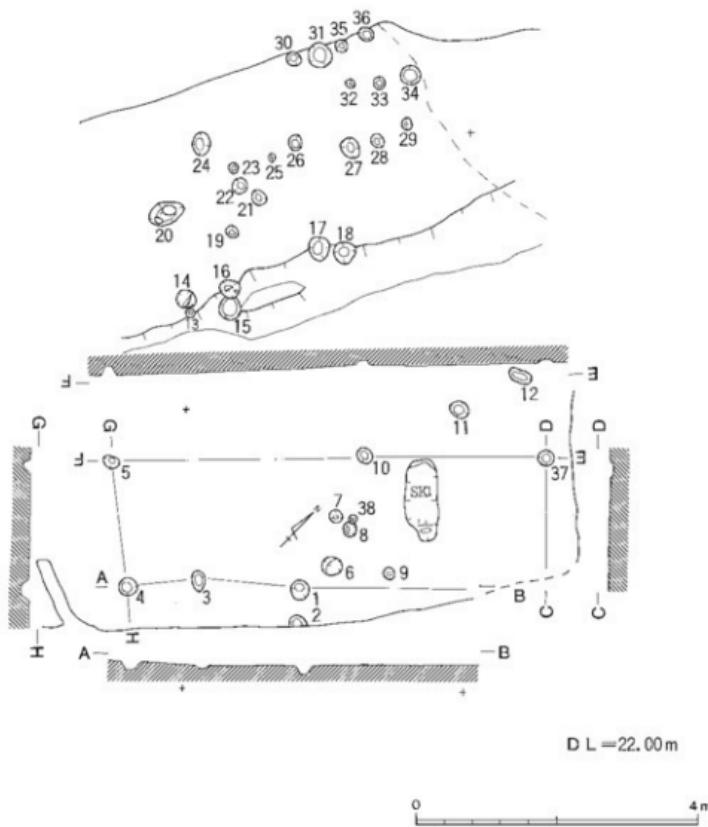
第9表 ST 6ピット計測表

ピット番号	平面プラン	幅(長×短cm)	深さ(cm)	遺物	備考
P 1	楕円形	118×85	29	共生土器	黒灰色粘質土
P 2	同上	76×54	37, 29		同上
P 3	円形	24×22	30		同上
P 4	同上	70×67	38, 46	共生土器	同上、2個の柱穴になる
		(10×30, 12×12)			
P 5	同上	25×25	26		同上
P 6	同上	29×20	27		同上
P 7	同上	22×22	20	共生土器	黒灰色粘質土
P 8	同上	23×23	40		同上
P 9	楕円形	28×22	28		同上
P 10	円形	19×19	39	共生土器	同上
P 11	同上	23×21	26		同上
P 12	同上	26×26	19		同上
P 13	同上	22×22	25		同上
P 14	同上	20×20	15		同上
P 15	楕円形	30×20	15		同上

第10表 SB 1ピット計測表

ピット番号	平面プラン	幅(長×短cm)	深さ(cm)	遺物	備考
P 1	円形	29×28	18		
P 3	不整形を楕円形	26×24	2		
P 4	円形	26×26	4		
P 5	同上	20×20	12		
P 37	同上	21×21	3		

思われる。時期はピットの伴う遺物が出土していないため不明だが、調査II-A区から検出されたピットから瓦質土器、土師質土器が出土しており、古代末から中世にかけての時期と考えられる。



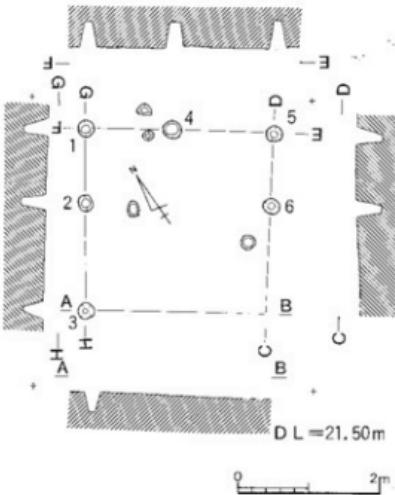
第25図 SB 1 調査II-A区 Pit 実測図

SB 2

SB 2はSB 1が検出された部分と旧谷状地を挟んだ地点から検出された2間×2間の掘立の総柱建物と考えられる。1間の長さは約1.3mとやや短い。ピットの埋土は黒褐色粘質土でピット中からの遺物の出土はなく時期の特定は困難だが、SB 1と関係すると考えられ古代末から中世と考えられるが、その性格は不明である。

第11表 SB 2 ピット計測表

ピット番号	平面プラン	径(直径×幅m)	深さ(cm)	遺物	備考
P 1	円形	24×24	36		
P 2	梢円形	24×21	35		
P 3	円形	25×25	29		
P 4	円上	26×26	8		
P 5	円上	25×25	38		
P 6	円上	25×25	36		



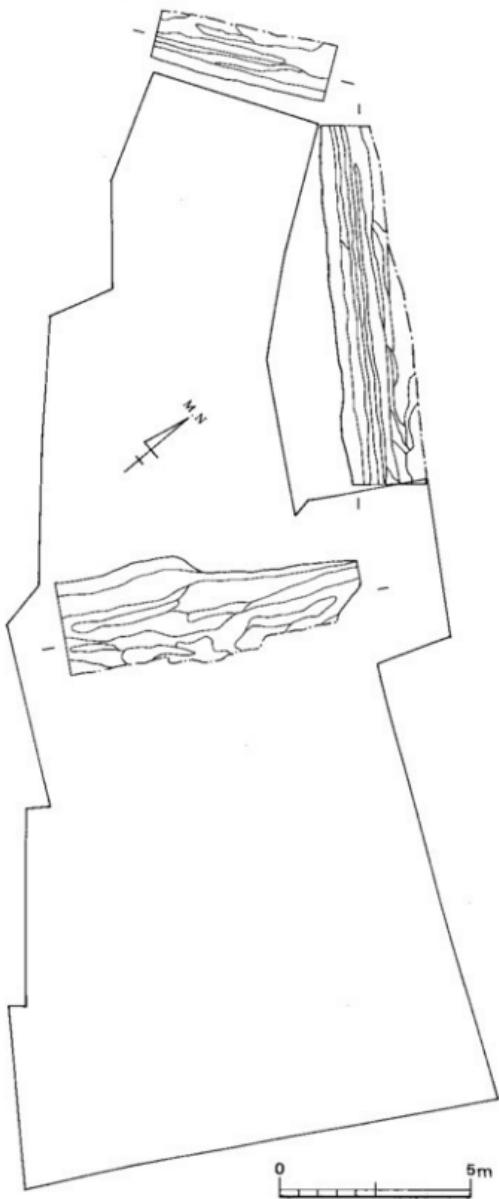
第26図 SB 2 実測図

ピット

II区からは、II-Aからピットが38個検出され掘立柱建物が一棟検出された。また試掘調査では、旧谷状地形を挟んで総柱の掘立柱建物が検出されている。ピット中からは須恵器、瓦質土器、土師質土器が出土している。現在住宅が存在している丘陵斜面に古代以降集落が営まれていたことが推定される。

旧谷状地形

調査II区から検出され、埋土中からはコンテナケース30箱の多量の弥生土器が出土した。出土した土器は中期末～後期の土器が大半を占め、前期と考えられる土器も出土しているがわずかに数点にすぎない。またこの埋土中からは弥生時代以降の土器の出土が認められない。埋土は砂礫層と粘土層が互層に堆積している。谷状地形は弥生時代に何度も土砂崩れによって埋没したと考えられる。



第27図 発掘調査区実測図

調査 I 区ピット計測表

ピット番号	平面プラン	径(長×短cm)	深さ(cm)	遺物	備考
P 1	不整形な円形	21×19			試掘
P 2	円形	23×21			
P 3	同上	15×15			
P 4	楕円形	24×22			
P 5	同上	26×23			
P 6	同上	26×23			
P 7	楕円形	24×22	15		I-A
P 8	不整形な円形	32×28	—		I-B
P 9	楕円形	22×26	25		タ
P 10	同上	22×14	20		タ
P 11	円形	34×34	32		タ
P 12	同上	20×18	27		タ
P 13	同上	35×32	51	弥生土器	タ
P 14	不整形な円形	26×24	26		タ
P 15	円形	18×18	31	弥生土器	タ
P 16	不整形な楕円形	35×30	20		タ
P 17	不整形な円形	40×32	46		タ
P 18	不整形な楕円形	44×35	33		タ
P 19	円形	48×45	19		タ
P 20	楕円形	52×40	19		I-C 溝中から検出
P 21	同上	27×22	5		タ
P 22	同上	24×20	31		タ
P 23	同上	20×14	27		タ
P 24	同上	22×19	29		タ
P 25	円形	25×25	29		タ
P 26	不整形な円形	21×20	16		タ
P 27	楕円形	23×20	34		タ
P 28	同上	25×20	3		タ
P 29	円形	20×20	25		タ
P 30	同上	18×18	22		タ
P 31	同上	25×25	16		タ
P 32	不整形な円形	20×20	24		タ
P 33	同上	22×21	23		タ
P 34	円形	18×17	19		タ
P 35	同上	15×15	36		タ
P 36	同上	20×19	3		タ
P 37	同上	23×22	30		I-D

第12表 調査 I 区ピット計測表 1

ピット番号	平面プラン	径(長×短cm)	深さ(cm)	遺物	備考
P 38	橢円形	33×22	35		I-D
P 39	同上	67×57	9		
P 40	同上	45×30	8		
P 41	同上	42×34	9		
P 42	円形	20×20	30		
P 43	同上	26×26	28		
P 44	同上	21×21	40		
P 45	方形	42×41	2		
P 46	同上	39×36	20	弥生土器	
P 47	長方形		12, 15	弥生土器	
P 48	円形	46×44	16	弥生土器	
P 49	三角形	35×28	9	弥生土器	
P 50	橢円形	35×24	13		
P 51	円形	30×30	13	弥生土器	
P 52	橢円形	28×24	12	弥生土器	
P 53				弥生土器	
P 54	橢円形	38×28	16	弥生土器	
P 55	同上	30×27	—	弥生土器	
P 56	長方形	100×70			土坑
P 57	橢円形	35×28	6	弥生土器	
P 58	円形	26×26	24		
P 59	橢円形	31×26	8		
P 60	同上	29×20	11		
P 61	不整形な橢円形	32×29	14		
P 62	不整形な円形	26×25	8		
P 63	円形	24×23	11		
P 64	橢円形	23×19	20	弥生土器	
P 65	不整形な円形	27×27	24		
P 66	橢円形	23×17	11		
P 67	不整形な円形	21×20	19		
P 68	—	—	—	—	消滅、シミか?
P 69	不整形な橢円形	43×24	9		
P 70	橢円形	58×58	78	弥生土器	柱痕らしきもの有
P 71	円形	22×21	12	弥生土器	
P 72	同上	25×23	13		
P 73	橢円形	27×21	12		
P 74	同上	25×20	14		
P 75	円形	27×27	12		
P 76	橢円形	42×38	29		

第13表 調査I区ピット計測表2

ピット番号	平面プラン	径(長×短cm)	深さ(cm)	遺物	備考
P 77	楕円形	36×18	11		
P 78	同上	20×10			I-G
P 79	円形	25×25	21		
P 80	同上	20×20	11		
P 81	円形	18×18	12	弥生土器	
P 82	楕円形	35×30	9	弥生土器	
P 83	円形	22×20	14		
P 84	楕円形	25×18	12		
P 85	方形に近い円形	29×29	6		
P 86	同上	23×22	22		
P 87	楕円形	38×30	14		
P 88	方形に近い円形	32×27			
P 89	楕円形	20×17	11		
P 90	円形	16×16	15		
P 91	同上	19×19	6	弥生土器	
P 92	楕円形	29×25	4		
P 93	同上	35×32			
P 94	円形	26×26	20		
P 95	不整形な楕円形	65×55	8		土坑の可能性あり
P 96	円形	26×26	17		
P 97	同上	22×22	18		
P 98	楕円形	24×22	5		
P 99	円形	25×25	14		
P 100	楕円形	25×23	24		
P 101	同上	25×23	19		
P 102	円形	33×27	25	弥生土器	S X 1 に伴う可能性
P 103	同上	22×22	15		
P 104	同上	30×30	21		同上

第14表 調査 I 区ピット計測表 3

調査II-A区ピット計測表

ピット番号	平面プラン	径(長×短cm)	深さ(cm)	遺物	備考
P 1	円形	29×28	18		
P 2	楕円形	25×22(復元)	10		
P 3	不整形な楕円形	26×21	2		
P 4	円形	26×26	4		
P 5	円形	20×20	12		
P 6	不整形な円形	27×27	3		
P 7	円形	17×17	10		
P 8	不整形な方形	22×20	1		
P 9	円形	16×16	5		
P 10	楕円形	24×20	6		
P 11	円形	24×23	13		
P 12	楕円形	32×20	13, 10		2個の柱穴
P 13	円形	10×10	10		
P 14	不整形な方形	28×28	16		
P 15	楕円形	35×28	14		
P 16	楕円形	30×24	8	土師質坏	
P 17	円形	32×30	15		
P 18	円形	30×30	18	瓦質土器	
P 19	同上	18×18	6		
P 20	楕円形	50×44	26, 26	須恵器, 土師器	2個の柱穴
P 21	円形	22×22	18		
P 22	同上	25×25	12		
P 23	楕円形	14×11	14		
P 24	同上	34×27	22		
P 25	円形	11×11	5		
P 26	同上	20×20	12		
P 27	同上	30×30	21		
P 28	楕円形	20×23	17		
P 29	円形	15×15	3		
P 30	同上	20×20	13		
P 31	同上	36×36	16		
P 32	同上	16×16	5		
P 33	同上	18×18	6		
P 34	円形	30×30	13		
P 35	同上	20×20	12		
P 36	楕円形	24×21	20		
P 37	円形	21×21	3		
P 38	同上	12×12	4		

第15表 調査II-A区ピット計測表

VII章 遺 物

VII章 遺物

(1) 土器

弥生時代の土器

本村遺跡からは多量の土器が出土している。そのほとんどが弥生時代中期後半から後期初頭にかけてのものと考えられる。その他には調査Ⅰ区から古式土師器、須恵器片、11世紀後半と考えられる土師器碗が出土しているがわずかに数点を数えるのみである。

調査Ⅰ区から出土した遺物は、遺跡が丘陵地に立地しているため包含層の残存状況不良であり、その出土のほとんどが遺構中からであった。特にS Xの埋土中からは多量の土器が出土しており、弥生中期末から後期初頭にかけての好資料となるだろう。また調査Ⅱ区の旧谷状地形と考えられる自然遺構の埋土中からは弥生時代前期と考えられる土器片数点出土しているほかは、弥生中期後半から後期初頭にかけての土器が約コンテナケース50箱出土している。

本遺跡から最も多量に出土した弥生中期後半から後期前半にかけての土器の器種構成は、壺、甕、高坏、鉢、器台である。器種ごとの土器構成にしめる比率はこの時期になると壺型土器が減少し中期前半には、比較的少数しかみられなかつた甕型土器の比率が上昇する傾向がみらる。またこの時期の大きな特徴のひとつとして凹線文を持つ土器の出現が挙げられる。凹線文はその起源を瀬戸内地域に求めることができる土器であり比較的短期間の間に広がり盛行期を迎える土器である。高知県においても凹線文をもつ土器は田村遺跡のLoc34をはじめ、龍河洞遺跡等から出土しており、龍河洞遺跡において出土した凹線文を伴う土器によって、岡本健児氏は南四国東部における中期末葉の龍河洞A式を設定した。

今回出土した中期末から後期にかけての土器は大きく2つに分けることができる。一方は凹線文が施された土器で龍河洞A式と同型式と考えられ、瀬戸内地地方の影響の強い定型化された土器といえる。器種構成は、広口壺、長頸甕、無頸甕、直口壺、台付き壺、水差し型土器、甕、大型甕、高坏、鉢、大型鉢、台付き鉢、器台等である。いずれも口縁端部ないし外面には凹線文が施されている。

もう一方は、在地の土器の系譜を引くものと考えてよいだろう。そのひとつは、壺型土器に特徴的にみられる口縁部に粘土帯を貼り付けた貼付口縁である。この貼付口縁は、その他に鉢型土器にもみられる。しかし、この時期の在地の流れを引く土器の中には明瞭な甕型土器がみられない。当遺跡出土の土器中にも凹線文を有する甕型土器以外には明確に甕型土器と判断し得るものはないが、外面を炭化物の付着が覆い煮沸具として使用されていたことをうかがわせる土器が出土している。当該期以前における在地の甕型土器については、出原恵三氏が「土佐型甕の提唱とその意義」で述べられているように、一般的な甕型土器はきわめて少なく土器構成比率におけるアンバランス状態が存在する。この状態を解決するものとして出原氏は在地の

系譜をひくと考えられる土佐型壺を提唱されている。この土佐型壺は中期後半には凹線文系の壺に置き変わると考えられるが、今回の調査で出土した土器中からは土佐型壺の系譜を引くと考えられる。一見すると壺型土器であるが外面を炭化物の付着が覆う土器が出土しており、凹線文盛行期においても、在地系の土器も併存していた可能性が強いことが明らかとなった。また、在地の土器の中にも貼付口縁部に凹線文を意識したと考えられる沈線が施された壺型土器が出土しており在地系の土器にも凹線文が強く影響を与えたことがうかがえる。

個別に土器の形態を見てゆくと、壺型土器は口縁部の形態によって分類することができ、大別すると広口壺、長頸壺、無頸壺、直口壺に分けられる。また台付き壺、水差し型壺も存在する。広口壺はさらに口縁部の開き方や頸部の形態によって細分され、タイプAは口縁が水平に近く大きく外反し頸部は直立する。タイプBはなめらかに斜め上方に開く口縁部をもち口縁の長さによってさらに分けられ、口縁の長いものは大きく外反するタイプB 1がある。口縁が短いものには、外反の度合いが弱いタイプB 2 aと、直立した頸部を持ち短くなめらかに外反する口縁部をもつタイプB 2 bが存在する。長頸壺は6点出土しているが凹線文を持つものと薄手式土器の系譜を引くものに分けられる。無頸壺はNo.299、1点のみが出土しており凹線文が外面に施された最大径が11cmの小さなものであった。直口壺は既示できたものが17個出土している。口縁部外面に凹線を施されたものとそうでないものに分けられ、凹線文がないタイプのものは後期に入ると考えられる。凹線文を有する口縁については水差し型土器の口縁と類似するため判然としないものも含まれる。水差し型土器は凹線文を有するものしか出土していない本県においては凹線文受容とともに出現するといえよう。No.142の水差し型土器の胴部は算盤玉型をしているものと思われる。

壺は、中期後半においてはその過半数を凹線文を有する土器がしめる。前述のごとく当該期以前において壺型土器の存在は明確ではなかったが、「土佐型壺」の提唱によって從来壺型土器としていた貼付口縁をもち頸部に装飾が施されたものの一部を「土佐型壺」として位置づけることが可能となると、中期後半においても壺型土器の範疇に入れざるえなかつて一見して煮沸具と考えられる土器も壺型土器として位置付けることが可能となるだろう。凹線文系の壺は斜め上方にハの字状の短い口縁が付き口縁端部は、上下、上、下に拡張され凹線文が施される。後期と考えられるものは凹線文は退化しわずかに横ナデに伴う一条の凹がみられる。全体のプロポーションは両方とも上胴部に最大径を有するいちじく型を呈する。中期と後期の大きな相違点は、中期に出現した壺の内面ヘラ削りの技法が後期になると下胴部から口縁下まで拡大される。また外面の調整では中期の壺ではヘラ磨きが主に下胴部にみられるが後期に入るとヘラ磨きは減少する。全体的なプロポーションにおいても中期のものは規格性が強く回転速度の速い回転台の上で整形を行なったことを推定させるような棱線の明瞭な土器になっている。土佐型壺の系譜をひくものははっきりとした様相を呈していないが、直立気味の頸部からなめらかに開く口縁部をもち上胴部に最大径をもった小さい平底の体部をもつと思われる。

高坏については、完形品の出土が一点しかなく全体の様相が明確になっていないが、大型のものと、小型のものに分けられ、小型のものは口縁によってさらに3分類できる。大型の高坏については口縁部のみの出土であるため全体像がつかめなく、この時期にみられる大型の鉢と渾然となっている可能性もある。わずか口縁部3点のみの出土であるが、本県においては今回の出土が初めてであり、その外面を櫛描波文、円形浮文で装飾された特殊な土器といえよう。

小型の高坏は口縁のタイプによって分類できる。タイプAは比較的小さなもので直線的に開く坏部をもち口縁は稜をもって屈曲、内傾し外面には凹線文が施される。完形品ではS X 1出土のNo.184がある。脚部外面に多条沈線や鋸歯文を施された高坏はこのタイプになると考えられる。タイプBはNo.346で、わずかに内湾して立ち上がる坏部を持ち口縁部は坏部から強く屈曲し稜をなして直立し、やや内傾する。口縁端部は拡張され上方を向く面をなし、わずかに凹んだ口縁外面を呈する。タイプCは図示できたものはNo.185の口縁部のみである。直線的に開く浅い坏部からやや外傾し拡張されず凹線文も施されない口縁をもつものである。このタイプは田村遺跡からも出土しており中期後半に位置付けられているが、後期初頭の可能性も考えられる。この他に水平口縁をもつ高坏が出土している。このタイプの高坏は瀬戸内地方では中期後半には多くみられるが本県では初めての出土である。瀬戸内地方の水平口縁のものにはさらに口縁端部が垂下するものも出土するが今回の発掘調査では出土していない。この高坏はNo.350の様に比較的大きな内湾して立ち上がる坏部を持つと考えられる。今回の調査では多くの高坏の脚が出土したが、すべて円盤充填法によって作製され中空の脚を持つが外面の文様の有無と端部端部の拡張の有無がある。外面の文様は多くが金属器によると考えられる鋸い原体で、多条沈線、鋸歯文、羽状文、矢羽状文が施される。透かしが入るものは一点も出土しないが刺突による円孔は多くみらる。透かしは大型の器台にもみられず、高知県出土の高坏脚のひとつ特徴となっている。作製技法は先に述べたように坏部と脚部が一体成形によって作製される円盤充填法である。中期の高坏脚の内面は横方向のヘラ削りがみられることが特徴となっている。

鉢の出土点数は少なく、出土した鉢は、胴部が球形に近いものがその大部分をしめるが口縁部に凹線文が施されたものはわずかに2点のみの出土でありNo.368は水平口縁の高坏の可能性も考えられるが台付きの小型の鉢の可能性が高い。No.199は貼付口縁をもった鉢が出土している。瀬戸内地方の中期の大型の鉢では、脚が付きほぼ高坏と同じ形態を持つものがみられるが、大型高坏としているものと渾然としている可能性もあるが全体のプロポーションがわかるものは出土していない。

器台は凹線文が施される器台とそうでないものに大別される。凹線文の有る器台については、S X の埋土中からほぼ完形に近いNo.200が出土しておりその全体の形態を明らかにしている。今回出土した凹線文を有する器台は、すべてが大きく開き拡張された口縁部を持ちその外面全体には幅の広い凹線が巡るものであった。全体のプロポーションは瀬戸内地方の同時期の器台

と比べると器高が低く、畿内出土の大型器台に近いプロポーションを持つ。口径の大きさにして器高が低いことが特徴となっている。S T 2 から出土したNo. 2 は小型の器台と考えられる。器台ではその他で筒型の器台と考えられるものが2点出土している。本県では初出土であるがこの器型についても瀬戸内地方では出土しており、中期後半から後期初頭にかけてと考えられる。

ミニチュア

本村遺跡ではミニチュア土器も多く37点出土している。ここで注目されることは、粘土を鼓状に手づくねによって成形した器台状のミニチュアが11点出土しておりミニチュア全体の1/3をしめるほど出土していることである。器台型のミニチュアでは砂岩と考えられる石製品がS T 3 の中央ピット埋土中から出土している。その他では、台付きの鉢型土器になると思われる土器が出土している。またNo.409は壺型のミニチュアであるが、丁寧な仕上げを行なっており胎土、焼成ともに良好で、他のミニチュア土器と性格が違うことが窺える。

弥生時代以外の土器

弥生時代以外の土器では土師器、須恵器が出上しているが、わずかに4点のみである。4世紀代と思われる古式土師器の甕がS X 1 とS K 2 から出土している。また同時代のものと考えられる高坏も出土している。土師器では、この他に古代末12世紀と考えられる貼りつけの輪高台をもつ甕が出土している。調査II区では中世瓦質皿、土師質小坏が出土している。また調査I区、II区ともに須恵器片も出土しているが図示できなかった。

その他

その他では1点S D 7 埋土中から土鍤が出土している。時期については不明である。

鉄製品

鉄製品は全部で3点出土しておりいずれも、鉄鎌であった。No.421・422はS K 2 より出土する。No.422は比較的大型の柳葉式で木葉型を呈する鉄鎌である。No.423はS X 1 より出土した。No.422をのぞく2点は無茎三角式で基部が平基式である。重さはいずれも約10gで本遺跡出土のサヌカイト製打製石鎌が約2.0gに比べるとその重量は際立っている。

石製品

石製品も比較的まとまって出土しており、石鎌、石包丁、石斧、砥石、敲石が出土している。その大部分は砥石、敲石である。また用途は不明で使用痕もみられないが遺跡周辺では自然産出しない河原石が多く出土している。その他、用途不明の石製品が出土している。またサヌカイトやチャートの剝片も出土している。

個別に石製品を見てゆくと、石鎌は17点出土している。石材によって2種類に分けることができる。チャート製の石鎌は4点出土しており、いずれも造構中、包含層中からの出土ではなく層位的にも後世の擾乱層であり、明確に時代はわからないが、その抉りの深い形態、重量の

平均が約0.7g サヌカイト製の石鎌に比べて約半分と軽いことから縄文時代の石鎌の可能性が高い。サヌカイト製のものについては、その基部の形態、茎の有無によって分類することができる。いずれも弥生時代中期の石鎌と考えられる。重量の平均は約2.0gである。

石包丁は全部で9点出土しており、磨製と局部磨製の石包丁に分けられる。磨製の石包丁は4点出土しており刃部はいずれも直線状を呈する。2点は直線刃半月形、後の2点は長方形である。1点を除いて中央部には双孔が穿たれており、石材は粘板岩と頁岩と思われる。磨製石包丁についてその形態は弥生時代中期の畿内の影響下にあるものと考えられる。ST1から出土した磨製石包丁は直線刃を持つ長方形になるとされるが幅が薄く中央には双孔が穿っていない。瀬戸内地域で出土するサヌカイト製の打製石包丁の影響を受けると考えられる局部磨製の石包丁は2点出土しているが、石材はサヌカイトではなく磨製石包丁と同質のものが使用される。形態的には双孔は穿たれず、両端に抉りが入っている。刃部は研磨によって丁寧に仕上げられ、全体も粗削りの後研磨して仕上げられる。石包丁の未製品と思われる物は、2点出土している。あと1点は河原石を石材とし自然面を一方に残して、もう一方を大きく剥離させ刃部を作り出していることが注目されるが作りが粗製で粗製剝片石器の可能性がある。

石斧は5点が出土しており、柱状の両刃石斧、丸鑿状の石斧が弥生の磨製石斧と考えられ石材は緑色片岩である。No.455は打製の扁平な両刃の石斧であるが粗製で土掘具として使用されたと考えられる。またNo.456は完形品でなく全体の形態が判然としない。一見すると石劍の先端部と見えるが、側面の刃部状をなす部分がだんだんと面を持ち出すのでやはり石劍とは考えがたく、石斧の基部になるとされる。No.452は扁平な粘板岩で擦痕がみられ磨製の扁平な石斧になるとされる。

その他石製品では、砥石が8点と、蔽石、敲打とみられる河原石が多量に出土している。砥石は、鐵器用と考えられる物は出土していない。また用途不明の擦痕がみられる磨いた石も出土している。

ガラス製品

1点のみ勾玉がST4の埋土中から出土している。青色（ターコイズブルー）の発色をしており、透明感がある。分析していないので、はっきりしないがアルカリソーダガラスの可能性が考えられ、銅（Cu）が発色剤になったと考えられる。ガラス中には多くの細かな気泡が入っている。研磨して丁寧に仕上げられており、孔は直径が約1mmである。

玉類

管玉が2点ST4の壁溝中から出土する。碧玉製である。ガラス製勾玉が同じST4から出土することから、なんらかの関係があると思われる。

VII章 まとめ

野市町本村遺跡は、その出土する土器から第IV様式の凹線文が盛行する時期を中心に第V様式前半の時期、すなわち弥生時代中期末から後期前半までの時期に営まれた集落と考えられる。

この地域では香宗川の右岸に所在する下分遠崎遺跡が弥生時代前期の集落として知られ、第Ⅱ様式の土器が出土している。また物部川河口の田村遺跡群は高知県中央部の前期の拠点集落として知られているほか、高知県を代表する弥生時代の集落の複合遺跡である。田村遺跡群からはLoc. 34の自然流路から、凹線文の盛行時期の土器が出土しており本遺跡出土の土器とはほぼ同一の形式の壺などが出土しており本遺跡との関係が注目される。

弥生時代中期後半については、遺跡の数の増加が顕著になる時期で遺跡も沖積平野の微高地に立地した拠点的な大集落が、小規模な集団に別れ新たな生産、居住の適地を求めて移動し谷間深くまで進出する時期である。また、瀬戸内地方ではこの時期には急峻な山上に遺跡が所在することも多くこのような集落を高地性集落と呼ぶが、高知県の太平洋を望む眺望の良い山上でも多くの高地性集落と考えられる遺跡が確認されている。

高地性集落については、諸先学が様々な觀点からの高地性集落論を展開されており、その定義については概ね高地性集落を2つに分類し述べている。狭義の高地性集落は、生産の場として不適当な高い場所に営まれた集落で、弥生時代の軍事的抗争との関係で論じられることが多いこのタイプの高地性集落の代表的な例として、香川県の紫雲出遺跡を挙げることができる。広義の高地性集落の定義では、その比高差がもっぱら問題となり比高差によって高地性集落と分類される。本遺跡は比高差が約20m、標高約30mの丘陵上に営まれており、先に述べた典型的な高地性集落には分類できない。本遺跡からは農耕具である石包丁や稲圧痕の残る甕が出土し、集落が営まれたと考えられる丘陵と丘陵の谷部では豊富な湧水を利用した谷水田が営まれていたことが解り、ある特定の目的のみのための遺跡とは考えられない。むしろ前期の拠点集落である下分遠崎遺跡や田村遺跡から分村した集団が河川を上流に上った地点で耕作に適当な場所を得たと考えられる。しかし、一方では、本村遺跡は低丘陵ながら比較的の眺望が良く遠くは太平洋まで見渡せるという軍事的緊張から論じられる高地性集落的な要素も持っている。瀬戸内地方の影響をつよく受けた土器が多量に出土することからも、本遺跡は弥生時代中期末の瀬戸内地方の時代背景を受けて成立したことが窺える。

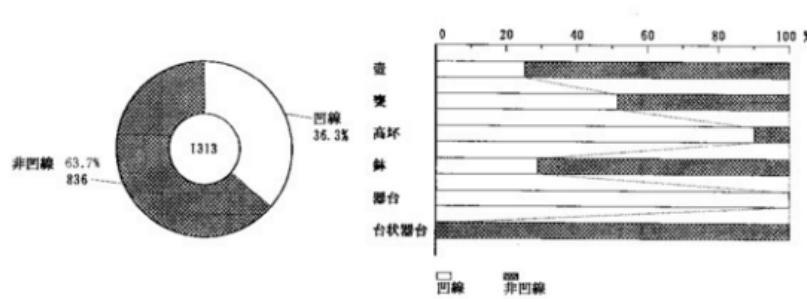
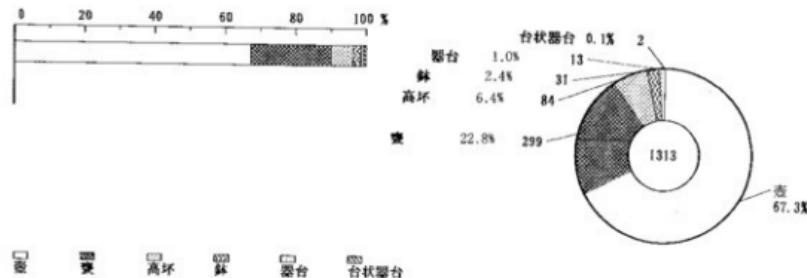
参考文献 森岡秀人 「高地性集落性格論」(『論争・学説 日本の考古学』第4巻 弥生時代)

タ 「高地性集落」(『弥生文化の研究』第7巻)

小野忠熙編 「高地性集落の研究」資料篇

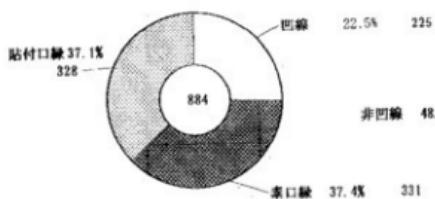
各器種における凹線と非凹線の割合 1

器種	土器点数	組成比率	凹線文		非凹線文	
			225	(25.5%)	素口縁	貼付口縁
					331(37.4%)	328(37.1%)
壺	884	(67.3%)	659	(74.5%)		
甌	299	(22.8%)	154	(51.5%)	145	(48.5%)
高环	84	(6.4%)	76	(90.5%)	8	(9.5%)
鉢	31	(2.4%)	9	(29.0%)	22	(71.0%)
器台	13	(1.0%)	13	(100%)	0	(0%)
台状器台	2	(0.1%)	0	(0%)	2	(100%)
合計	1313		477	(36.3%)	836	(67.3%)

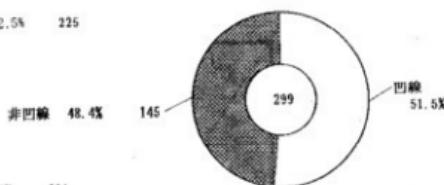


各器種における凹線と非凹線の割合 2

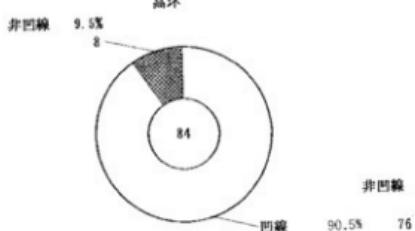
亞



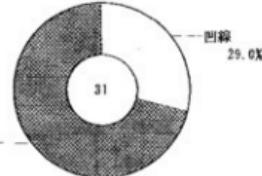
妻



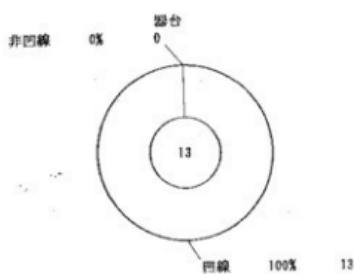
高坏



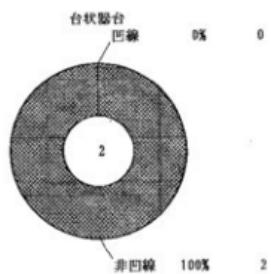
鉢



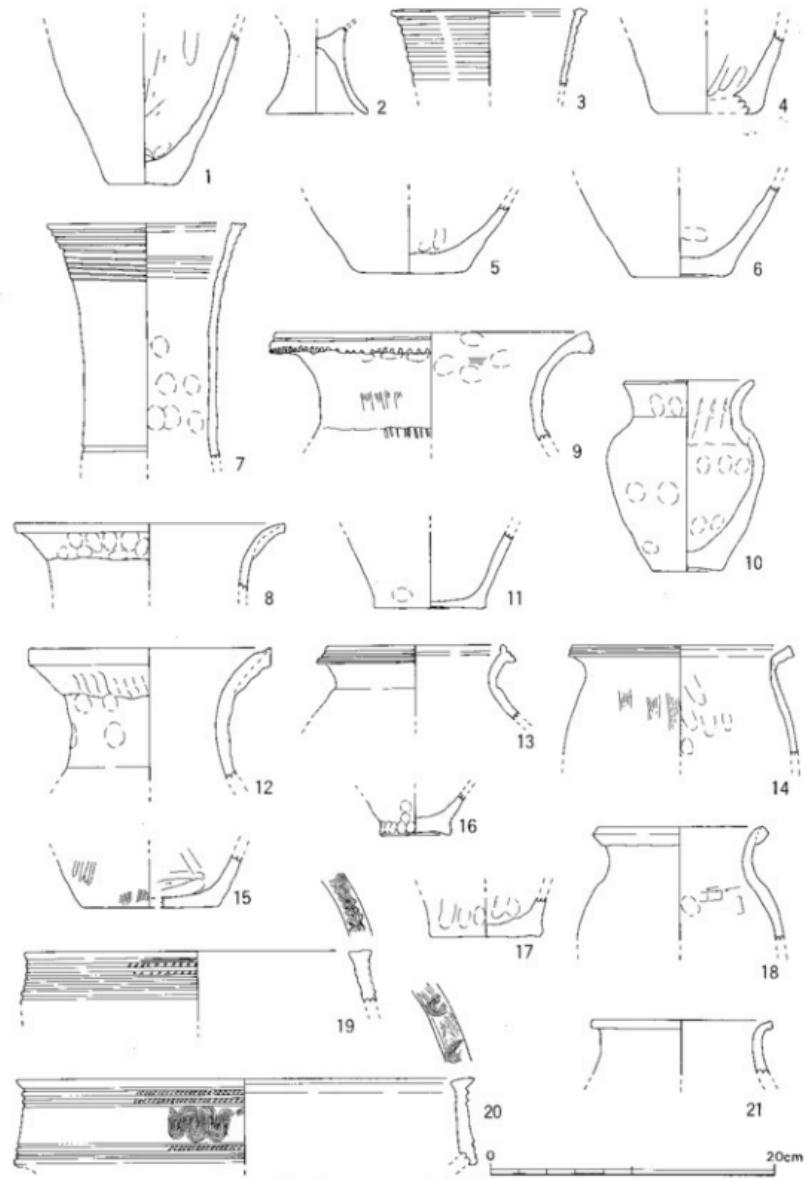
器台



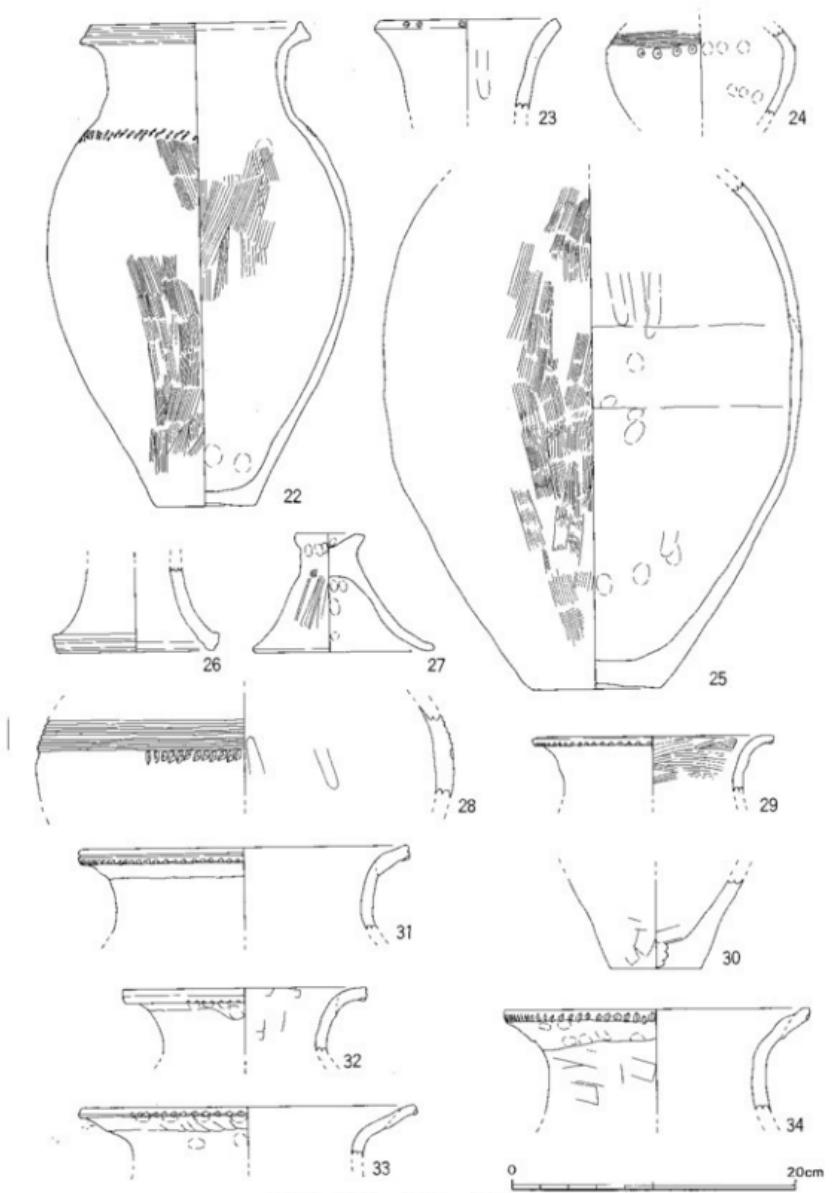
台状器台



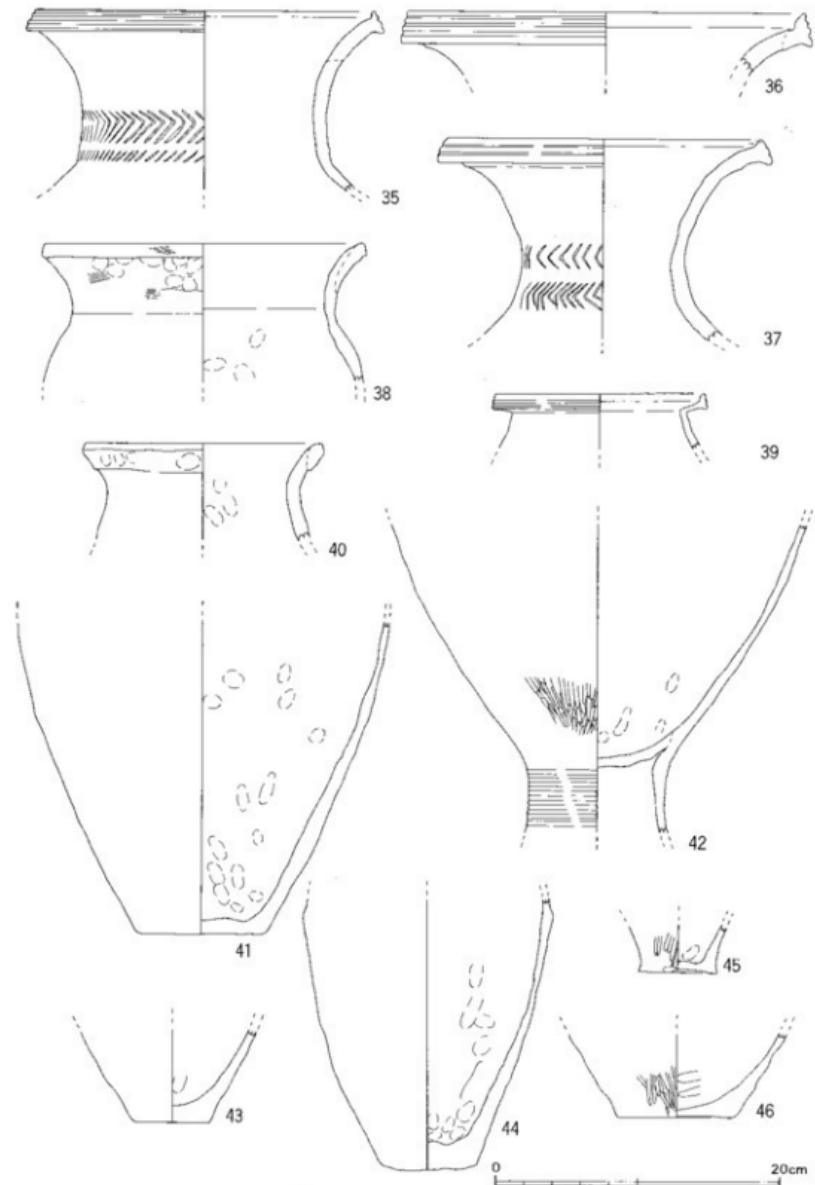
遺物実測図及び遺物観察表



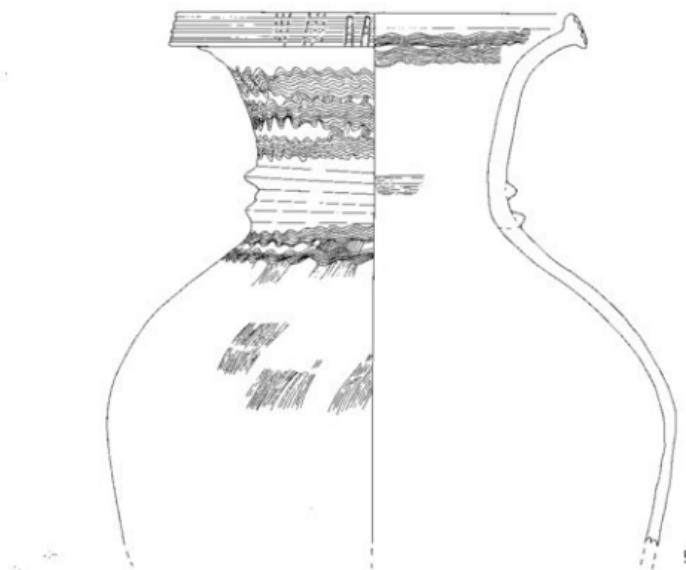
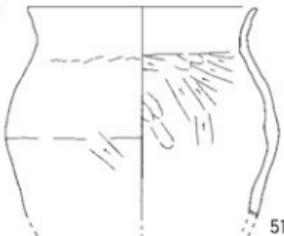
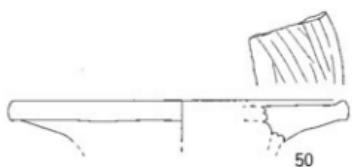
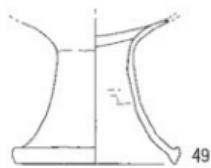
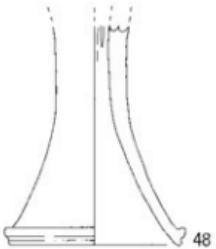
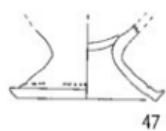
第28図 ST 1~5 出土土器実測図



第29図 ST 6, SK 1・2出土土器実測図

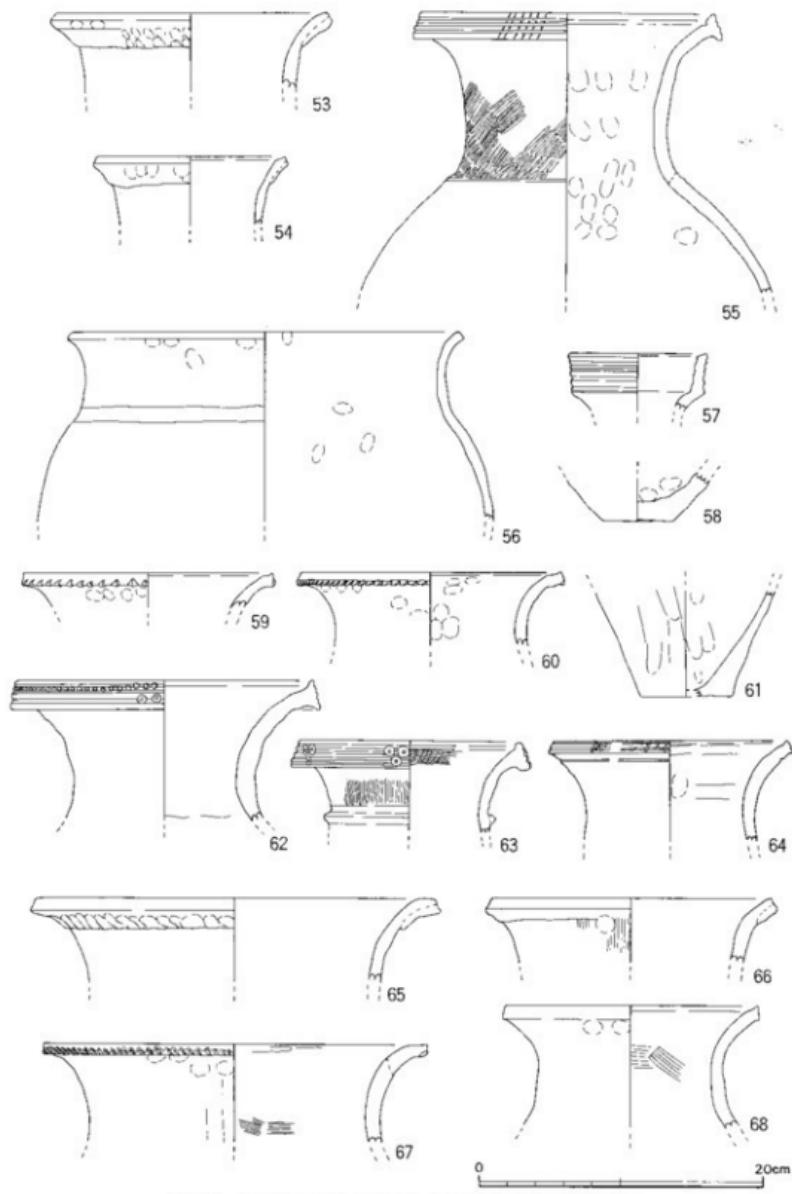


第30図 SK 2 出土土器実測図

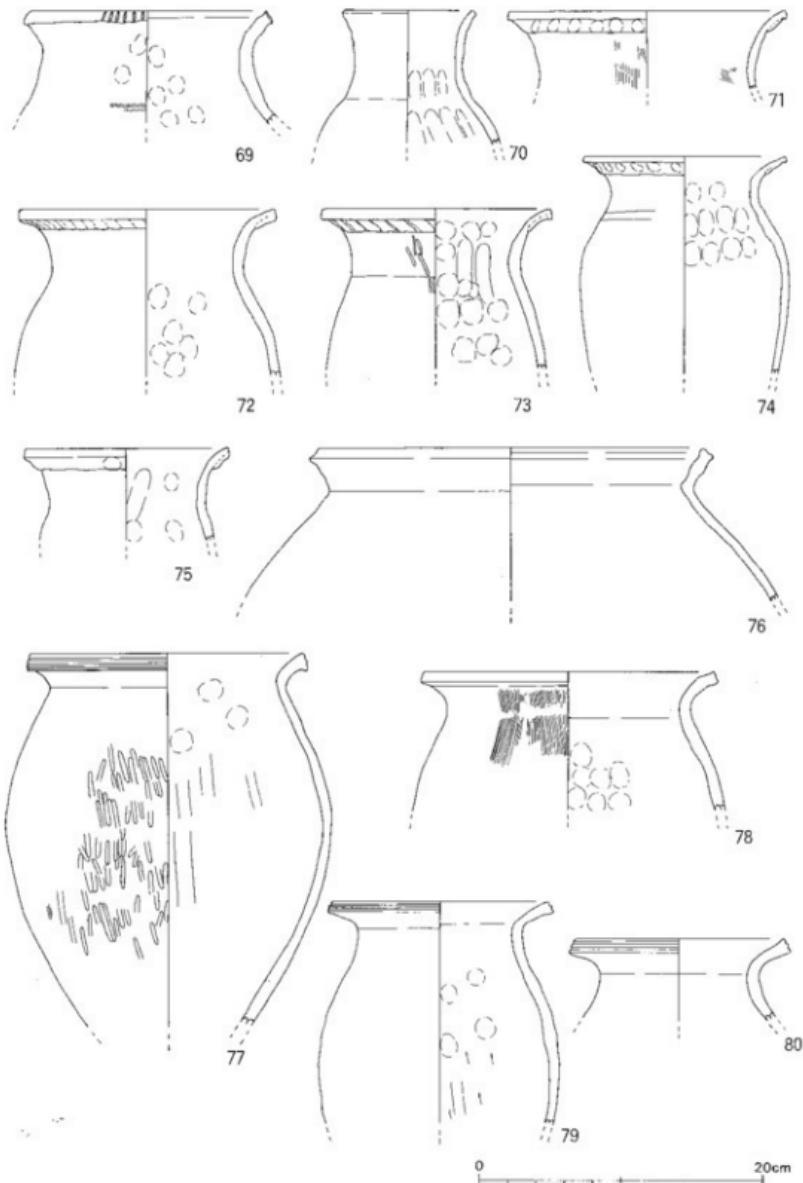


0 20cm

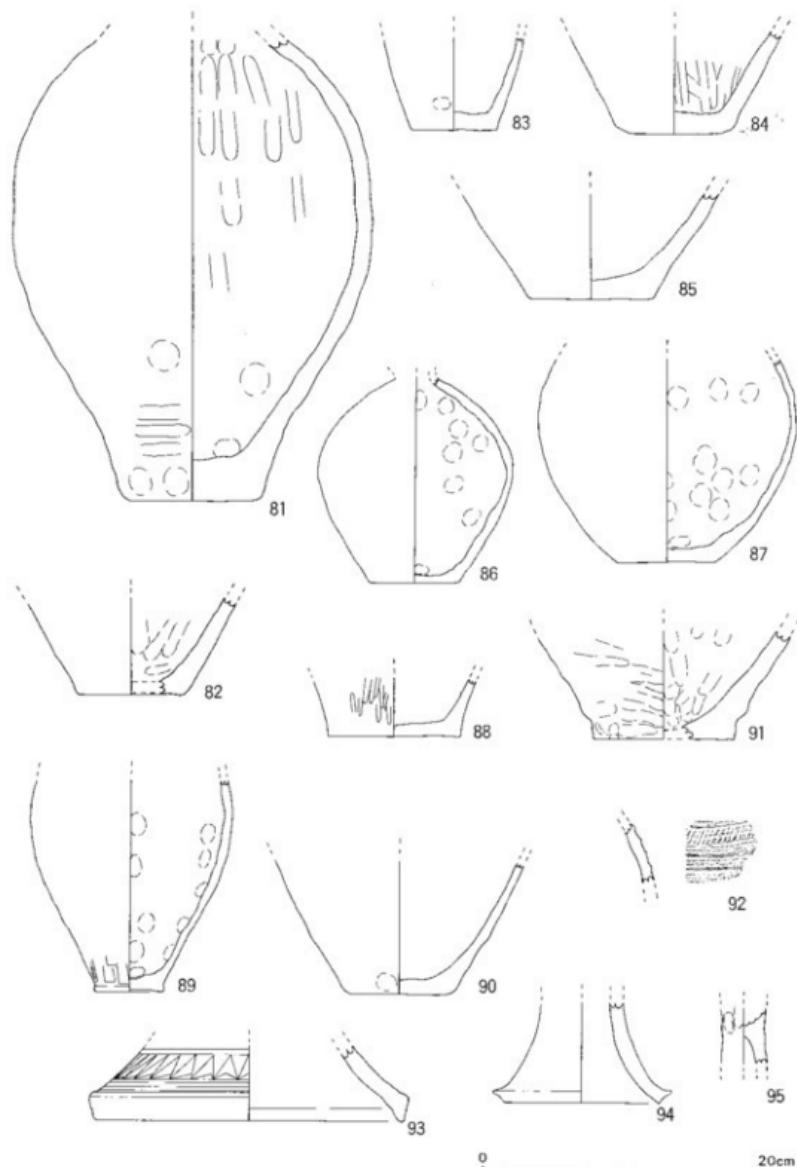
第31図 SK 2・3出土土器実測図



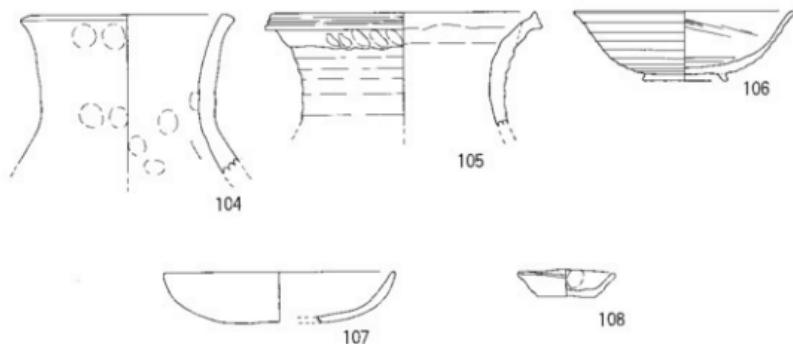
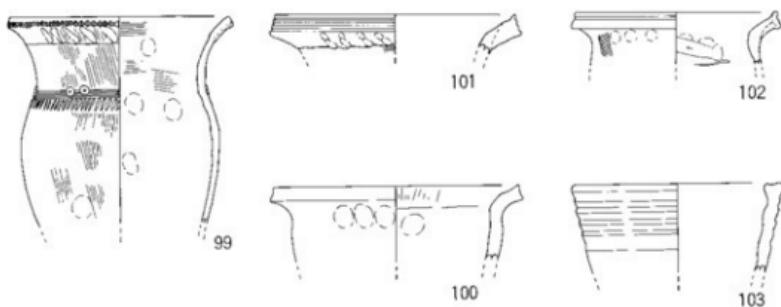
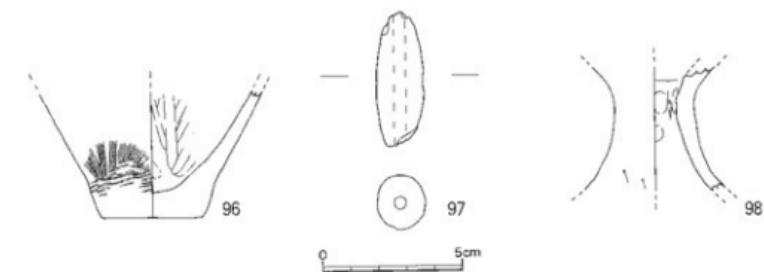
第32図 SK 3・SD 1・5・6, D区包含層出土土器実測図



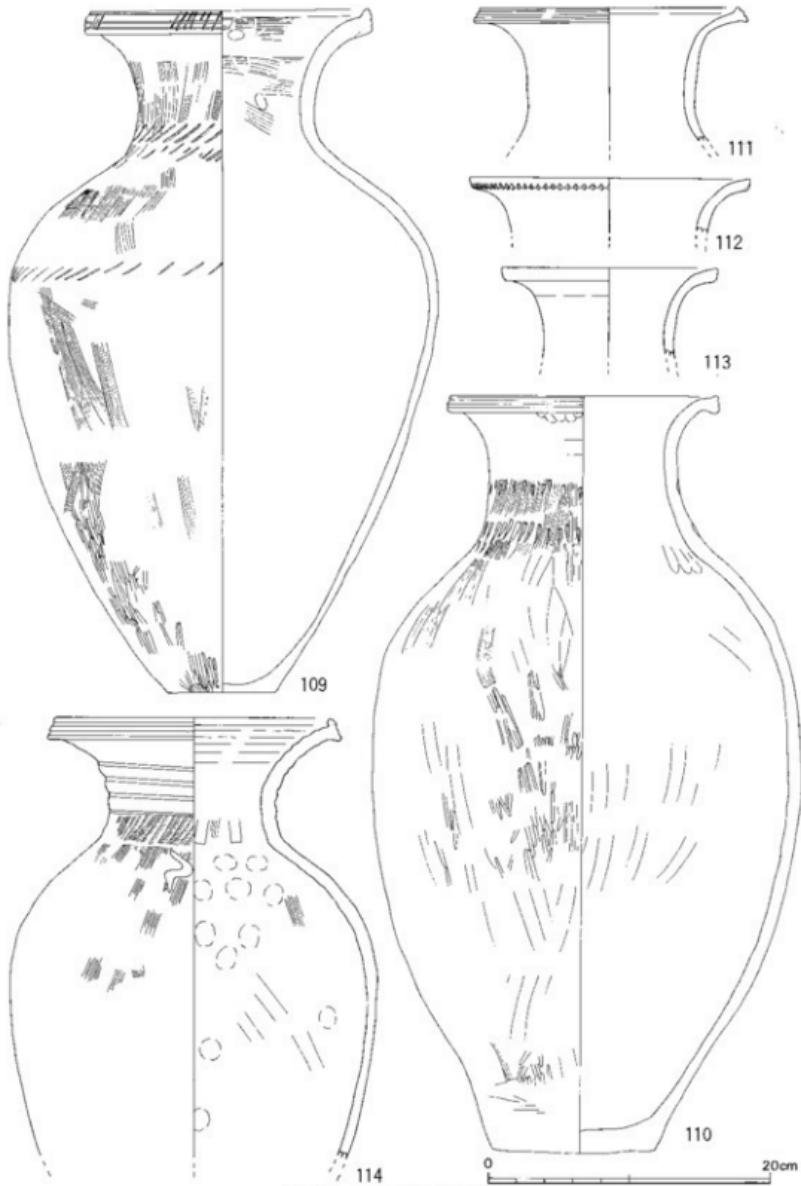
第33図 SD 6 出土土器実測図



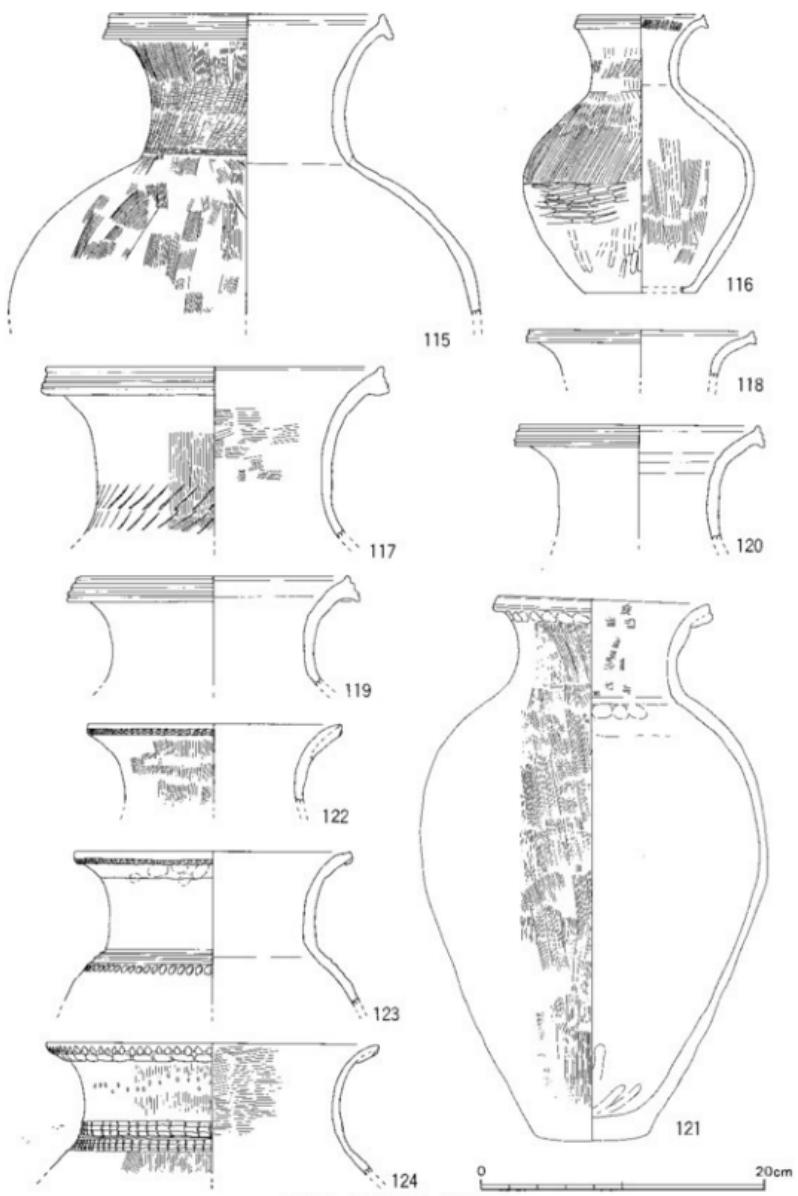
第34図 SD 6 出土土器実測図



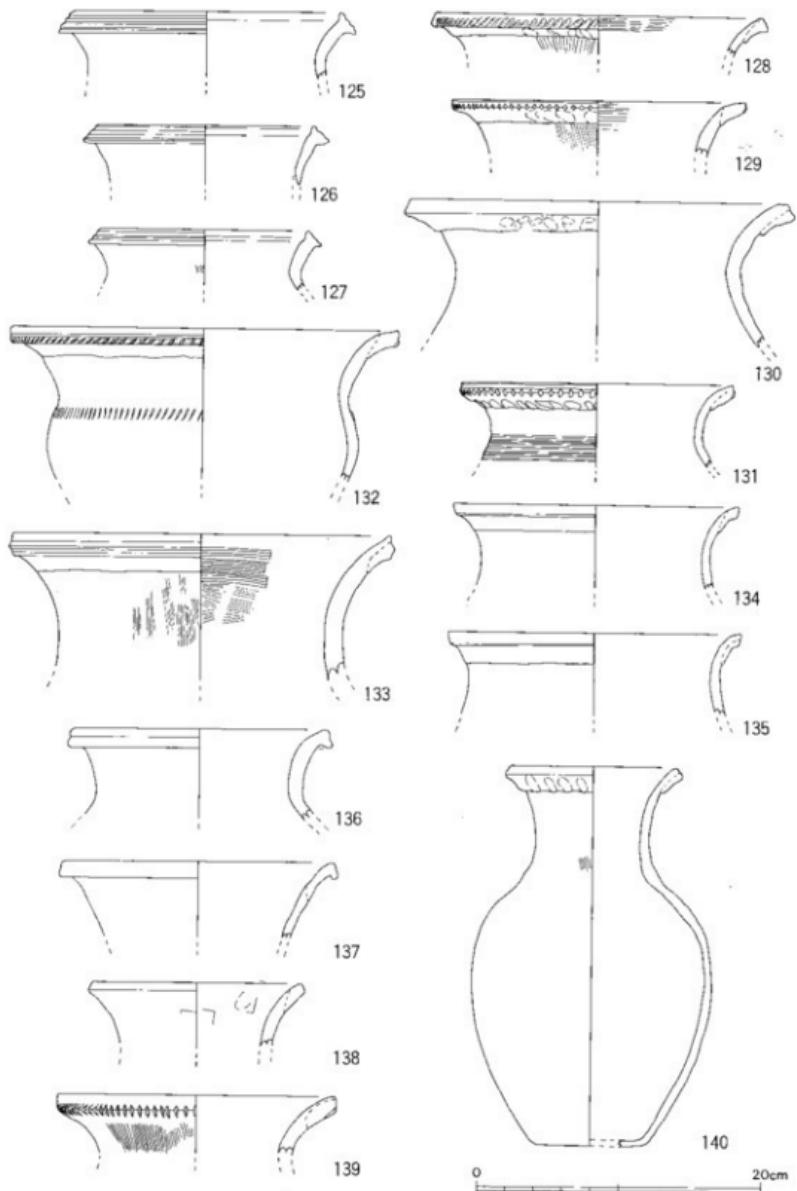
第35図 SD 7, 8, 10, 13~16, II-A区 Pit 出土土器実測図



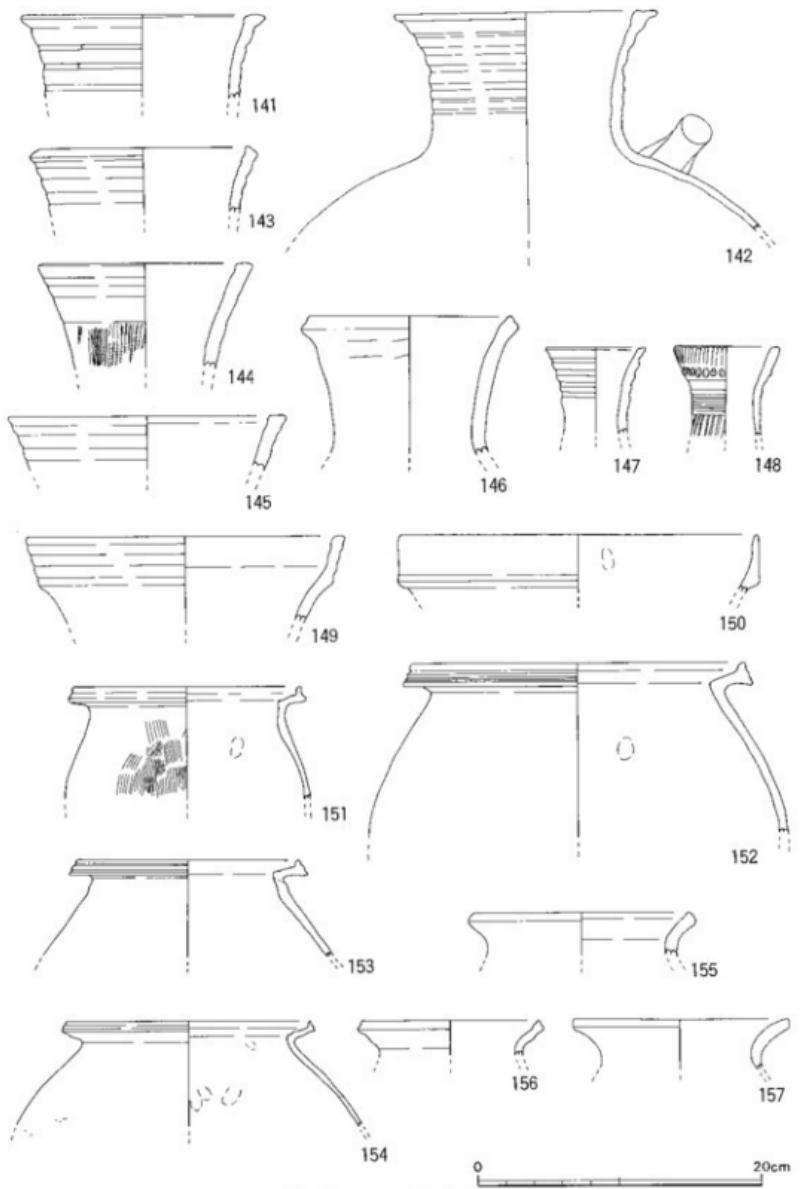
第36図 SX 1 出土土器実測図



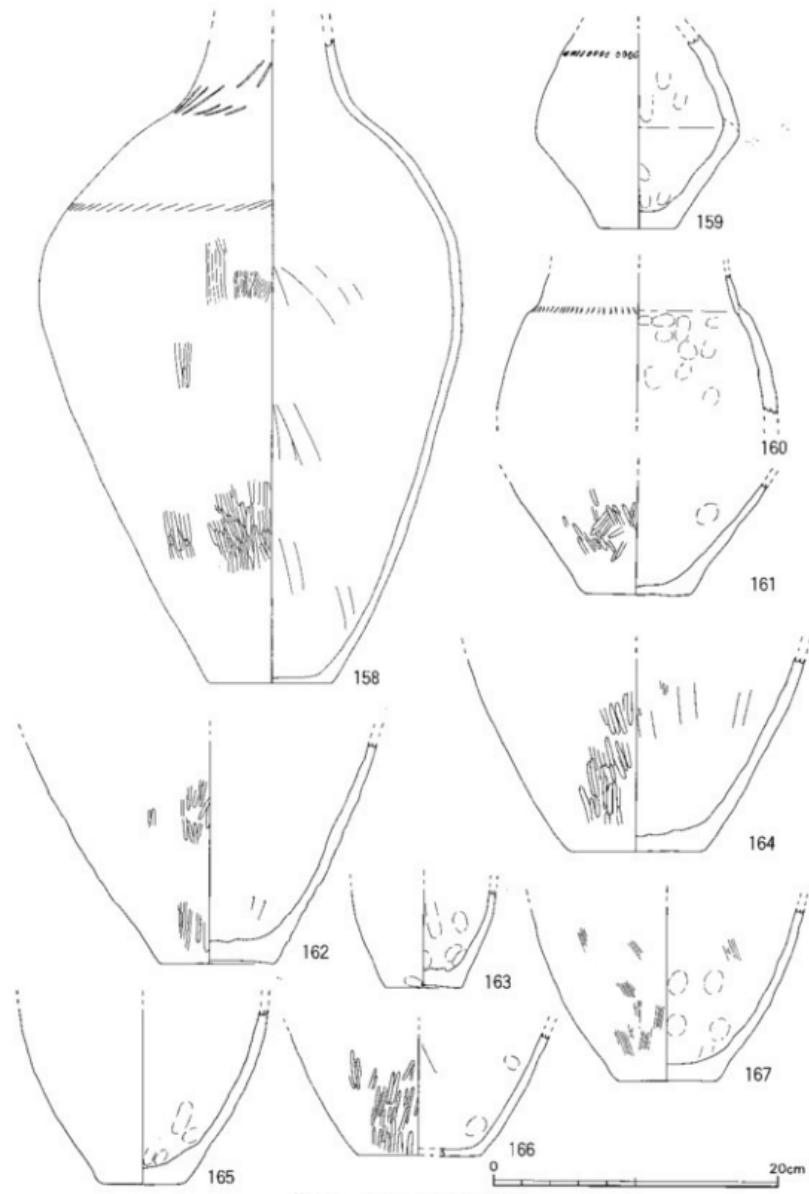
第37図 SX1出土土器実測図



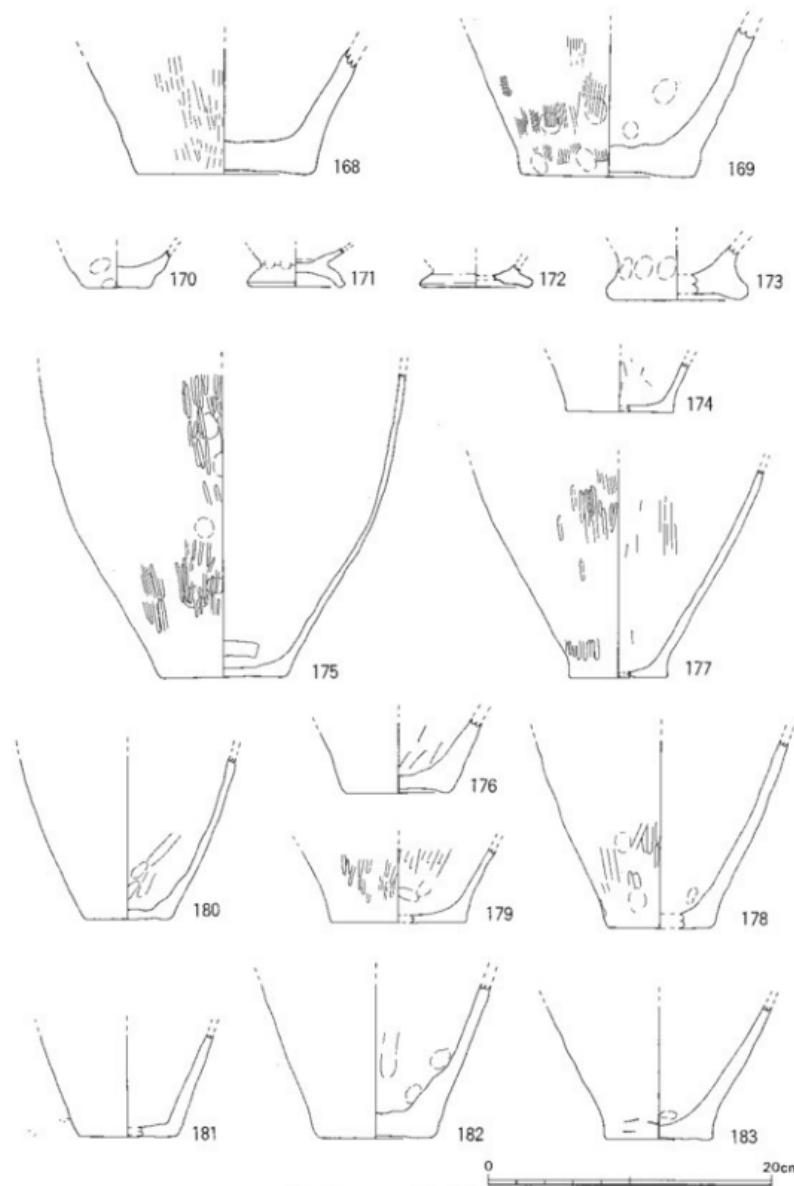
第38図 SX 1 出土土器実測図



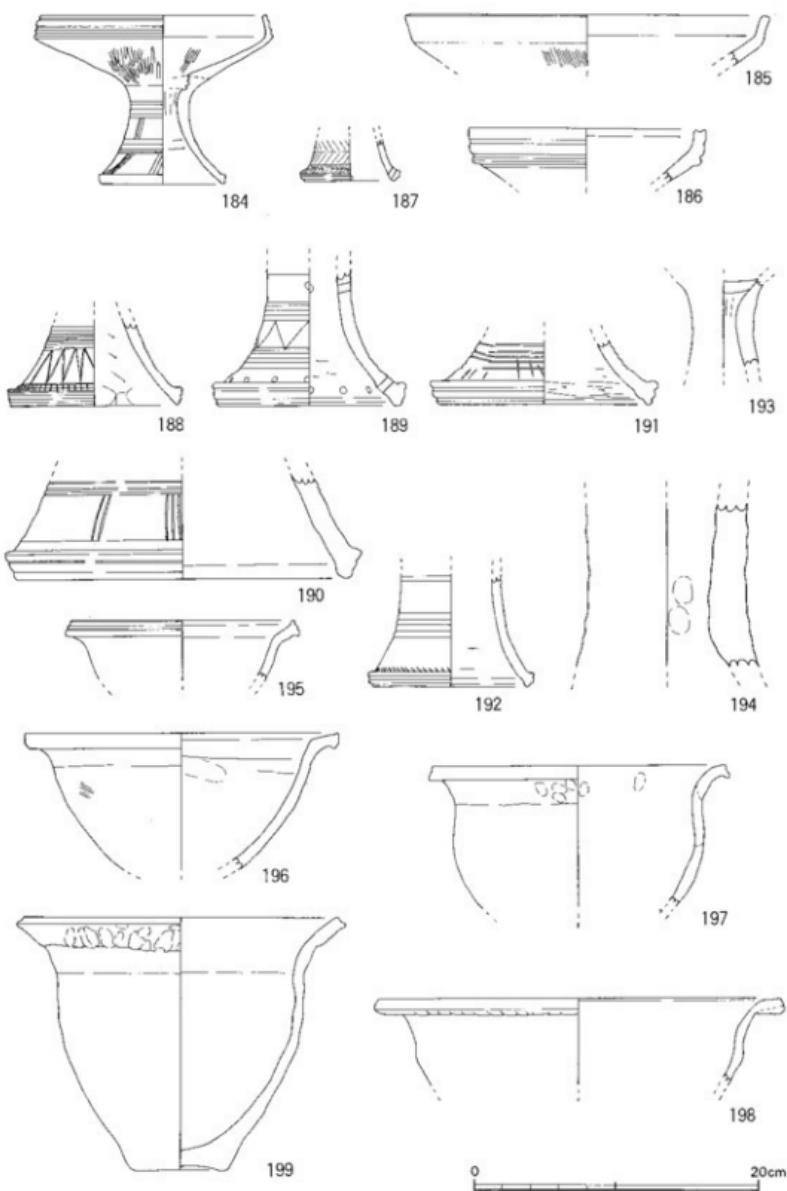
第39図 S X 1 出土土器実測図



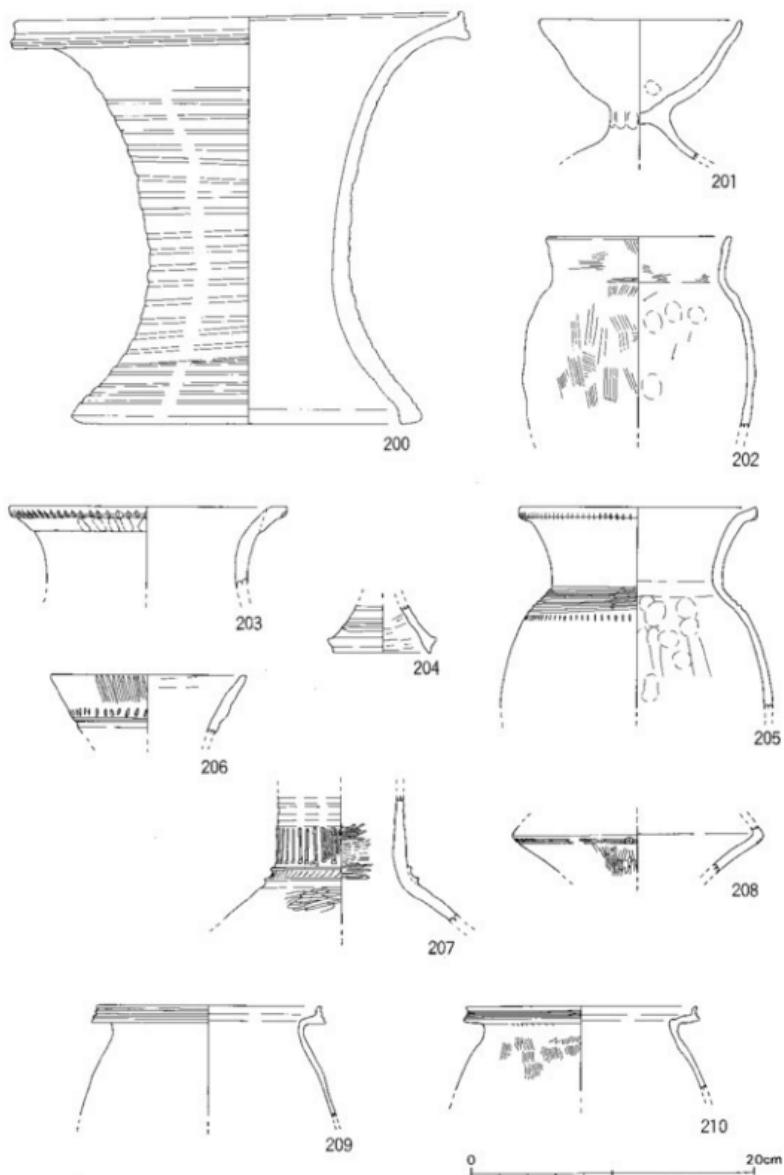
第40図 SX 1 出土土器実測図



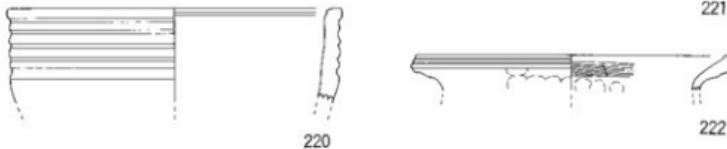
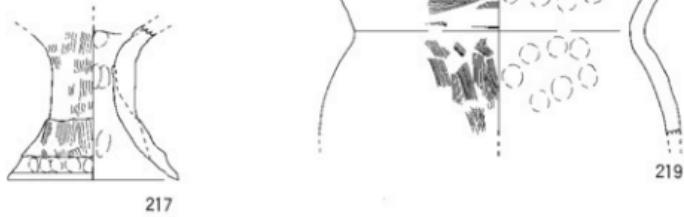
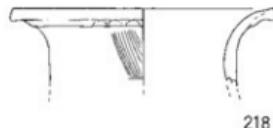
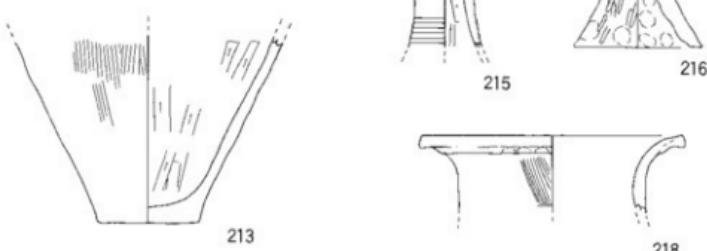
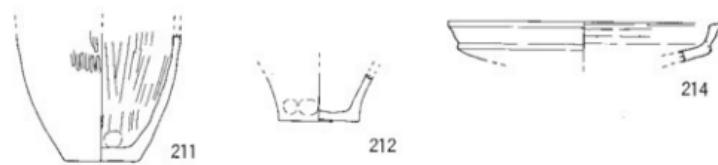
第41図 SX1 出土土器実測図



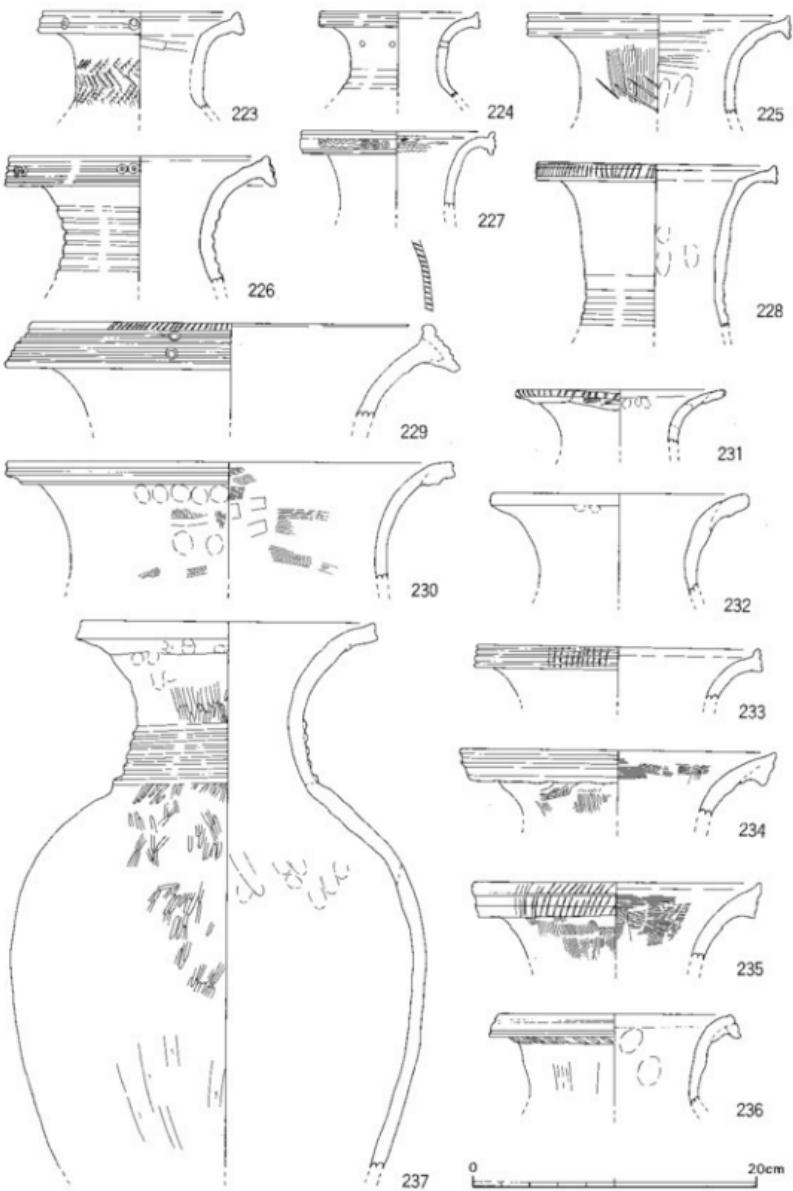
第42図 SX 1 出土土器実測図



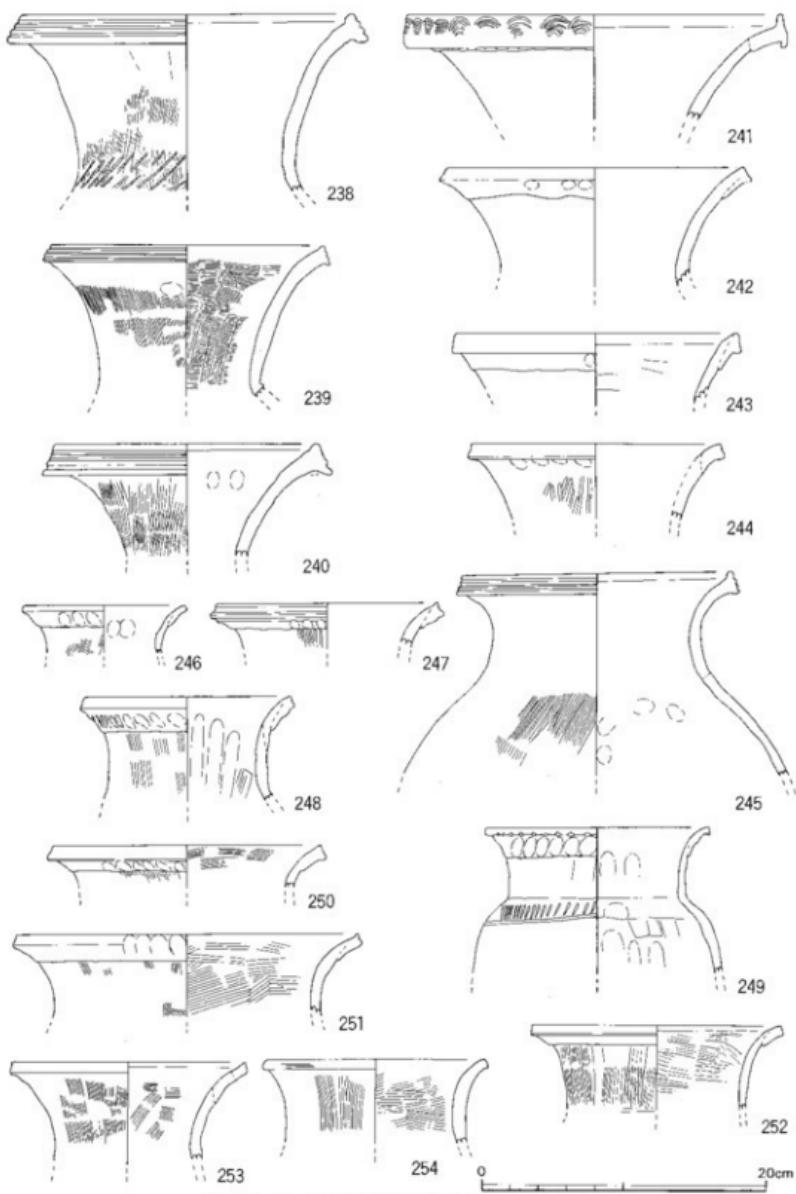
第43図 SX 1, 包含層出土土器実測図



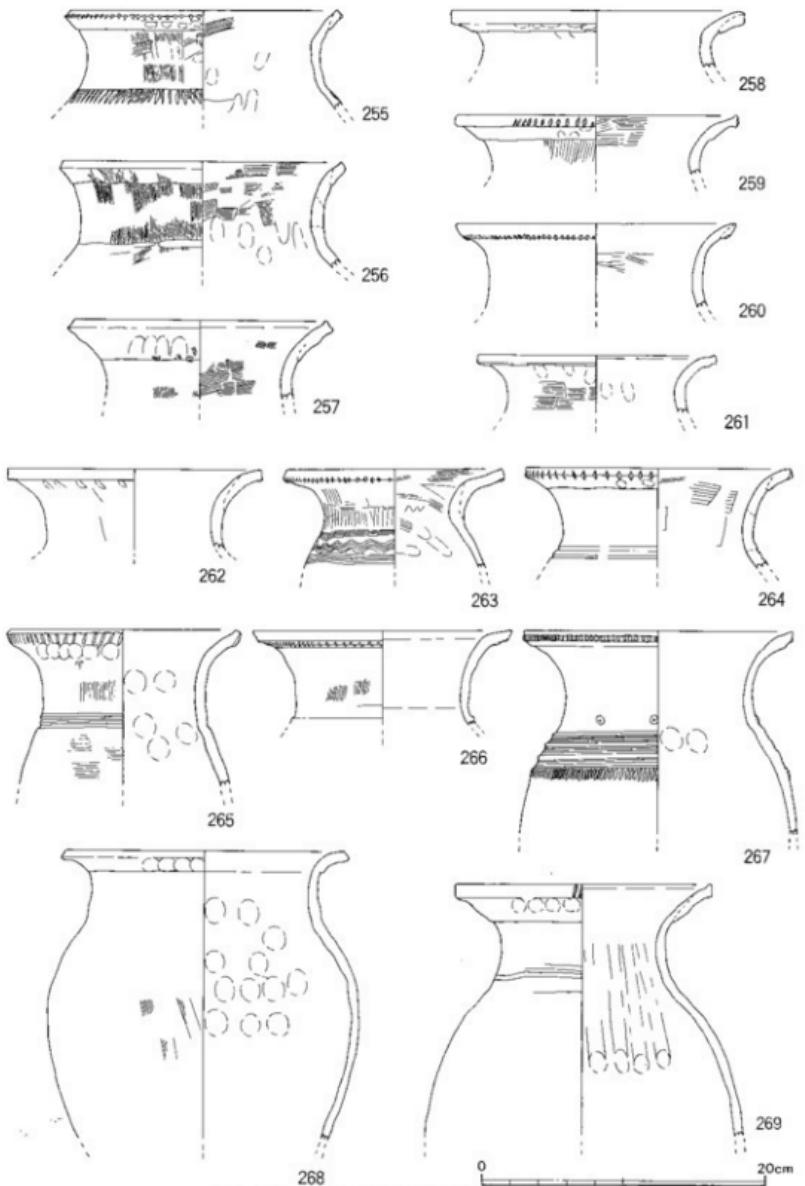
第44図 包含層出土土器実測図



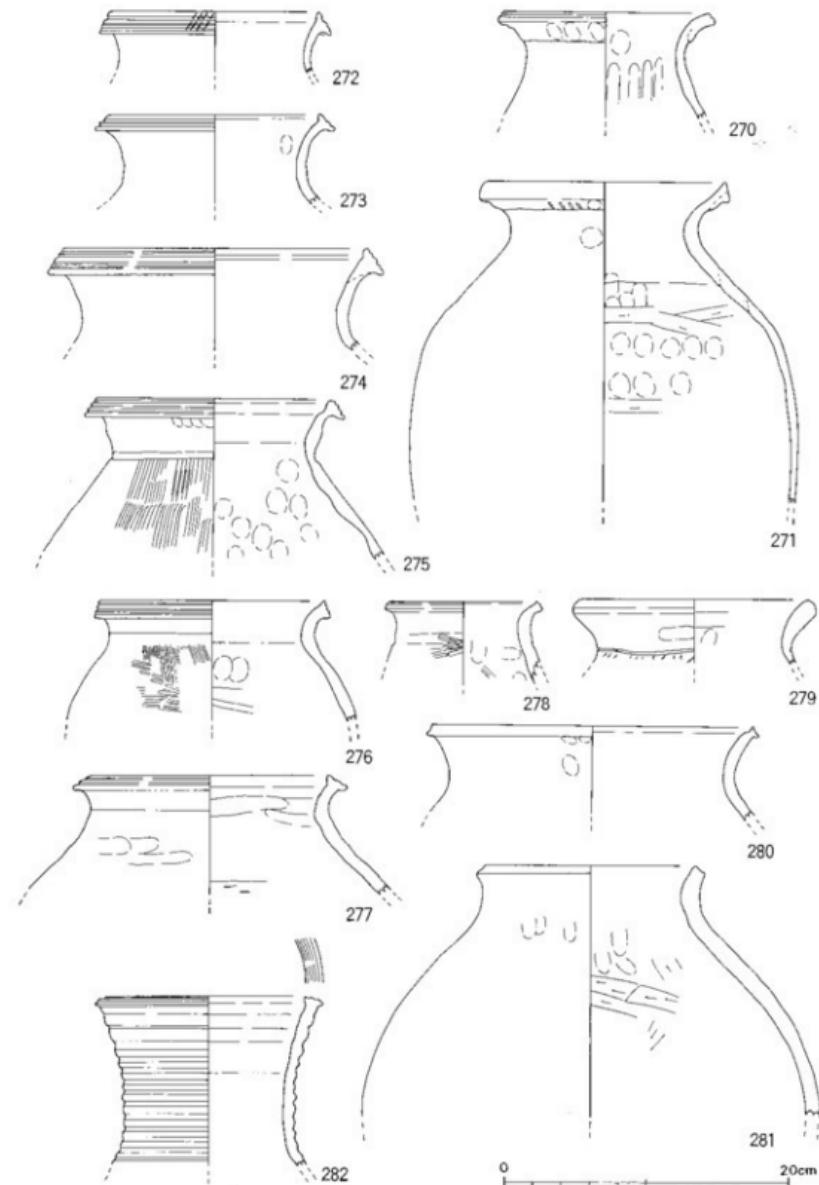
第45図 II-A区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



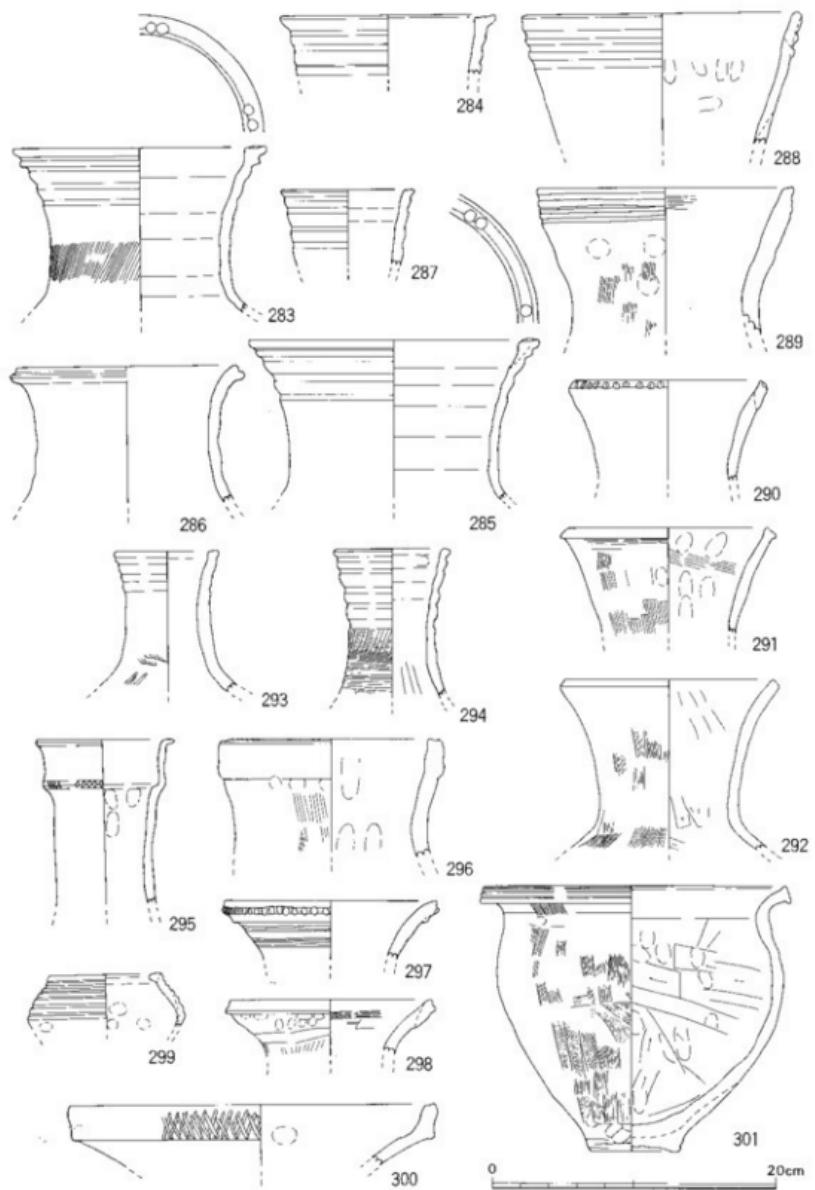
第46図 II-A区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



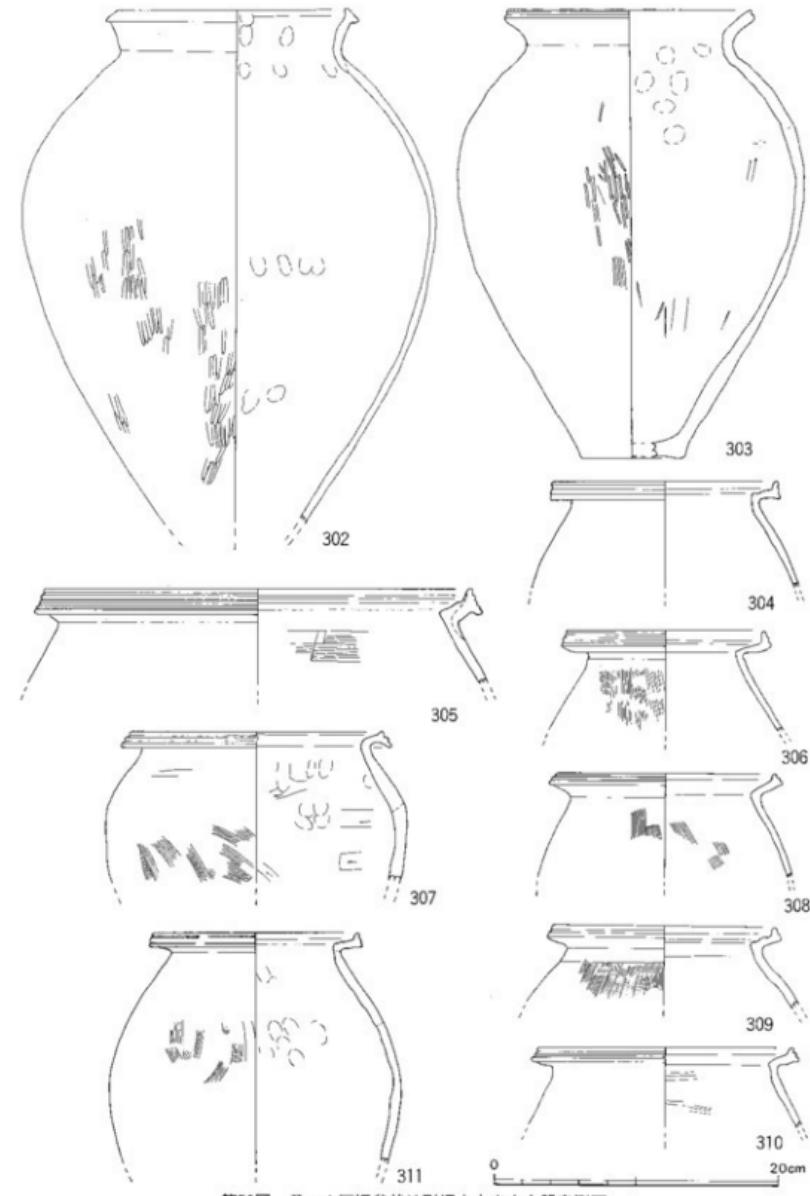
第47図 II-A区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



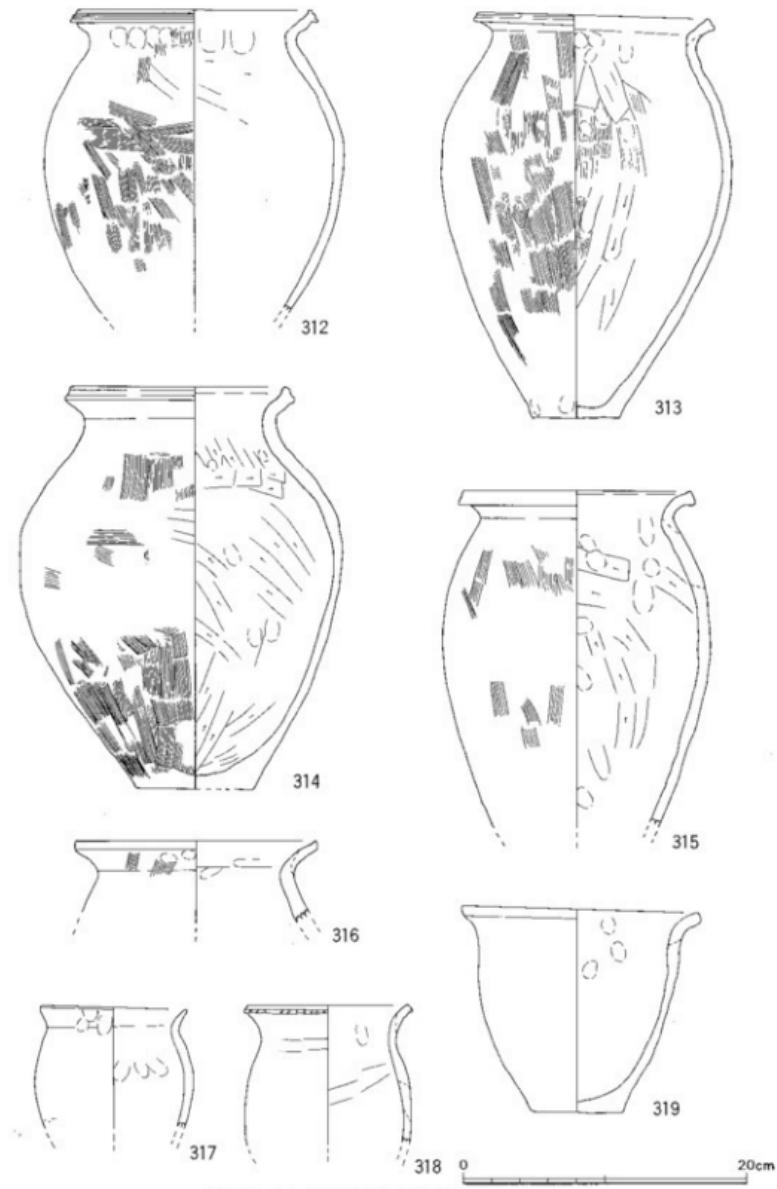
第48図 II-A区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



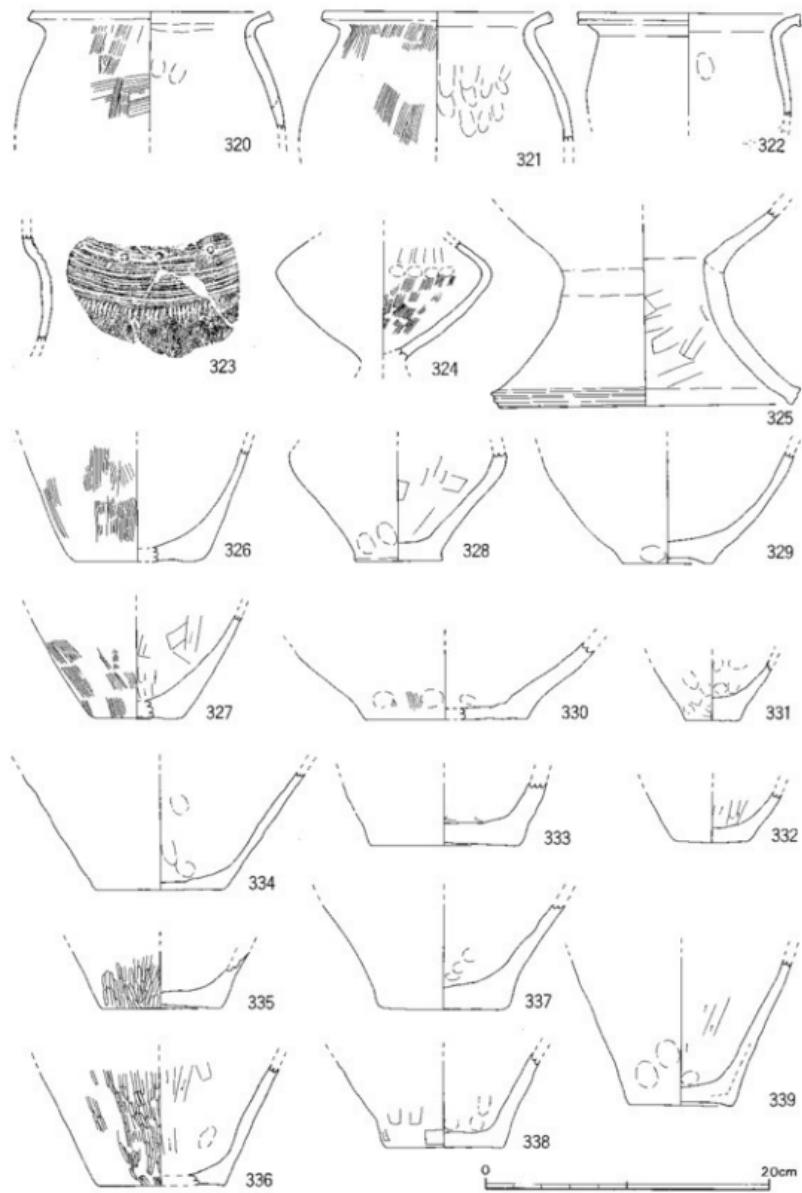
第49図 II-A区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



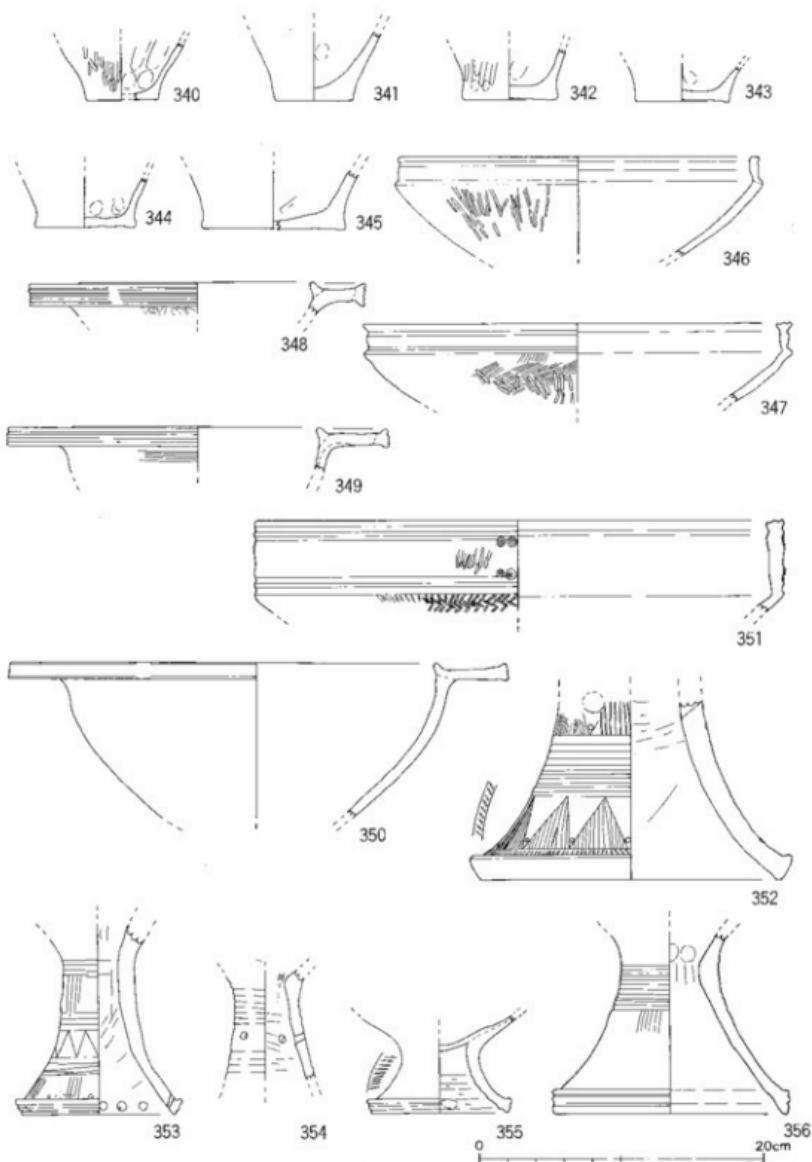
第50図 II-A区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



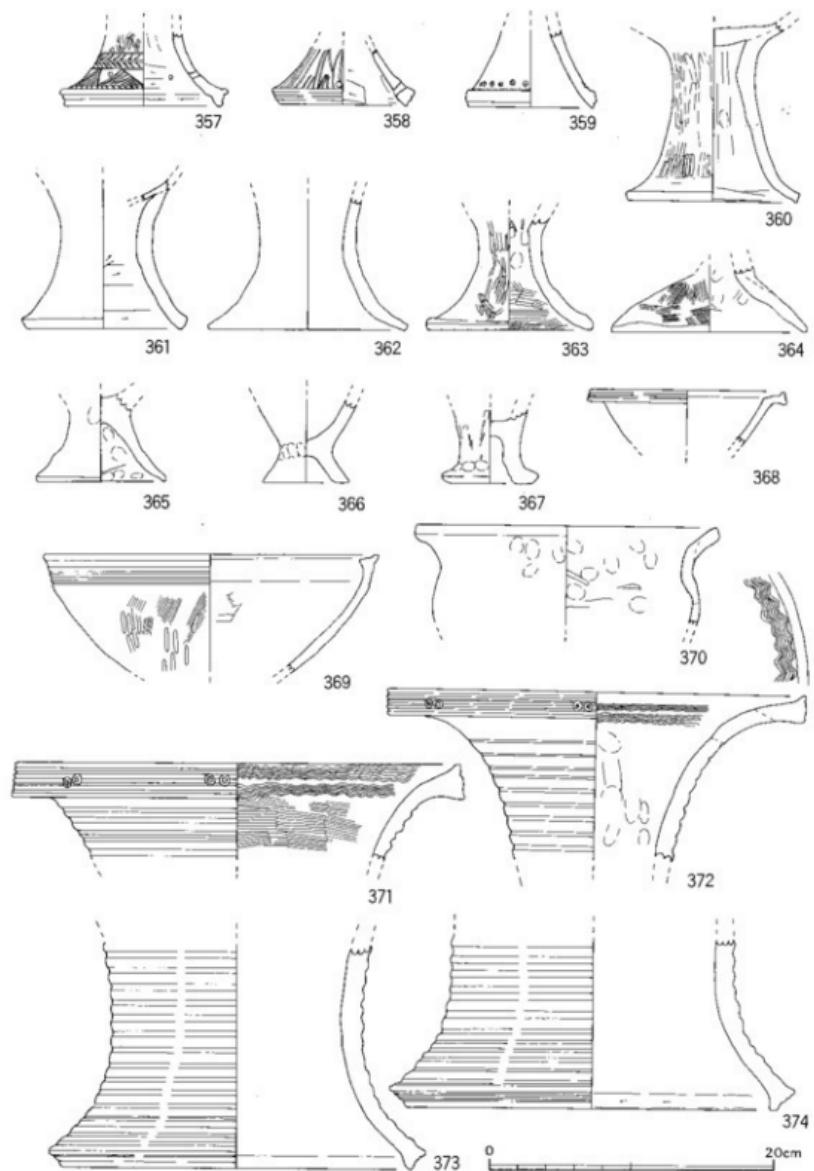
第51図 II-A区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



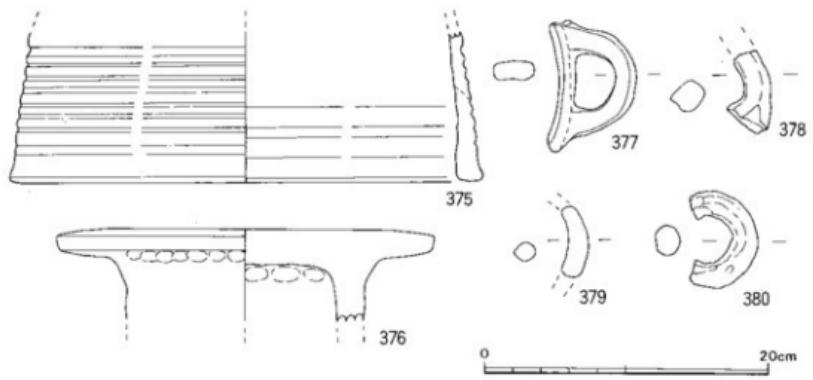
第52図 II-A区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



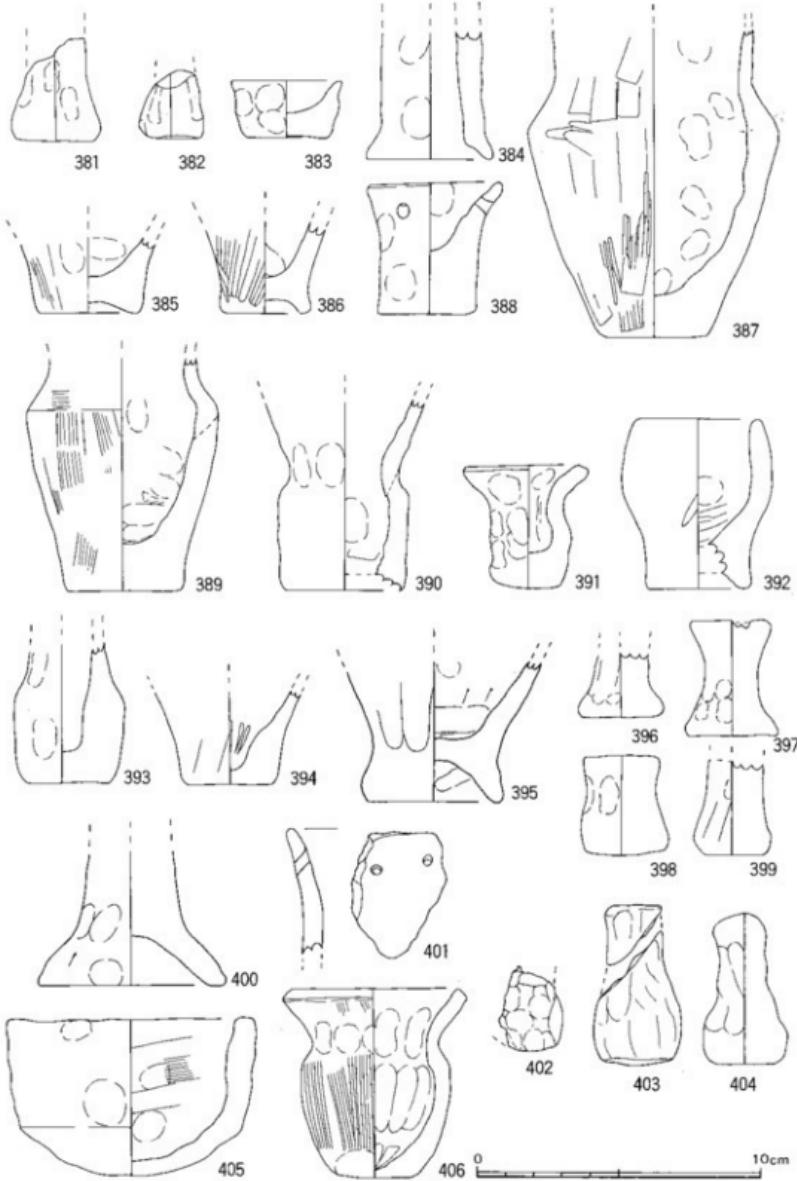
第53図 II-A区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



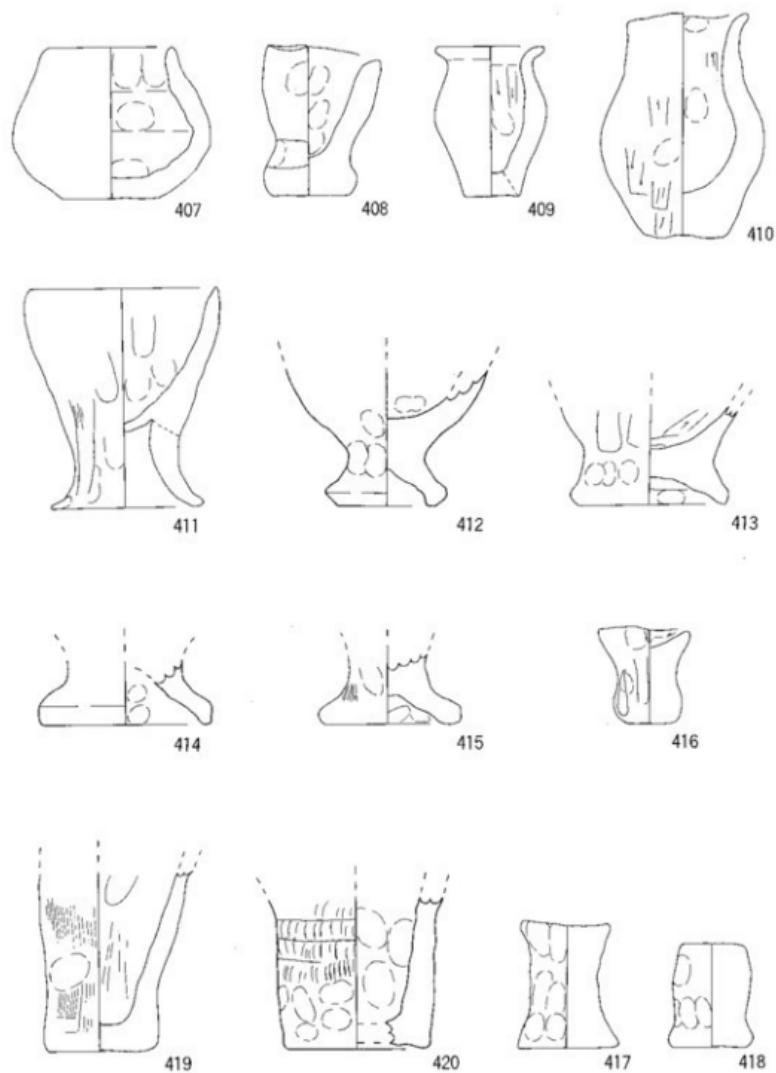
第54図 II-A区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



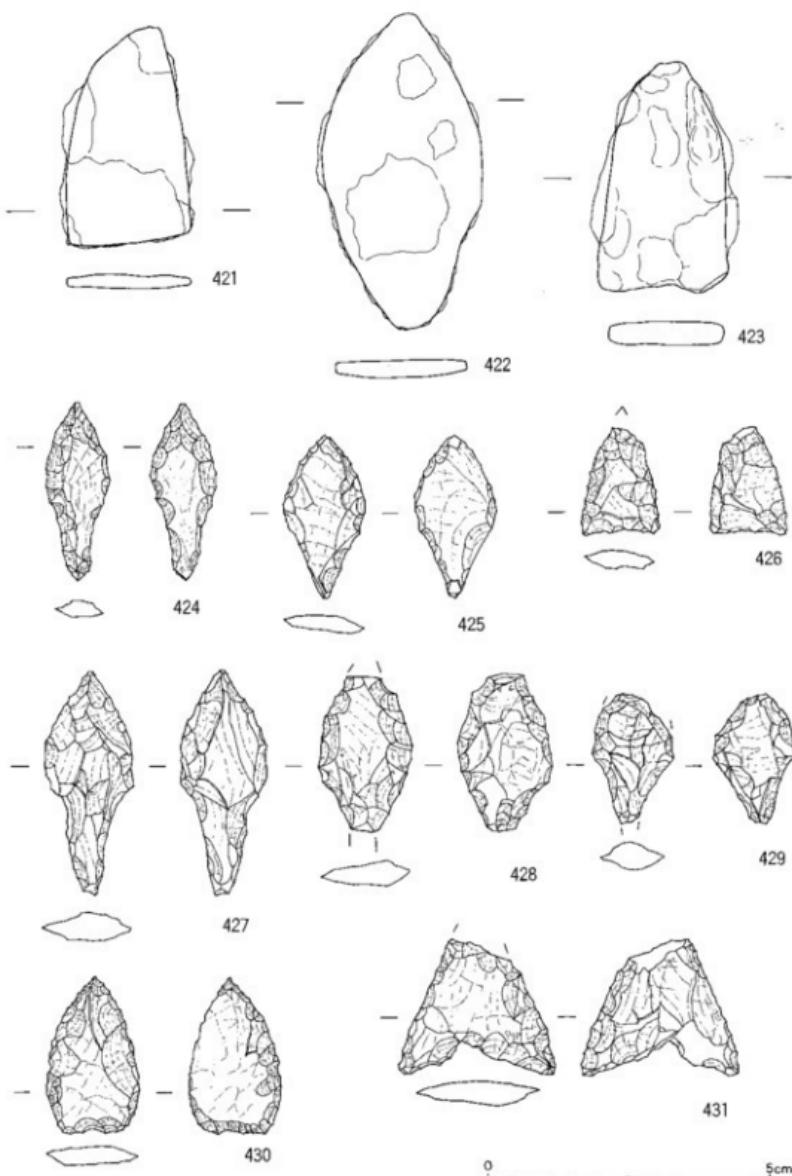
第55図 II-A区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



第56図 ミニチュア土器実測図



第57図 ミニチュア土器実測図



第58図 鉄鎌、石鎌実測図



433



432



435



434



436



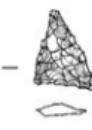
437



438



439

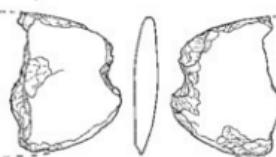
440
第59圖 石鎚實測圖

0

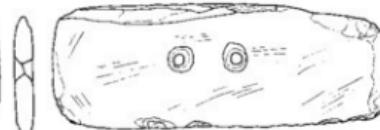
5cm



441



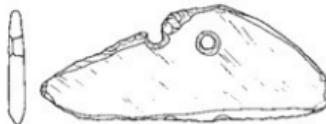
442



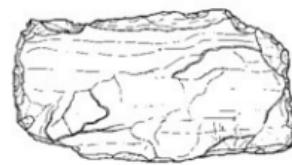
443



444



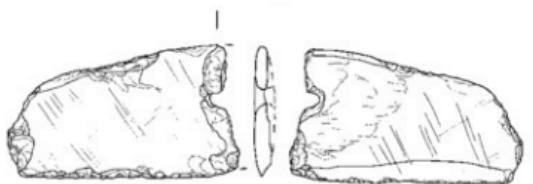
445



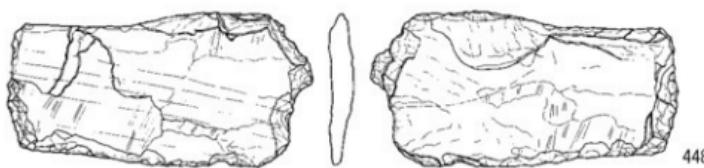
446

0 10cm

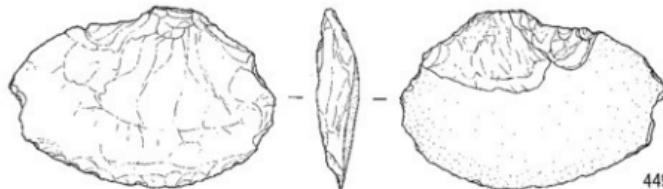
第60図 石包丁実測図



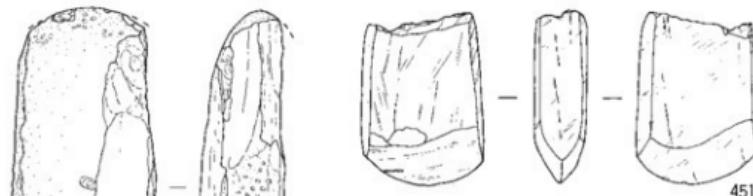
447



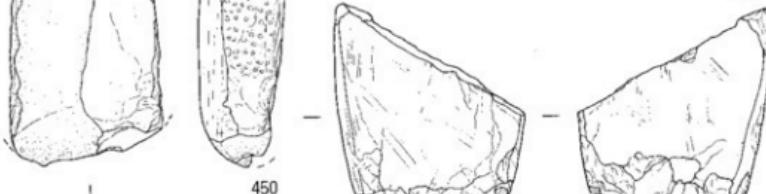
448



449



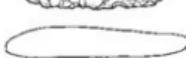
451



450



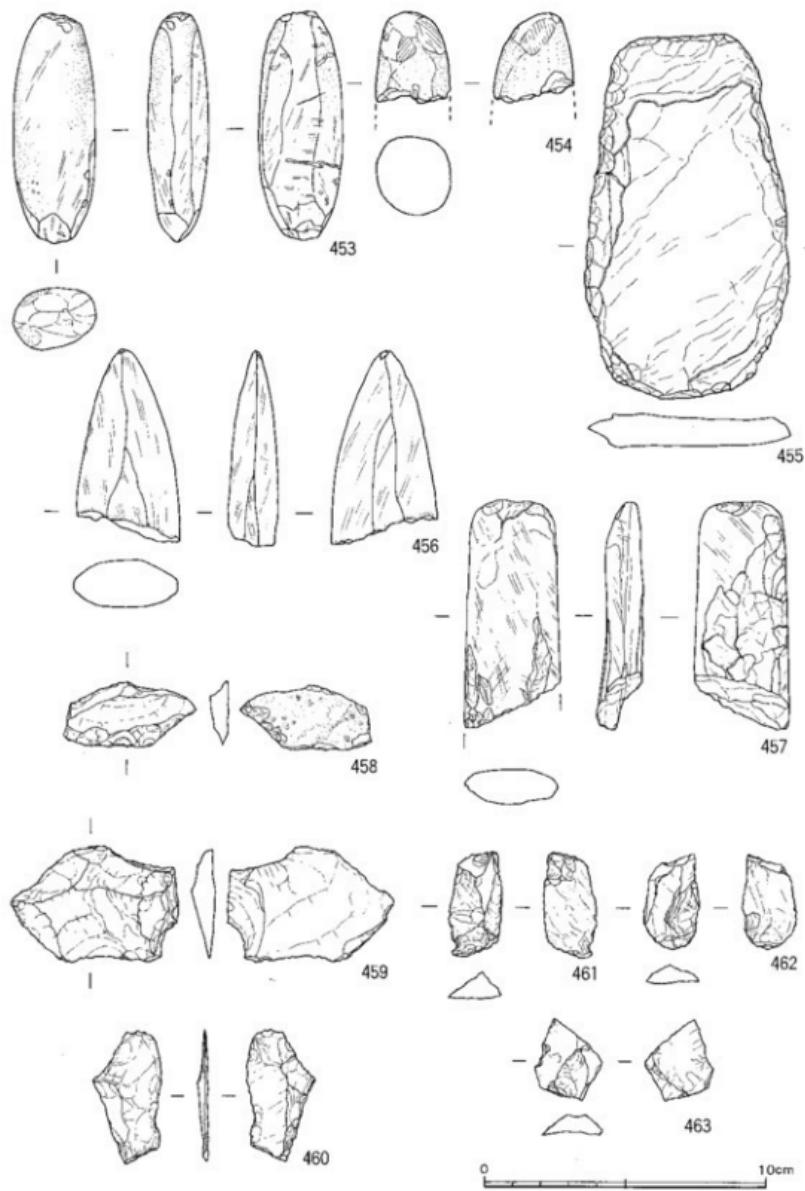
452



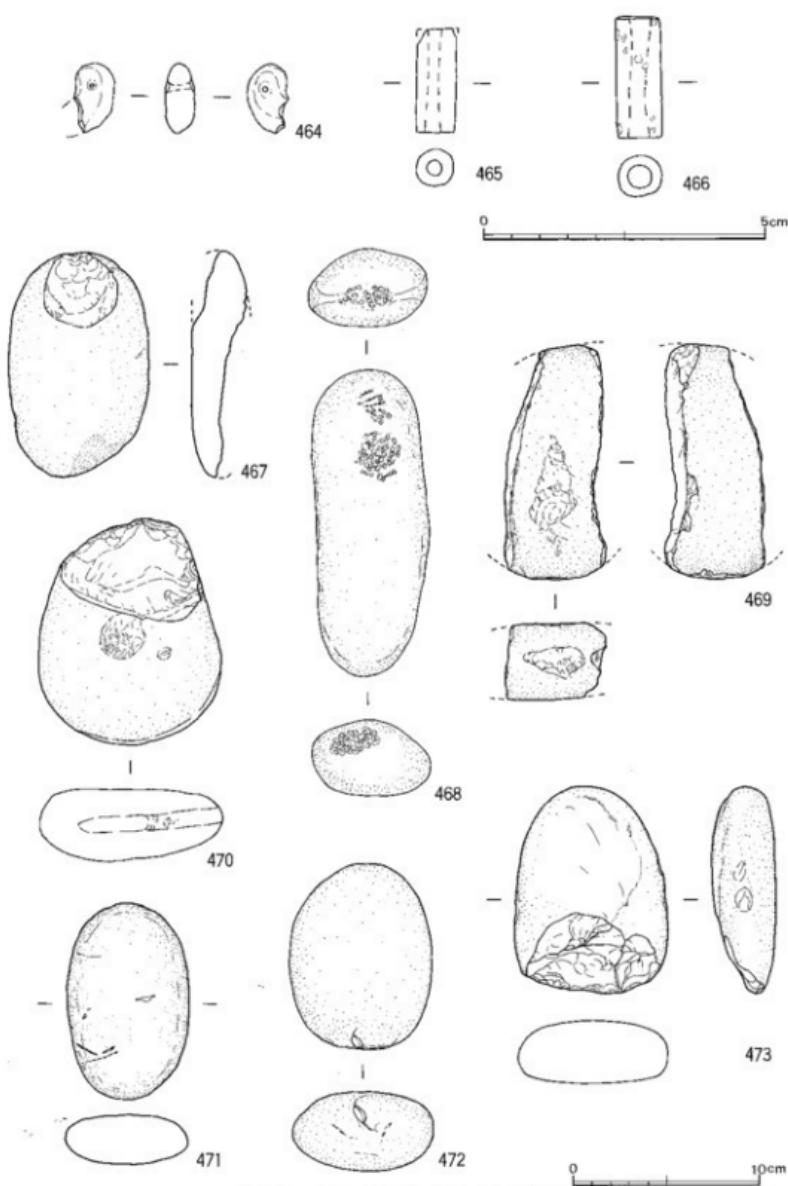
0

10cm

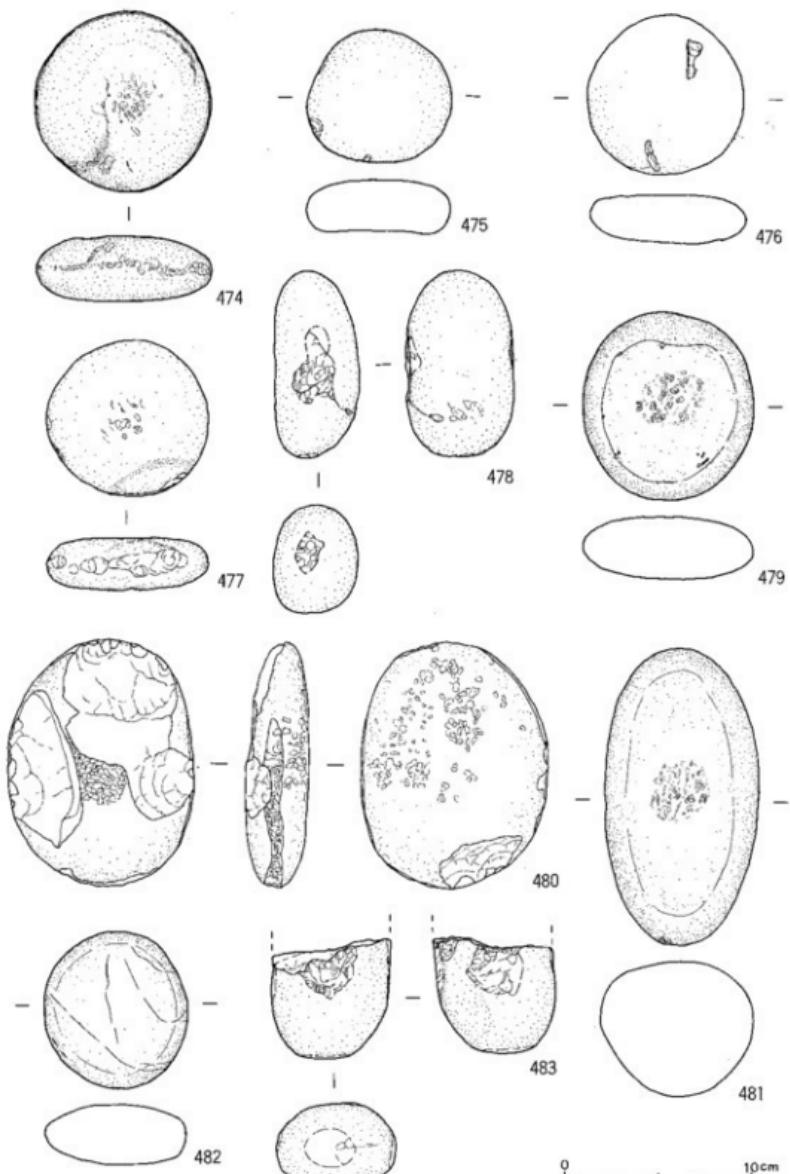
第61圖 石包丁，石斧實測圖



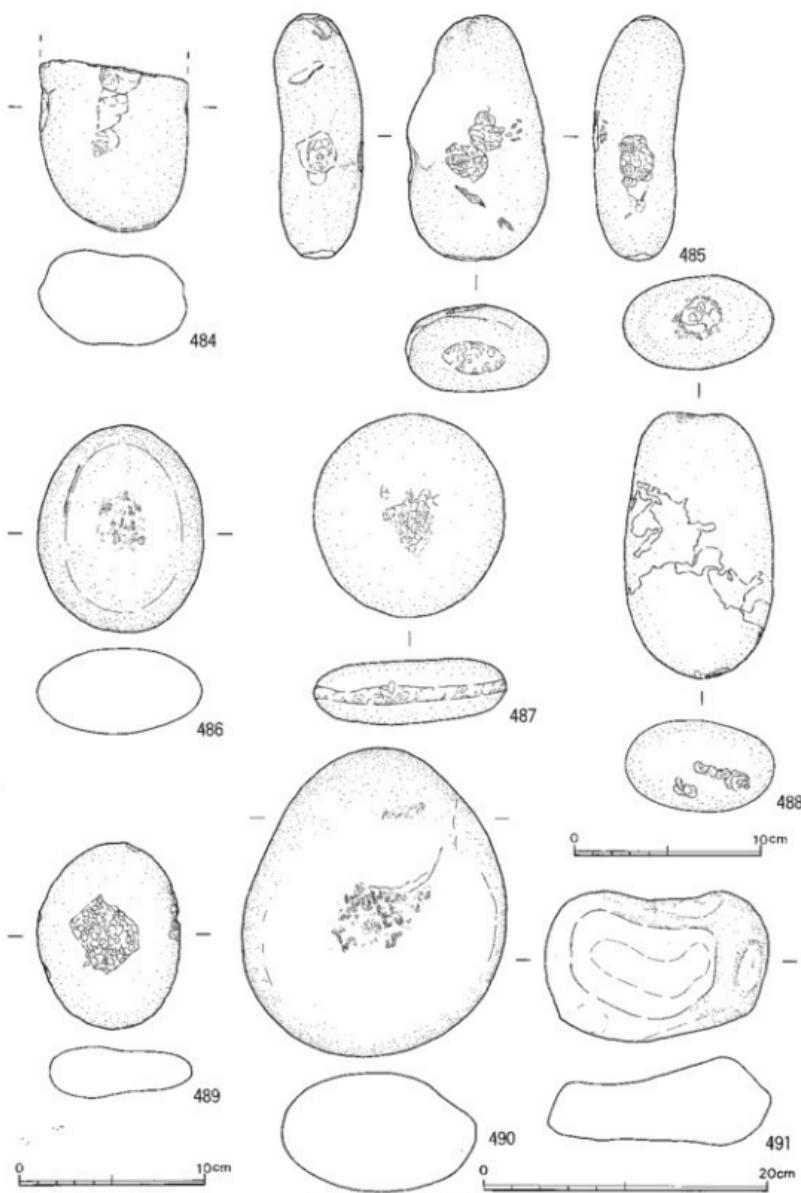
第62図 石斧、石剣、剥片実測図



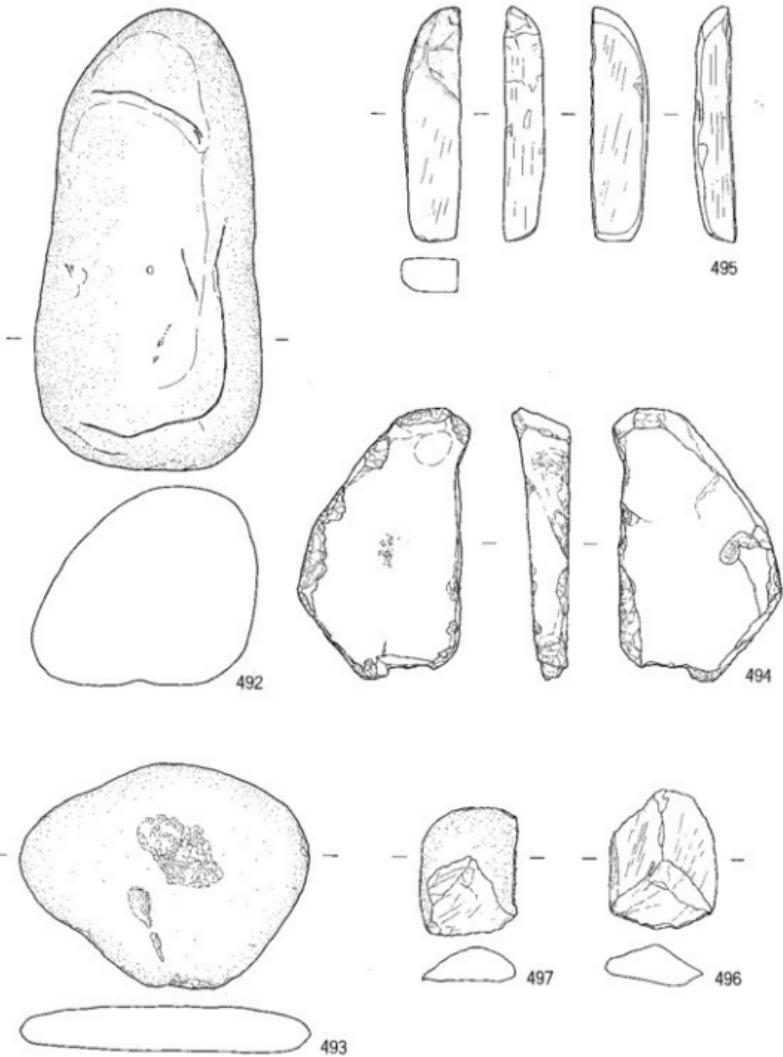
第63図 ガラス製勾玉、管玉、敲石実測図



第64図 鑿石実測図



第65図 敷石, 叩台実測図



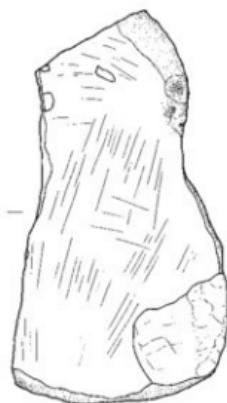
第66図 叩台、砸石実測図

0

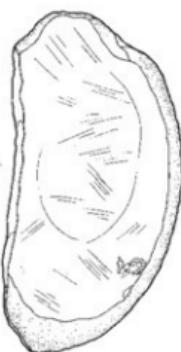
20cm

0

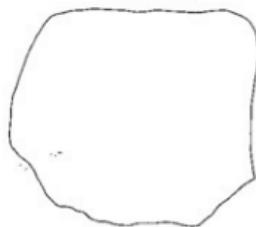
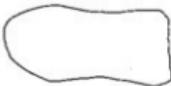
10cm



498



499



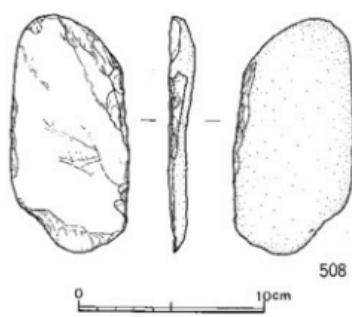
500



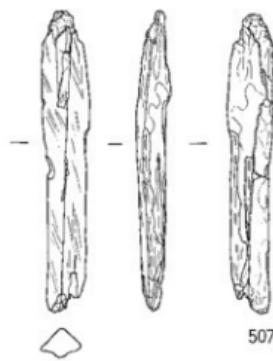
第67図 砥石実測図



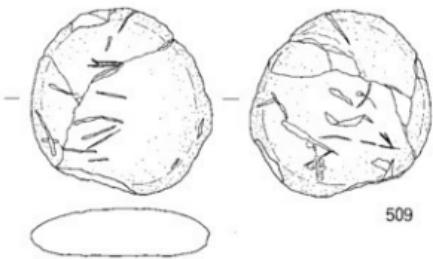
第68図 砧石、性格不明石器実測図



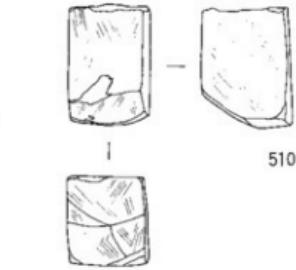
508



507



509



510

0 10cm

第69図 性格不明石器実測図

遺物観察表1

掲載番号	遺物番号	器種	法量 (cm) 器高 側厚 底径	形態・文様	手法	備考
1	S T 1	甕	(10.8) — —	平底の底部から立ち上がる。	わずかにヘラ削りが残るが、内外面とも不明。	—
2	*	高壺	(6.1) — 7.2	短い脚部から八の字状に開く。腹部、端部は丸くおさめる。	*	
3	S T 2	壺	14.6 (5.5) — —	やや外傾して立つ口縁部。腹部は半円をなし、上方を向き凹線が施される。外側にも凹絞が入る。	外面とも消耗のため不明。	
4	*	甕	(6.6) — 9.4	平底の底部から直線的に立ち上がる。	内曲指ナデ。	
5	*	壺	(5.0) — 8.4	平底の底部から立ち上がる。	内面にわずかに指頭圧痕が残る。	
6	*	＊	(6.5) — 7.0	わずかにあげ底の底部。	内外面とも不明。	
7	S T 3	壺	14.4 (16.9) — —	ほぼ直立する長い頸部から、外反ぎみに聞く口縁部。口縁端部は、平面をなし、上方を向き凹線が施される。頸部と胴部は1条の沈継で分けられる。	内面には折頭圧痕が残る。	
8	*	甕	19.6 (4.8) — —	直立する頸部から大きく聞く口縁。	口縁部外側に折頭圧痕が残る。	
9	*	壺	22.6 (7.7) — —	ほぼ直立する頸部から、大きく外反する口縁。口縁端部は下に拡張され、外傾して面をなす。中央部には横ナデによる沈継が、1条ある。	頸部外面にハケ目調査。口縁内外面とも横ナデ。	
10	*	＊	9.0 13.5 11.2 5.0 — — 8.0	強く外反する口縁。腹部は丸くおさめる。最大径は上腹部にくる。底部は平底。	手づくね。頸部にはしづり台が残る。	
11	*	甕	(5.5) — — — — — —	あげ底気味の底部から直線的にたち上がる。体部よりはり出した底部。	内外面とも不明。	
12	S T 4	壺	17.4 (8.1) — —	わずかに外反する頸部から大きく外反する口縁。口縁端部は面をなす。	口縁端部横ナデ、貼付口縁。口縁部外面とも横ナデ。	
13	*	＊	12.6 (5.1) — —	強く直立する頸部から、倒め上に聞く聞く口縁部。口縁端部は上下に拡張され、3条の凹継を施す。	口縫跡、内外面横ナデ。	
14	*	甕	17.4 (8.0) — —	ぐの字状に強く屈曲する口縁。口縁端部は、上に拡張され、2条の凹継を施す。	*	
15	*	瓶	(3.5) — 9.8 — —	平底の底部から立ち上がる。	外面ハケ調査、内面横ナデ。	
16	*	*	(3.0) — 5.0 — —	高台状の底部を、指頭による押圧で作り出す。	外面指頭圧痕。	
17	*	*	(2.8) — 8.2 — —	平底の底部から外反気味に立ち上がる。	内外面ともわずかに指頭圧痕が残る。	内面裏付着。
18	*	*	11.8 (8.1) — —	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は面をなし内傾する。最大径は胴部中央部に位置する。	貼付口縁、内面ヘラ削り。	

遺物観察表 2

持回番号	遺構番号	器種	口径 器高 側厚 底厚 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
19	S T 4	大型 高环	25.6 (3.7) — —	直線的に内傾する口縁。端部は平面をなし。口縁部に垂直に膨張される。外面には沈縫が進る。	内外面とも不明。	
20	*	*	33.0 (6.2) — —	口縁部は、わずかに内傾し、端部は平面をなし。口縁部に垂直に膨張される。外面には鷹先を中心にもたらされた波状文を施す。その上部に沈縫による割目。口縁端部には、鷹先をコンパス状に使用した範囲が施される。	*	
21	S T 5	壺	12.8 (4.9) — —	ゆるやかに外反する頭部から僅く外に向く口縁。端部は直角な面をなし。わずかに膨張される。		
22	S T 6	壺	15.9 21.5 21.8 7.9	外反して廣く口縁部。口縁端部は鷹首文が施される。頭部には上下二列の列点が施される。最大径は上頭部に位置する。	外面にハケ目が残る。	
23	*	*	12.5 (6.5) — —	わずかに外反気味にのげる口縁部。口縁端部は、外傾する面をなし竹管文が施される。	内面にわずかに指ナデが残る。	
24	*	*	— (6.3) (13.5) —	頭部中央に最大径が位置し、算盤玉状の形を呈する。頭部中央外側には、円形浮文に刺突を施した浮文が貼り付され、鷹首沈縫が進る。	内面に指頭圧痕が残る。	
25	*	*	— (31.4) (29.8) 9.0	長いややあげ底気味の平底の底盤から立ち上がる。最大径は中頭部に位置する。	外側タテ方向のハケ溝。内裏指ナデ。	
26	*	高环	— (6.0) — 11.1	ハの字状に内凹する縁部。端部は膨張され、2条の凹線文が施される。	内外面とも不明。	
27	*	壺	— (8.5) — 13.0	外反りのつまみ部から、外反しながら下に向かって開く。端部は丸くおさめる。	外側ヘラ磨き。内面削痕圧痕が残る。	
28	S K 1	壺	— (7.3) —	上頭部に最大径を有する。頭部には3条一組の横筋き沈縫の2組並りその下には、ヘラ先による刺突が施される。	内外面とも不明。	
29	*	*	17.4 (4.2) — —	直立する頭部から大きく外反する。口縁は、わずかに下にたれる。端部面をなし、下部に割目。	内面に縦方向のハケ目。 外側不明。	
30	*	*	— (6.4) — 6.4	平底の底盤。	内外面とも不明。	
31	S K 2	*	23.6 (6.0) — —	頭部はゆるやかに外反し、口縁部で大きく外反する。高部は面をなし、1条の沈縫が入り、下部に割目を施す。	内外面とも不明。貼付口縁。	
32	*	*	17.6 (4.8) — —	口縁は大きく外反し、端部は面をなす。横ナデにより中央部に沈縫状のものが入る。端部下には割目を施す。	外側口縁端部に横ナデ。 内面ヘラ削り後沿ナデ。 貼付口縁。	
33	*	*	24.0 (3.8) — —	口縁は直立する。頭部より大きく外へ開く。端部下には割目を施す。	内面にわずかに指頭圧痕が残るが他は不明。	
34	*	*	22.0 (7.5) — —	直立する頭部から大きく外反する口縁。端部は面をなし、割目を施す。	外側横方向のヘラヶズリ、内面不明。貼付口縁。	
35	*	*	24.4 (12.8) — —	口縁部は直立する頭部より、なめらかに外反し、端部を下に強張し、3条の凹線文を施す。端部には沈縫が進る。	内外面とも磨耗のため不明。	

遺物観察表 3

検査番号	遺物番号	器種	法量 (ca)	口縁 器高 側縁 底径	形態・文様	手法	備考
36	SK 2	壺	28.5 — —	28.5 (4.5) —	口縁部で大きく外反する。端部は上下に大きく拡張し、3点の凹線を施す。	内外面ともに不明。	—
37	+	+	22.4 (14.3) —	—	ゆるやかに外反する口縁、口縁端部は横ナデにより面をなし、ゆるやかに下に拡張し、端部は上下に拡張。2条の縦凹線を施す。頸部には羽状文。	外面、口縁端部下横ナデ、内外面とも不明。	
38	+	+	23.0 (10.0) —	—	わざかに外反する口縁、口縁端部は横ナデにより面をなし、わざかに下に拡張。	外面は、點打部分を消すように指打が残る。内面は折頭圧痕が残るものの削耗が著しい。台付口縁。	
39	+	壺	15.0 (4.0) —	—	強く縮曲し、くの字状をなす口縁部、端部は上下に拡張し、2条の凹線を施す。	内外面ともに横ナデ。	
40	+	壺	17.0 (6.9) —	—	ゆるやかに外反する口縁、口縁端部は内側する面をなす。	内外面は削頭圧痕が残るもの他のは磨耗により不明。	
41	+	+	— (22.3) — 9.4	—	手洗の底部から直線的に立ち上がる。	内面底部より下脚部に指頭圧痕が多くみられる。(爪の痕あり)。外側は不明。	
42	+	台付壺	— (22.0) —	—	筒状の脚を持ち、脚部部広がる、脚部表面には沈線を施す。	底部近くに指頭圧痕が残る。外側は(ヘラ状)のものでナデ。底部は内盤充填法による。	
43	+	壺	— (6.7) 4.5	—	平底の底部、やや内湾気味に直線的に立ち上がる。	内面底部にわざかに指頭圧痕が残るが他のは外側とも不明。	
44	+	+	— (19.3) — 6.8	—	平底の底部より直線的に立ち上がり、最大径が上肩部に位置。	内面底部に指頭圧痕。肩部中位に指ナデ。	
45	+	壺	— (3.5) 5.5	—	あげ足氣味の底部。	外面縁の広いハケ目が残る。内面底部指頭圧。	
46	+	壺	— (6.0) — 8.4	—	平底の底部より立ち上がる。	内面指ナデ。	
47	+	台付壺	— (5.4) — 10.2	—	短く八の字状に開く脚、脚部は拡張される。脚部には刺突文が施される。	底部は内盤充填法による。他のは内外面とも不明。	
48	+	高壺	— (15.7) — 12.2	—	長い脚を持ち、高脚部で八の字状に開く。脚部は拡張し、内側する面をなす。1条の凹線を施す。	内面は杯頭近くで、しばらる。外側不明。	
49	+	台付鉢	— (10.3) — 11.4	—	ハの字状に開く脚部。脚部は、肥厚する。	杯部の底は内盤充填。内面ヘラ削り。	
50	+	器台	— (23.4) (2.9) —	—	平底な上面を持ち、端部はわざかに上方に向う。	上面は丁寧にヘラミガキされる。他のは不明。	
51	+	壺	— (26.2) (15.1) —	—	短く外反する口縁。最大径は脚部上位に位置する。不規形でいびつな形。	外面U線部側面ナデ、口縁下棒(ヘラ)状工具で押仕、ヘラ削り。内面脚部下まで、ヘラ削り、指ナデ。	土師器
52	SK 3	壺	— 28.2 (38.0) 40.8 —	—	直立する頸部から大きく外反する口縁。口縁部は上下に拡張され4条の凹線を施し、2つ1組の棒状浮文。刻目を施文する。(回線を入れる前に浮文、刻目) 頸部には、輪輪波状文が、周面二角形の突部を挟んで施文される。輪輪波状文は口縁内面にも施される。最大径は脚部上位に位置する。	外面ハケ削り。内面磨耗のため小網。	

遺物観察表 4

検査番号	遺物番号	器種	法量 cm 器高 側径 底厚	形態・文様	手法	備考
53	S K 3	壺	19.6 (5.7) —	直立する頸部から幅く外反する口縁部。口縁端部は内傾し、面をなす。	口縁部ヨコナデ。貼付口縁。外面磨耗のため不明。	
54	*	*	13.6 (4.8) —	ほぼ直立する頸部から、外側へ開く口縁部。口縁端部は内傾する凹面をなす。	内外面とも不明。貼付口縁。	
55	*	*	21.0 (20.0) —	直立する頸部から大きく述べる口縁部に後端部は3条の凹線、ヒラ状原体による網目。頸部外端下部にはヒラ状原体押圧、1条の沈線が入る。内面に1条の凹線。	内面指頭圧痕が残る。	
56	*	壺	28.0 (13.5) —	なめらかに外反する口縁部。口縁端部は、内傾して面をなす。	口縁外面には指頭圧痕が残る。下部は横方向の指ナデ調整。内面指頭圧痕が残る。	
57	S K 4	壺	9.8 (4.2) —	わずかに外反してのびる頸部から、ほぼ直立する口縁部。口縁端部は面をなす。口縁外面は凹線が施される。	口縁外面には指頭圧痕が残る。内面とも不明。	一重口縁状
58	*	*	(3.0) — 5.0	ややあげ底に底部から、ゆるやかに立ち上がる。	わずかに指頭圧痕が残る。	
59	S D 1	*	18.0 (2.4) —	大きく述べて口縁部。口縁端部はわずかに上に膨張気味で内傾した面をなす。下部には棒状堅体による刻目を施す。	口縁端部は内面面とも横ナデ調整。外面に指頭圧痕が残る。	
60	*	*	18.8 (5.3) —	大きく述べる口縁部。口縁端部は内傾して面をなす。外側には刻目を施す。	内面横ナデ。内外面指頭圧痕が残る。	
61	S D 5	*	(7.5) — 6.6	半底の底部から直線的に立ち上がる。	内外面とも指ナデ。	
62	S D 6	*	21.2 (10.0) —	わずかに外反ぎみの頸部から大きく外反する口縁部。口縁端部は下に膨張され、凹線浮文が施され、円形浮文に指突したもののが貼り付けられる。	内外面とも不明。	
63	*	*	15.8 (6.4) —	直立する頸部から大きく外反する口縁部、口縁端部は下に膨張され4条の凹線、3条1筋の円形浮文に指突したもののが貼付。頸部には直線三角形の耐土帯を貼付する。口縫内面には、クシ抜き浮文を施した後に直線的に刻目が入る。	外面ハケ調整。	
64	*	*	16.5 (7.2) —	ほぼ直立する頸部から大きく述べる口縁部、口縁端部は下にわざかに膨張気味で、内傾し凹面に、3つ1組のヒラ先による仕紋が施される。	口縁部内外面とも横ナデ。	
65	*	甕	28.8 (6.0) —	直立する頸部から大きく外反する口縁部、口縁端部は外傾して凹面状を呈する。	貼付口縁。内外面とも不明。	
66	*	壺	20.0 (4.5) —	外反ぎみの頸部から、斜め上へ開く口縁部。口縁端部は内傾し面をなす。	外面タテ方向のハケ。貼付口縁。	
67	*	*	17.5 (7.0) —	大きく述べる口縁部、口縁端部は直線面をなし、刻目を施す。	口縁部内外面横ナデ。	
68	*	*	18.0 (8.8) —	ほぼ直立する頸部から、なめらかに外反する。口縁部、口縁端部は内面横ナデによりやや膨張し、面をなす。	内面ハケ調整。	
69	*	*	17.0 (8.1) —	なめらかに開く口縁部端部は内傾し、面をなす。刻目が施され、頸部には波状文が施される。	内面指頭圧痕。	

遺物観察表 5

博物番号	造形番号	器種	口縁 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
70	S D 6	壺	9.0 (9.5) — —	わずかに外反してのびる頸部、口縁部はわずかに開く。嘴部は内傾し、面をなす。	内面頸部下より指ナデ。	—
71	*	壺	19.8 (5.5) — —	なめらかに外反する頸部から外へ開く口縁部、口縁端部は面をなす。	内外面ハケ調査。貼付口縁。	—
72	*	*	18.4 (10.2) — —	なめらかに外反する頸部から大きく開く口縁部、口縁端部は面をなす。胴部中包に最大径を有する。	内面指頭圧痕。	—
73	*	*	16.4 (11.5) — —	なめらかに外反する口縁部、口縁端部は面をなす。最大径は胴部中央に位置する。	内面指頭圧痕、貼付口縁。	—
74	*	*	14.4 (15.5) 15.0 — —	頸部は極く、大きく開く口縁部、口縁端部は面をなす。最大径は胴部中央に位置する。	口縁部内外面とも横ナデ。内面落頭圧痕。	—
75	*	*	14.6 (6.6) — —	なめらかに外反する頸部から、わずかに開く口縁部、口縁端部は面をなす。	内面折頭圧痕。貼付口縫。	—
76	*	*	27.4 (10.9) — —	くの字状に強く屈曲する口縁端部は下にわずかに延びられ。面をなす。	内外面とも不明。	—
77	*	*	19.4 (26.9) 23.2 — —	短く外へ開く口縁部。口縁端部は内傾し、面をなす。	外面部強い横ナデ、ヘラ磨き。内面向て部ヘラ削り。	—
78	*	*	20.8 (9.9) — —	短く外へ開く口縁部。口縁端部は内傾し、面をなす。	外面部ナデ、ハケ調査。内面指頭圧痕。	—
79	*	*	15.6 (15.9) — — —	短く直線的に外へ開く口縁部。口縁端部は内傾し、面をなし巴線が施される。最大径は胴部中央に位置する。	内面下駆形指頭圧痕、下側部ヘラ削り。	—
80	*	*	14.8 (5.9) — —	無く直線的に外へ開く口縁部。口縁端部は内傾して2条の凹溝が施される。	内面横ナデ。	—
81	*	壺	— (33.2) 25.5 8.0 — —	重い平底の底部から立ち上がり、中胴部に最大径を持つ。	内面に強い齊ナデ。	—
82	*	*	(6.9) — 7.5 — —	平底の底部から直線的に立ち上がる。	内面指ナデ。	—
83	*	*	(6.6) — 6.2 — —	平底の底部から立ち上がる。	外面部指頭圧痕でわずかに残る。内面不明。	—
84	*	*	(7.0) — 8.0 — —	平底の底部から直線的に立ち上がる。	内面指ナデ。	—
85	*	*	(7.5) — 8.8 — —	平底の底部。	磨耗のため内外面不明。	—
86	*	*	(14.6) 14.0 6.4 — —	平底の底部から立ち上がり。最大径は胴部中央に位置する。	内面指頭圧痕が残る。	—
87	*	*	(14.4) — 7.0 — —	平底の底部から立ち上がり。最大径は胴部中央に位置する。	外面わずかにヘラ磨き。内面指頭圧痕。	—

遺物観察表 6

博回番号	道耕番号	器種	法量 器高 側厚 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
88	S D 6	甌	(4.2) — 9.6	平底の底部。	外面ヘラ削き。	
89	*	*	(15.0) 14.5 5.9	あげ甌の底部から立ち上がり、上肩部に最大径を有す。	外面ヘラ削り。内面指頭押圧。	
90	*	*	(9.5) — 7.4	平底の底部。	外面下部棒状の茎体で押圧。内面指頭押圧。指ナデ。	
91	*	*	(7.8) — 10.0	平底で不整形な底部。	外面下部棒状の茎体で押圧。内面指頭押圧。指ナデ。	
92	*	*	(4.4) —	微隆起部の間にヘラ先による列点文、弱槌沈線が施る。	内外面とも不明。	
93	*	高环	(5.4) — 22.0	八の字状に廣く幅部。端部は捻壓される。外面には長い・棒体により矢羽状の文様を併せて沈線が施る。	*	
94	*	*	(7.2) — 11.0	八の字状に廣く幅部。端部は捻壓される。無文。	内外面とも不明。	
95	*	器台	(4.0) —	—	—	
96	S D 7	甌	(9.0) — 7.2	平底の底部。	外面叩日の後、ハケ調整。外側黒斑点あり。内面指ナデ。	
97	*	土錠	全長 4.8cm 全幅 1.7cm 重量 12.9g	筋跡形を呈す。		
98	S D 8	高环	(8.7) —	八の字状に廣く幅部。	円筒充填。内面指頭圧痕、しまり目。	
99	S D 10	甌	15.8 (14.7) —	なめらかに外反する頸部から、わずかに開く口縁部端部は内側し面をなす。下端は斜目が施され、腹部と肩部に2条のヘラ横き沈線によって分けられ、沈線の上に2個の円形浮文を貼り付、その下に弱点文が入る。	外側、口縁部横ナデ。横方向のハケ調整。内周横方向のハケ調整。指頭圧痕。	
100	S D 13	鉢	17.6 (5.4) —	深く外へ開く口縁部、口縁部内側する凹窓をなす。	わずかに指頭圧痕が残る。	
101	*	盃	17.0 (2.8) —	直立する頸部から外反して開く口縁部。口縁部から外傾する面をなし3条の凹窓が入る。	内外面とも口縫跡記痕ナデ。	
102	*	*	14.2 (3.7) —	八の字状に廣くし斜め上に開く口縁部。口縁部は強い横ナデにより凹面状をなす。	外側にわずかにハケ目、指頭圧痕、指ナデ。内面口縫端部横ナデ。	
103	S D 15	*	15.0 (6.3) —	わずかに外傾して開く口縁部、口縁部は上方を向き凹面をなす。外側に幅の広い凹窓文が施される。	内面横ナデ。	
104	S D 16	*	13.8 (11.4) —	外反してわずかに開く口縁部、口縁部は内側する面をなす。	内外面とも指頭圧痕が残る。	
105	*	*	18.8 (8.0) —	頸部からわずかに外反する口縁部、口縁部は外傾し、下に扒張され凹窓が施される。口縁部は強いナデによりわずかに凹窓状をなす。	内外面口縫部横ナデ。貼付口縫。	

遺物観察表 7

検査番号	遺構番号	器種	法量 器高 (cm) 頭頂 底辺	形態・文様	手法	備考
106	S D16	土師器 塊	15.6 5.0 — 6.0	内湾して立ち上がる体部から口縁部は、わずかに外反する。口縁端部は丸くおさめる。縁高を貼り付ける。	外側ロクロ調整。底辺糸切り。	土師器。
107	P 20	瓦質 々	16.4 (4.6) —	体部は内湾して立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	内面回転ナデ。	瓦質土器。
108	P 25	土師質 小环	6.7 2.0 — 4.2	円錐状の瓶頸から直線的に立ち上がる。口部形は丸くおさめる。	ロクロ、底糸切り。	土師器。
109	S X 1	壺	19.8 48.1 30.4 7.5	直立する頭部から大きく聞く口縁。口縁端部は上に拡張され、3条の凹線を施し割目が入る。肩部には列点文が施される。肩部は卵形を呈し、最大径は上肩部に位置する。底辺は平底。	外面ハケ調整。頭部下はヘラ伝版。肩部下部はヘラ磨き。内面口絆部ハケ調整。ヘラ削り。	
110	+	+	19.2 59.0 30.8 11.8	直立する頭部から大きく外反する口縁部。口縁端部は上に拡張され、ほぼ垂直な面をなし、2条の凹線が施される。并大径は瓶頸中央に位置する。	外側頭部ハケ調整。頭部ヘラ磨き。内面ヘラ削り。	
111	+	+	18.5 (9.5) —	直立する頭部から大きく外反する口縁。口縁端部は上に下延張され2条の凹線が施される。	磨耗のため内外面とも不明。	
112	+	+	20.2 (3.9) —	ほぼ直立する頭部から大きく外反する口縁部。口縁端部は面をなし。下端に割目を施す。	外面にわずかに横ナデが残るが磨耗が著しくその他不明。	
113	+	+	15.6 (6.5) —	直立する頭部から大きく外反する口縁。口縁端部は面をなし。	磨耗のため内外面とも不明。	貼付口縁をなで消す。
114	+	+	19.8 (31.7) 26.0 —	直立する頭部から大きく聞く口縁。口縁端部は下に拡張され、2条の凹線を施す。頭部には喉の広い凹線が施され頭部下にヘラ伝版文があり。傳版文跡を貼り付ける。	外側ハケ調整。内面接頭底版。ヘラ削りがわずかに残る。	
115	+	+	19.6 (21.5) —	直立する頭部から大きく聞く口縁。口縁端部は上に下延張し、3条の凹線を施す。頭部外面上にはハケ底原体を押し施す。(ハケ調整後施文)	外側ハケ調整。横ナデ。	
116	+	+	9.0 19.0 16.5 8.0	直立する頭部からならめらかに外反する口縁部。口縁端部は上に拡張し、2条の凹線を施す。頭部外面上、頭部外側ヘラ伝版文。最大径は頭部中央に位置する。	外側上肩部はハケ調整。頭部中央横力向。下肩部は縦方向のヘラ磨きを施す。内面ヘラ磨き。	
117	+	+	24.0 (12.1) —	直立する頭部からならめらかに外反する口縁部。口縁端部は上に拡張され、3条の凹線を施す。頭部下には2条のヘラ伝版文を施す。	外側縦方向のハケ調整。内面縦方向のハケ調整。	
118	+	+	16.0 (3.3) —	直立する頭部から大きく外反する口縁部。口縁端部は上に拡張され、2条の凹線を施す。	内外面とも不明。	
119	+	+	19.2 (7.9) —	直立する頭部から大きく聞く口縁。口縁端部は上に拡張され、3条の凹線が施される。	+	
120	+	+	16.8 (8.1) —	直立する頭部から外反する口縁部。口縁端部は上に拡張され、3条の凹線を施す。	口縁端横ナデ調整。	
121	+	+	14.7 39.1 24.6 7.8	直立する頭部から外反する口縁部。口縁端部は外側し凹面をなす。頭部は卵形を呈し、底辺は平底。	外側ハケ調整。内面指ナデ。貼付口縁。	
122	+	+	18.2 (5.7) —	直立する頭部から大きく聞く口縁。口縁端部は面をなし、下端に割目を施す。	外側ハケ調整。	
123	+	+	19.8 (10.1) —	直立する頭部から大きく聞く口縁。口縁端部は面をなし、下端には割目を施す。頭部下に3条の傳版文跡文が入り、その下に列点文を施す。	内外面不明。貼付口縁。	

遺物観察表 8

博団番号	遺構番号	器種	口径 法量 (cm) 基底 底径	形態・文様	手法	備考
124	S X I	壺	24.0 (9.2) — —	直立する頭部から大きく外反する口縁部、口縁端部は面をなし、下端に刻目を施す。頭部には不規則に列状文を配し、頭部下には瓶底起によって裏側された瘤状文が施される。	内面横方向のハケ調整。 外側ハケ調整。	
125	*	*	19.4 (4.6) — —	直立する短い頭部から外反する口縁部、口縁端部は拡張され、3条の凹痕が施される。	内外面とも不明。	
126	*	*	15.4 (4.2) — —	短く直立する頭部から、直線的に聞く口縁。口縁端部は下に拡張される。	*	
127	*	*	15.0 (4.0) — —	短く外反する口縁部、口縁端部は内傾し、上下に拡張され2条の凹線を施す。	*	
128	*	*	22.0 (2.8) — —	大きく聞く口縁部、口縁端部は下に拡張され、ヘラを押正し刻目を施す。	内面横方向のハケ調整。 外側横方向のハケ調整。 貼付口縁。	
129	*	*	21.0 (4.0) — —	直立する頭部から大きく外反する口縁部、口縁端部は面をなし、下端には刻目を施す。	外側頭部に横方向のハケ調整。 内面横ハケ調整。 貼付口縁。	
130	*	*	27.0 (10.2) — —	大きく外反する口縁、口縁端部は内傾した面をなす。	悪純が著しく内外面とも不明。 貼付口縁。	
131	*	*	19.4 (6.0) — —	外反する口縁部端部は内傾し中央が凹む下端には刻目を施す。瓶底には6条の凹線を施す。	外側口縁、頭部横ナデ、 垂直沈線。その他不明。 貼付口縁。	
132	*	*	27.8 (10.8) — —	大きく外反する口縁部、口縁端部は面をなし、一条の凹線が施され、下端には刻目が入る。頭部下には列状文が施される。	口縁部横ナデ。その他善純のため不明。	
133	*	*	27.2 (10.4) — —	ほぼ直立する頭部から内めらかに外反する口縁部、口縁端部は上部が内傾し、下部が外傾し凹面をなす。	外側口縁部下ナデ、頭部 ハケ調整。内面横方向の ハケ調整。貼付口縁。	
134	*	*	20.8 (5.9) — —	なめらかに外反する口縁部、口縁端部は面をなし、わずかに下に拡張される。	内外面とも不明。貼付口縁。	
135	*	*	20.5 (6.0) — —	なめらかに外反する口縁、口縁端部は面をなす。	内外面とも不明。貼付口縁。	
136	*	*	18.4 (6.5) — —	ゆるやかに外反する頭部、口縁端部は下に拡張され、凹印状をなす。	内外面とも不明。	
137	*	*	18.8 (6.0) — —	外傾して直立する口縁部端部は下に拡張され、内傾して面をなす。	*	
138	*	*	15.0 (4.5) — —	ゆるやかに外反する長い頭部、口縁は外反し、端部は外傾する面をなす。	*	
139	*	*	20.0 (4.2) — —	直立する頭部から大きく外反する口縁部、口縁端部は面をなし、ヘラ状工具による刻目を施される。	外側ハケ調整。	
140	*	*	11.8 27.3 17.0 7.2 — —	ほぼ直立する頭部からなめらかに外反する口縁部、口縁端部は内傾し面をなす。最大径は頭部中央に位置す。	内外面とも不明。貼付口縁。	
141	*	*	17.6 (6.0) — —	直線的に外傾する頭部、口縁端部は面をなし、上方を向き横方向に拡張される。外側には縦の広い凹線が3条施される。	*	

遺物觀察表 9

博岡番号	遺構番号	形 様	口縁 器高 刷錆 底詮 (mm)	形 態・文 横	手 法	備 考
142	S X 1	壺	18.8 (15.8) —	直立した頭部からわずかに開く口縁部。口縁部は面をなし上方を向く。肩部には、幅の広い凹縫文が施される。肩部には、把手が付く。	内外面とも不明。貼付口縁。	—
143	+	+	14.8 (4.8) —	ほぼ直立する口縁部端部は内傾し面をなす。外側には 4 条の凹縫を施す。	内外面とも不明。	—
144	+	+	15.2 (7.5) —	直線的に外傾してのびる口縁部。口縁端部は面をなす。外側には幅が広く浅い凹縫文が施される。	+	—
145	+	+	17.6 (3.8) —	直線的に外傾してのびる口縁部。口縁端部は上方に向かって平面をなす。外側に 4 条の凹縫が施される。	+	—
146	+	+	14.6 (10.0) —	なめらかに外反してのびる頭部。口縁端部は外傾し、中央部が凹む。	口縁部内外面とも横ナナメ調整。	—
147	+	+	7.0 (6.1) —	わずかに外反しながらのびる頭部。外側には 4 条の凹縫を施す。	内外面とも横ナナメ調整。	—
148	+	+	7.4 (6.3) —	細くのびる頭部。口縁端部は平面をなし。上方を向く。口縁下にはヘラ状工具による直線的な列点文。円形浮文の下には微隆起部にはさまれた横縫直縫文、棒状浮文。	内外面とも不明。 浮支は粘土が違う。	—
149	+	+	23.0 (6.3) —	ゆるやかに外反してのびる頭部から直立する口縁部。口縁端部は面をなし上方を向く。	+	—
150	+	+	25.4 (4.2) —	外反してのびる頭部から、直立に立ち上がる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。	外面ハケ。内面指頭床直縫がわずかに残るが磨耗が著しく不明。	—
151	+	兎	16.2 (8.0) —	くの字状に屈曲する口縁部。口縁端部は上に拡張され面をなす。	外面口縁板ナナメ、脇部ハケ調整。内面指頭直縫。	—
152	+	+	23.6 (12.5) —	くの字状に屈曲した口縁部端部は上下に拡張し、3 条の凹縫が施される。	外面頭部横ナナメ調整。	—
153	+	+	16.0 (7.0) —	口縁は、くの字状に強く屈曲する。端部は上に拡張し、2 条の凹縫を施す。	内面口縁にわずかに横ナナメが残る。その他の内外面とも不明。	—
154	+	+	17.4 (7.5) —	くの字状に強く屈曲する口縁部。口縁端部は上に拡張し 2 条の凹縫を施す。	内外面とも磨耗が著しく不明。	—
155	+	+	15.0 (3.2) —	延べて開く口縁端部は内傾して面をなす。	内外面強い横ナナメ調整。	—
156	+	+	12.8 (2.5) —	くの字状に屈曲する口縁部。口縁端部はわずかに凹面をなす。	外面口縁板横ナナメ調整。	—
157	+	+	15.4 (3.6) —	くの字状に直角する口縁部。口縁端部は面をなす。	内外面とも不明。	—
158	+	壺	46.5 25.3 3.6 —	最大径は上頭部に位置する。卵形の頭部から直立する頭部。底部は平底。頭部外側にはヘラ状直縫文を施し、肩部に深い窓状による列点文。	外面上頭部ハケ調整。下頭部ヘラ始き。内面磨耗により不明。	—
159	+	+	5.6 13.8 14.6 5.4 —	半球の底盤から直線的に外方向きに立ち上がる。最大径が胴部中央部下にあり、頭部に向かって内傾する。上頭部に列点文を施す。	内面指頭ナナメ、頭部にしほり日が残る。外面不明。	—

遺物観察表10

件番号	遺物番号	器種	口径 法量 器高 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
160	S X I	壺	— (10.0) —	瓶頸中間に最大径が位置し、内彌しながら、瓶体でくびれ、瓶底部に金輪帯で列点文を施す。	内面に指頭压痕が残る。	
161	*	*	— (8.2) — 7.4	平底の底部から直線的に外上方に立ち上がる。	外面にわずかにヘラ磨きが残る。	
162	*	*	— (15.8) — 8.2	あげ底気味の底部から直線的に立ち上がる。	外面にわずかにヘラ磨きが残る。その他は不明。	
163	*	*	— (7.0) — 5.6	*	内面には指頭压痕が残る。	
164	*	*	— (13.8) — 9.6	平底の底盤。	外面にわずかにヘラ磨きが残る。	
165	*	*	— (12.5) — 6.2	平底の底盤からやや内湾気味に立ち上がる。	内面にわずかに指ナサ調整その他の不明。	
166	*	*	— (8.6) — 8.8	平底の底盤からわずかに内湾気味に立ち上がる。	内面にわずかに指頭压痕が残る。外面ヘラ磨き。	
167	*	*	— (12.4) — 7.0	平底の底盤から内湾気味に立ち上がる。	外面ハケ調整。内面小明。	
168	*	*	— (9.0) — 12.8	ややあげ底気味の底部から立ち上がる。	外面ヘラ磨き。	
169	*	*	— (10.2) — 12.2	あげ底気味の底部から直線的に立ち上がる。	内面指頭压痕。外面ハケ調整。	
170	*	*	— (2.8) — 4.6	平底の底盤。指頭押圧され、やや弱い段をなし、たち上がる。	外面底盤下部に指頭压痕。	
171	*	台付壺	— (2.8) — 6.6	短く内湾気味の脚がついた底盤。	脚台の内面はヘラ削り。外面指頭压痕が残る。	
172	*	*	— (1.6) — 7.8	八の字状に開いた短い脚台。	内外面とも小明。	
173	*	*	— (4.0) — 9.2	脚状を呈する底盤。	腐耗のため不明。	
174	*	壺	— (3.6) — 7.7	わずかにあげ底の底盤から直線的に立ち上がる。脚は張り出す。	内面ヘラ削り。	
175	*	*	— (21.6) — 9.0	平底の底盤。	外面ヘラ磨きが残る。	
176	*	*	— (5.0) — 7.4	あげ底の底盤から直線的に立ち上がる。	内外面とも消耗のため不明。	
177	*	*	— (14.9) — 7.0	あげ底気味の底盤で、脚が張り出す。	内面ヘラ削り、外面はハケ調整のあとヘラ磨き。	

遺物観察表11

標因番号	造構番号	器種	法算 (cm)	上部 基部 横径 底径	形態・文様	手 法	備考
178	S X 1	甌	(13.4) — 7.4	—	平底の底部から直線的に立ち上がる。	内外面とも不明。	—
179	—	—	(5.4) — 9.5	—	—	—	—
180	—	—	(11.8) — 6.4	—	平底の底部から直線的に立ち上がる。	内面指ナナ、ヘラ削り。	外面に黒斑 あり。
181	—	—	(7.3) — 7.0	—	ややあげ底気味の底部から直線的に立ち上がる。	内外面とも不明。	—
182	—	—	(11.0) — 8.0	—	—	内面滑潤仕事が残る。	—
183	—	盃	(9.6) — 7.6	—	平底の底部、くびれた底部から直線的に立ち上がる。	内外面とも唐絵のため不明。	—
184	—	高杯	14.8 12.0 — 8.8	—	杯より内側する口縁部端部は面をなし上方を向く。1条の沈線が入る。口縁外側には3条の凹線が施される。八の字状に開く脚部、脚部はヘラ削り。脚部外側には鋸刃底径による5条の凹線と脚部底径による5条の凹線が入る。	脚部内面はヘラ削り。外面はヘラ磨き、円盤充填法。	—
185	—	—	25.0 (3.5) —	—	杯底から口縁部は削面して外傾してのびる。口縁部は面をなす。	口縁ナナ調整。外面ハケ調整。	—
186	—	—	15.6 (3.8) —	—	直線的に開く脚部から直立する口縁部。口縁部は上方に向いた凹削をなし、外側には2条の凹線が入る。	口縁部には内外面ともわずかに横ナナ度が残る。	—
187	—	—	(3.0) — 6.0	—	八の字状に開く脚部、脚部はやや膨張され、2条の凹線を施す。脚部外側による凹削。	外面は金属性によって施文される。内面不明。	—
188	—	—	(6.2) — 12.0	—	八の字状に開く脚部、脚部は拡張され、内側する面は3条の凹線が入る。脚部外側には金属部による11条の沈線が施され、脚部下端から接觸路にかけて施文される。刻目が脚部に施される。	内面ヘラ削り。	—
189	—	—	(9.8) — 12.4	—	八の字状に開く脚部、脚部は拡張され、2条の凹線を施す。外側には脚部下端で5条と6条の沈線が施され、脚部中央に2つの凹削。脚部外側に円孔を穿つ。	—	—
190	—	—	(7.5) — 24.2	—	八の字状に開く脚部、脚部は拡張され、2条の凹線を施す。脚部外側3条の沈線、脚部内に3条の沈線が施される。	内外面不規則。	—
191	—	—	(4.6) — 15.0	—	八の字状に開く脚部、脚部は拡張され、2条の凹線が入る。脚部外側には6条の沈線。脚部内に3条の沈線が施される。	内面横方向のヘラ削り。	—
192	—	—	(8.0) — 11.2	—	八の字状に開く脚部、脚部は拡張され、凹線が施される。外側脚部は金属部による5条の凹線、脚部に刻目が施される。	—	—
193	—	—	(6.4) —	—	脚部は円盤充填法による。	内外面とも不明。	—
194	—	器台	(11.6) —	—	肉の厚い円筒状を呈す。形態的には、ふいごの羽口、地引き網の土鍬の可能性もある。	—	軸土には、1cm人の小鍬が入る。

遺物観察表12

博団番号	道構番号	器種	口徑 量 器高 (cm) 制径 底径	形態・文様	手法	備考
195	S X 1	鉢	16.0 (4.3) — —	内凸気味にのびる体部から屈曲する口縁。口縁端部は上下に拡張され、2条の凹縫が施される。	口縁部内外面ナデ調査。	
196	*	*	22.6 (8.8) — —	内凸気味にのびる体部から屈曲する口縁。口縁端部は面をなす。	内面指ナデ。外面口縁部横ナデ。体部にハケ調整。	
197	*	*	21.0 (10.2) — —	内溝して立ち上がる体部から短く外反する口縁。口縁端部は内側し凹面をなす。	内外面にわずかに衝突。裏が残る。その他は不明。	
198	*	*	18.8 (6.2) — —	体部からわずかに外反する底部。口縁部はほぼ水平に屈曲する。口縁端部は外傾して面をなす。	内外面とも不明。貼付口縁。	
199	*	*	22.6 18.1 17.2 7.9 — —	あげ底の底部から立ち上がり、最大径は口縁部、口縁部下に位置する。口縁は大きく外反し、端部は内傾し、凹縫を有する。	*	
200	*	器合	32.4 24.1 23.0 — —	筒状の胴部から大きく開く口縁部。口縁端部は拡張され、凹縫が施される。端部はなめらかに閉じる。外面全体に西番文が施される。	*	
201	*	高杯	14.6 (10.0) — —	茶碗形の环球。脚は短く縁は大きく広がる。	内部環底部指頭圧痕。外部脚部指頭圧痕。	土師器。
202	*	盞	13.3 (13.7) — —	直立気味に開く深い口縁。最大径は胴部中央に位置する。	外面にハケ目が残る。	器壁は薄く焼成良好。土師器。
203	表採	壺	20.0 (5.8) — —	ほぼ直立する頭部から大きく外反する口縁。端部下に刻目。	内外面とも不明。	
204	*	高杯	— (3.5) 6.8 — —	八の字状に開く後部、側縫部は拡張され、凹縫をなす。外縫脚部に2条と6条の凸縫が施す。不透鏡で金具聲によると見られる。	内面ヘラ削り。	
205	包含層	壺	16.8 (14.4) — — —	なめらかに外反する頭部から大きく開く口縁部。縁部はなめらか。口縁端部下にへら状原体による割目。底部下には側撓き直線文を施し列点文を施す。	内面指頭圧痕。指ナデ。	
206	*	*	14.0 (4.2) — — —	八の字状に開く口縁部。口縁端部からへらによる圧痕文。米粒状の粘土貼付が見られる。	内面口縁指ナデ。	
207	*	*	— (9.3) — — —	直立する頭部。底部外面上部は横ナデにより凸縫状になる。下部は貼付突起、突起間に金具器のヘラ先による列点文が施される。	内外面ヘラ磨き。	
208	*	*	(3.5) — — —	算盤玉状の頭部。最大径は胴部中央に位置する。	外表面ヘラ磨き。	
209	*	盞	16.6 (7.8) — — —	強く屈曲し列へ開く口縁部。口縁端部は上に拡張され、3条の凹縫を施す。	磨耗のため内外面不明。薄い器壁。	
210	*	*	16.6 (6.0) — — —	強く屈曲し外へ開く口縁部。口縁端部は上へ拡張され、ほぼ垂直に立ち、凹面を呈し、3条の凹縫を施される。	外側ハケ調整。口縁横ナデ。	堆付器。
211	*	壺	— (9.1) 10.8 5.2 — —	平底の底部から立ち上がり。最大径は胴部中央に位置する。	内面指ナデ。外表面ヘラ磨き。	
212	*	盞	— (3.4) — 5.8 — —	あげ底の底部から外反気味に立ち上がる。底部はわずかに張り出る。	内外面とも不明。	内面糊付器。

遺物觀察表13

辨別番号	造形番号	器種	法算 (cm)	L1縫 高さ 胸深 比例	形態・文様	手法	備考
213	包含縁	甕	— (13.4) — 7.4	半底の底部から直線的に立ち上がる。	外面荒い底体によるハケ調整。内面ヘラ削り。	—	—
214	*	高縁	— 19.4 (2.8) —	浅い杯部から外側してのびる口縫部。	L1縫部内外面横ナデ。	—	—
215	*	*	— (7.7) —	円筒状の脚、环縫は直線的に立ち上がる。外周には鋸い底体による多条の波線が走る。	内面ヘラ削り。円筒光環法。	—	—
216	*	*	— (5.7) — 9.2	八の字状に開く瓶部。瓶部は下方を向き面をなす。脚外面は墨文。	内面指痕押圧、絞り目、ヘラ削り、外面ヘラ焼き、縫部横ナデ。	—	—
217	*	*	— (11.0) — 12.2	筒状の脚から八の字状に開く瓶部。瓶部は丸くおさまる。横縫部上を指痕押圧によって四ませる。	内面指痕押圧、外面ハケ調整。秘部指痕押圧、横縫部横ナデ。	—	—
218	*	壺	— 18.8 (5.6) —	直立する瓶部から大きく外反して開く口縫部、口縫底部は内傾して面をなす。	内面口縫底部横ナデ、外面瓶縫方向のハケ調整。貼付口縫。	外面 瓶付 縫。	—
219	*	*	— 22.0 (11.5) —	屈曲して短く斜め上に開く口縫部。L1縫部は内傾して面をなす。	内面指痕押圧、外面ハケ調整。	—	—
220	*	*	— 23.8 (6.8) —	直立する口縫部。L1縫底部は上方を向き面をなす。外周に幅の広い凹面文を施す。	内外面とも不明。	体の可能性 もある。	—
221	*	甕	— 24.0 (2.8) —	八の字状に外反する口縫部。口縫底部は横ナデにより西面状をなす。	—	—	—
222	*	*	— 22.0 (2.5) —	八の字状に屈曲し斜め上に開く口縫部。口縫底部は外傾し面をなす。2条の凹面文が入る。	内面瓶縫方向のハケ調整。外周口縫部横ナデ。	—	—
223	II-A区 凹谷状地形	壺	— 14.0 (7.0) —	ほぼ直立する瓶部から大きく外反して開くL1縫部。口縫底部は外傾し2条の凹面文が施され、円形浮文に神安を施した序文が施す。瓶部外面ヘラ削りによる横筋状の文様が施される。	内外面とも横ナデ。	—	—
224	*	*	— 11.4 (6.0) —	直立する瓶部から大きく外反する口縫部。口縫底部は上位に扭曲されはば直立な面をなし、2条の凹面文が施される。瓶部には2個の内孔があり、瓶底が強化される。	内外面とも不明。	—	—
225	*	*	— 18.6 (7.1) —	ほぼ直立する瓶部から大きく外反して開く口縫部。L1縫底部はほぼ直立な面をなし、2条の凹面文が施される。瓶部外面にへきょうによる柱状がある。	L1縫部内外面とも横ナデ調整、内面横方向のハケ、外実頸部縫方向のハケ調整。	—	—
226	*	*	— 18.4 (9.0) —	外反気味の瓶部から大きく外反する口縫部。口縫底部は3条の凹面文が施され、円形浮文が貼つられた後に竹管を押す。瓶部外壁は輪の広い凹面文が施される。	L1縫部内外面横ナデ調整。	—	—
227	*	*	— 18.6 (5.6) —	直立した瓶部から、口縫部で大きく外反し、瓶部は上位に扭曲し、強直な面をなし凹面、円形浮文を施りて浮文間は波紋文でつなぐ。口縫内面に波紋文。	内面瓶縫方向のナデ、外周瓶縫ナデ。	—	—
228	*	*	— 15.8 (11.6) —	直立する瓶部から大きく屈曲する口縫部、瓶部は扭曲され、2条の凹面と割目が施される。瓶部下にわざかに凹面が残る。	内外面とも不明。	—	—
229	*	*	— 28.8 (6.7) —	大きく外反する口縫。	内面横ナデ。	—	—
230	*	*	— 31.7 (8.4) —	直立気味の瓶部から大きく外反する口縫部、口縫底部は外傾し凹面をなす。口縫外壁には、横ナデにより2条の隆起をつくる。	内外面ともハケ調整。	—	—

遺物観察表14

博団番号	遺構番号	器種	法量 口径 高 脚 底 径 (cm)	形態・文様	手法	備考
231	II-1-A区 旧谷底地形	壺	15.0 (4.0) — —	直立気味の頭部から大きく開く口縫。口縫端部は丸くおさめる。下端には刷目を施す。	内外面とも不明。貼付口縫。	
232	+	*	18.2 (7.2) — —	外反して開く口縫部。口縫端部は丸くおさめる。	内外面とも横ナデ調査。	
233	+	*	21.0 (3.6) — —	大きく外反して開く口縫部。口縫端部は上下に拡張され、垂直な刷目が入る。	内面横ナデ。	
234	+	*	22.4 (4.7) — —	大きく外反して開く口縫部。口縫端部は下に膨張され、外傾し横ナデによる2条の凹縫が入る。	内外面ハケ調整。貼付口縫。	
235	+	*	20.4 (5.5) — —	外反して開く口縫部。口縫端部は内傾して面をなし2条の凹縫。金属帯の先によると見られる割目が施される。	内面横方向のハケ調査。 外面横方向のハケ調査。	
236	+	*	16.6 (6.5) — —	直線的に開く頭部から短く外反する口縫。端部は下に内傾され外傾し凸面状をなす。	内面小明。外面ハケ調査。 貼付口縫。	
237	+	*	20.5 (39.3) — —	ほぼ直立のびる頭部から大きく外反し開く口縫部。口縫端部はほぼ直角な凹面をなす。頭部5条の突起點付。	外面にわずかにヘラ磨き痕が残る。貼付口縫はすり消される。	
238	+	*	23.6 (12.5) — —	外反してのびる頭部から列へ開く口縫部。口縫端部は下に拡張され3条の凹縫を施す。頭部下に横筋あり刷目を施す。	口縫部の外面横ナデ。頭部外面ハケ調査。	
239	+	*	19.6 (10.8) — —	直線的に開く口縫部。口縫は大きく開く。端部は下に内傾され内傾する面をなし、3条の凹縫が施される。頭部下には凹縫が施され頭部と脚部を分ける。	内面横方向のハケ調査。 外面横方向のハケ調査。	
240	+	*	18.6 (8.0) — —	外反してのびる頭部からわざわざに開く口縫。口縫端部は外傾し4条の凹縫が施される。	口縫部内外面とも横ナデ。外曲線方向のハケ調整。	
241	+	器台	27.0 (7.5) — —	大きく開く口縫部。端部は上下に拡張され唇状文が施される。口縫下部には棒状突起を有する。	内外面とも不明。貼付口縫。	
242	+	壺	21.2 (8.5) — —	外反して開く口縫部。端部は内傾して面をなす。	*	
243	+	*	20.0 (5.0) — —	わずかに外反して開く口縫部。端部は下に拡張され、内傾する面をなす。	内面横ナデ。	
244	+	*	17.8 (5.4) — —	わずかに外反して開く口縫部。端部は外傾し唇状文をなす。	内面横ナデ。外曲口縫端部横ナデ。端部下指無印記。ヘラ磨き。	
245	+	*	19.0 (14.5) — —	直立する頭部からなめらかに開く口縫部は上下に拡張され、内傾し3条の凹縫が施される。	外曲ハケ調査。	
246	+	*	21.6 (5.4) — —	外反して開く口縫部。口縫端部は面をなし外傾する。	外曲頭部脇方向ハケ調整。 外曲張付着。	
247	+	*	15.8 (3.2) — —	外反して開く口縫部。口縫端部は強い横ナデにより凹面状をなす。	頭部外面ヘラ磨き。貼付口縫。	
248	+	*	14.8 (7.5) — —	直立する頭部から開く外反し開く口縫。端部は内傾し面をなす。	内面横ナデ。外曲端形下押圧。頭部脇方向のハケ調整。貼付口縫。	

遺物観察表15

押岡番号	遺物番号	器種	法量 (cm)	口縁 器高 脚径 底径	形態・文様	手 法	備考
249	II-A区 (田谷状地形)	壺	15.8 (10.4) —	直立する頭部から外反して開く口縁。口縁端部は内傾し下端に削目を施す。頭部下には列点文が施される。	内面口縁端部横ナデ調整。指抵圧痕が残る。	—	
250	+	+	19.0 (3.0) —	外反して開く口縁部。端部は内傾し面をなす。	内面横方向ハケ調整。外面頭部縫方向のハケ調整。	—	
251	+	+	24.6 (5.9) —	直立する頭部から外反して開く口縁部。端部は内傾し面をなす。	内面横ハケ削除。外面ハケ調整。貼付1縫。	—	
252	+	+	17.8 (6.0) —	直立気味の頭部から外反して開く口縁部。端部は内傾し面をなす。頭部下には刺繍?が入る。	内面横方向のハケ調整。外面縫方向のハケ調整。貼付1縫。	—	
253	+	+	16.8 (7.0) —	外反する頭部からなめらかに外へ開く口縁部。口縁端部は内傾し面をなす。	内外面ともハケ調整。	—	
254	+	+	15.6 (6.0) —	ほぼ直立する頭部からやかに外反して開く口縁部。口縁端部は内傾する面をなし、わずかに下に削目する。	内面横方向のハケ調整。外縫方向のハケ調整。	—	
255	+	+	19.0 (7.1) —	ゆるやかに外反する口縁部。端部は外傾して面をなす。下端には削目が施される。頭部外側に削目が施され頭部と胴部を分ける。	外面頭部縫方向のハケ調整。	外面茎有り。	
256	+	+	20.0 (7.5) —	直立気味の頭部から外反して開く口縁部。口縁端部は内傾し面をなす。	内面横方向のハケ調整。指ナデ。外面頭部縫方向のハケ調整。	—	
257	+	+	18.2 (5.6) —	直立気味の頭部から外反して開く口縁部。口縁端部は内傾し面をなす。	内外面ハケ調整。貼付縫をハケであります。貼付1縫。	—	
258	+	+	26.6 (4.0) —	強く曲げて開く口縁部。口縁端部は内傾し面をなす。	内外面とも不明。貼付口縁。	—	
259	+	+	20.0 (4.1) —	外反して開く口縁部。端部は内傾する面をなし削目を施す。	内面横方向のハケ。頭部外縫方向のハケ調整。貼付1縫。	—	
260	+	+	20.0 (6.0) —	ほぼ直立する頭部から外反する口縁部。口縁端部は外傾する面をなし下部には削目が施される。	内面横方向のハケ調整。	外面茎有り。	
261	+	+	16.8 (4.0) —	強く外反して開く口縁部。口縁端部は内傾する面をなす。	口縁端部内外面とも横ナデがわずかに残る。外面口縁部指抵押圧。	—	
262	+	+	18.2 (5.6) —	外反して大きく開く口縁部。端部は面をなし、わずかに下にたれる。	内外面とも口縁部横ナデ。	—	
263	+	+	15.2 (7.2) —	強く外反する頭部から、やや斜め上に大きくなじく開く口縁部。端部は外傾し面をなす。端部下には削目が施される。頭部下から胴部にかけては、膨脹部、波状文、施織沈文が施される。	内面口縁部横方向のハケ調整。胴部横ナデ。外面横方向のハケ調整。	—	
264	+	+	19.0 (7.0) —	なめらかに外反する口縁部。口縁端部は内傾し面をなし。下端には削目が施す。頭部下には2条の沈痕があり、頭部と胴部を分ける。	内面横ナデハケ調整。	—	
265	+	+	16.2 (11.1) —	強く直立する頭部からなめらかに開く口縁部。端部は外傾して面をなす。口縁端部外側には2本の横擦起帶が残り、その上には刺繍文が施される。	内面指頭圧痕。外面ハケ調整。	—	
266	+	+	18.5 (6.7) —	直立気味の頭部から外反して開く口縁部。口縁端部は外傾して面をなす。口縁端部外側には2本の横擦起帶が残り、その上には刺繍文が施される。	内面磨耗のため不明。外面頭部縫方向のハケ調整。	—	

遺物観察表16

標本番号	遺物番号	器種	法量 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
267	II-A区 印谷状地形	壺	19.0 (14.5) — —	直立する頭部から大きく開く口縁部、縁部はわずかに内傾する面をなし、下部に刻目が施される。頭部下部は円形浮文に刺突を施しその下には4条の横筋起立で区画された中に、勝掛沈線が残る。その下にはヘラ先による圧重文が入る。	内外面とも不明。	
268	*	壺	20.0 (20.6) 22.3	なめらかに開く口縁部、口縁腹部は内傾し面をなし。最大径は上部断面に位置する。	内面とも不明。外面ハケ調整。貼付口縁。	
269	*	壺	18.2 (18.0) —	大きく外反する口縁部、縁部は内傾し面をなし、頭目が施される。頭部下には勝掛け文が入る。	内面指ナデ。貼付口縁。	
270	*	*	14.6 (7.5) —	ゆるやかに外反して開く口縁部、口縁腹部は内傾し面をなし。	*	
271	*	*	16.8 (23.1) 27.5	短く直立する頭部から斜め上に大きく開く口縁部、縁部は内傾し面をなし。1縫下部には刻目が施される。最大径は上部断面に位置する。	内面ヘラ削り。貼付口縁。	
272	*	*	15.0 (4.3) —	短くゆるやかに外反する口縁部、口縁腹部は内傾し、3条の凹線文が施され、その上にヘラ先による削痕が入る。	内外面とも不明。	
273	*	*	15.2 (6.3) —	ゆるやかに外反して開く口縁部、口縁腹部は内傾し面をなし2条の門縫が施される。	*	
274	*	*	21.8 (7.4) —	ゆるやかに外反する口縁部、縁部は内傾し、4条の凸筋が施される。	外面横ナデ調整。	
275	*	*	16.8 (11.3) —	短く外反し斜め上に開く口縁部、口縁腹部は外傾し、3条凹線文が施される。	口縁部内外面とも横ナデ。前面折崩圧痕が残る。外面側部横ナデ、窓い取方向のハケ調整。	
276	*	*	16.0 (8.6) —	短く外反し斜め上に開く口縁部、口縁腹部は下に拡張され、外傾する面をなし。3条の凹線文が施される。	口縁部内外面とも横ナデ。前面側部ハケ調整。	外面裏付層。
277	*	*	17.0 (8.5) —	短く外反し斜め上に開く口縁部、口縁腹部は内傾し2条の凹線文が施される。	内面ヘラ削り。横ナデ調整。外面横ナデ調整。	
278	*	*	10.4 (6.1) —	ほぼ直立する頭部から短く開く口縁部、口縁腹部は内傾し2条の凹線文の横ナデが入る。	内面指頭圧痕が残る。外面口縁部横ナデ。	
279	*	*	16.2 (4.6) —	短く斜め上に開く口縁部は縁部に向かって肥厚する。	内外面とも不明。	
280	*	*	23.0 (6.2) —	ゆるやかに外反して開く口縁部、縁部は横ナデによってトドにわずかに拡張される。	内外面口縁部横ナデ。	
281	*	*	14.8 (17.8) —	ほぼ直立し、わずかに開く直い口縁部、縁部は内傾し面をなし。	内面ヘラ削り。	全体に厚いつくり。
282	*	*	13.8 (12.0) —	直立してのびる頭部。わずかに開く口縁部、縁部は面をなし。上方を向き凹線文が3条施される。頭部外側には縦の広い4条の凹線文が施される。	内外面とも不明。	
283	*	*	18.0 (11.7) —	直立する頭部からわずかに直線的に開く口縁部、縁部は上方を向く面をなしわずかに凹面状を呈し、2個1組の円形浮文が貼りつけられる。口縁部外側には縦の広い4条の凹線文が施され、頭部には金帯模と見られる原体で直線文が施される。	*	

遺物観察表17

博物番号	遺物番号	器種	口径 器高 法量 (cm) 側径 底径	形態・文様	手法	備考
284	II-18区 田谷状地形	壺	15.2 (4.3)	直線的にのびる頭部から口縁、口縁端部は上方を向く面をなし2条の凹縦文が施される。口縁部外側には幅の広い凹縦文が施される。	内面横ナデ調整。	
285	*	*	20.6 (11.3)	直線的にのびる頭部から、わずかに聞く口縁部、端部は拡張され上方を向く面をなし、円形浮文が貼り付けられる。頭部外側には4条の凹縦文が施される。	内外面とも不明。	
286	*	*	15.4 (9.7)	ほぼ直線的にのびる頭部からわずかに外反して聞く口縁部、端部は下に拡張され1条の凹縦文が入る。	内外面とも磨耗のため不明。	
287	*	*	9.4 (5.4)	ほぼ直線的にのびる頭部からわずかに外反して聞く口縁部、口縁端部は上方を向く面をなす。外側には幅の広い凹縦文が施される。	内面横ナデ。	
288	*	*	19.8 (9.4)	直線的にのび、外傾して聞く口縁部、口縁端部は上方に向かうとおさめる。口縁外側には3条の幅の広い凹縦文が施される。	外画ナデ調整。	
289	*	*	18.2 (10.5)	直線的にのびわずかに聞く口縁、口縁端部は上方を向き平面をなす。口縁には4条の沈線が通る。	内外面ともハケ調整。	
290	*	*	13.2 (7.0)	外傾し直線的にのびる口縁部、端部は内傾し面をなし、棒状原体で割目が施される。	内外面とも不明。	
291	*	*	14.0 (7.5)	外傾し直線的にのびる口縁部、口縁端部は下方に拡張され、内傾する面をなす。	内面指ナデ。外画口縁端部横ナデ。範囲方向のハケ調整。	
292	*	*	15.4 (12.0)	外傾してのびる口縁部、口縁端部は面をなす。	内外面とも不明。	
293	*	*	7.3 (10.0)	直立してのびる頭部よりわずかに外反する口縁、端部はわずかに拡張され上方を向く平面をなす。口縁端部外側には凹縦文が施される。胴部中位に最大径。	内面にしほり日が残る。外画頭部部にナデがわずかに残る。	
294	*	*	6.4 (10.6)	わずかに外反してのびる頭部、口縁端部は上方を向く面をなす。口縁上部は5条の凹縦文が施され、下部にはラウエッジ。	内面しほり日、外画横方向のハケ調整。	
295	*	*	9.9 (12.0)	直立する頭部、「直口縁」、端部は拡張され、上方を向く面をなす。口縁部下に割目。	内外面とも不明。	
296	*	*	14.0 (8.2)	わずかに外反する頭部から、直立する肥厚した口縁部、口縁端部は上方を向く面をなす。	外画頭部ハケ調整。	
297	*	*	15.2 (4.3)	なめらかに外反して聞く口縁部、口縁端部は凹面をなす。口縁部外側には2条の圓腹凸帯が通り、棒状原体による割目が施される。	内外面とも不明。	
298	*	*	14.4 (5.0)	直立気味の頭部から外反して聞く口縁部。口縁端部は外傾し凹面をなす。口縁部は肥厚する。	内面横方向のハケ調整。内面指頭圧重、横ナデ調整。	
299	*	*	6.8 (3.9)	無底壺、真盤玉形に張った側底。内傾した上頭部に凹縦文を施す。口縁端部は上方を向く平面をなす。	内画には指頭圧重が残る。	無底壺
300	*	*	29.0 (4.4)	外反し大きく開く頭部、口縁部は直線的に立ち上がり、口縁端部は上方を向く面をなす。口縁部外側には斜格子状を施される。	内外面とも不明。	
301	*	甕	21.6 20.0 20.4 6.6	短く斜め上に聞く口縁、口縁端部は拡張され内傾し、4条の凹縦文が施される。最大径は胴部中央よりやや上に位置する。ややあげ底の底部。	内面ヘラ削り。外画ハケ調整。	

遺物観察表18

標本番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口縁 器高 側径 底径	形態・文様	手法	備考
302	II-A区 田谷状地形	壺	16.2 (37.2) 29.5	わざかに外反して、斜め上に開く口縁部。口縁部は下に拡張され面をなす。最大径は、胴部中央よりやや上に位置する。	内面には指痕圧痕が残る。		
303	+	+	17.2 32.3 24.5 7.2	ななめ上に開く短い口縁部。端部は内縮し、横ナデによって凹む上胴部に最大径をもつ。	内面は上部までヘラ削り。下胴部はヘラ削りが差しい。上胴部から頸部に指痕圧痕が残る。外面上胴部より中央へハケ書き。		
304	+	+	18.0 (7.6)	ぐの字状に強く屈曲し、水平気味に開く、口縁部は上下に拡張され外傾する面をなし、2条の凹線文が施される。	内面口縁部横ナデ調整。		
305	+	+	30.4 (6.8)	ぐの字状に強く屈曲し、斜め上に開く口縁部。口縁部は外傾し4条の凹線文が施される。	内面上胴部横方向のハケ調整。		
306	+	+	14.9 (7.2)	ぐの字状に強く屈曲し、やや斜め上に開く口縁部。口縁部は上に拡張され3条の凹線文が施される。	外面上口縁部横ナデ、胴部縱方向のハケ調整。		
307	+	+	18.0 (10.8)	ぐの字状に強く屈曲し、短くほぼ水平に開く口縁部。口縁部は上に拡張され、2条の凹線文が施される。最大径は肩部。	内面ヘラ削り。根頭圧痕が残る。外面上胴部ハケ調整。		
308	+	+	15.4 (7.4)	ぐの字状に強く屈曲し、斜め上に開く口縁部。口縁部は下に拡張され、外傾し2条の凹線文が施される。	内外面にわざかにハケ目が残る。	浮面集付着。	
309	+	+	15.6 (5.8)	ぐの字状に強く屈曲し、水平気味に開く口縁部。口縁部は上に拡張され、内傾する面をなし2条の凹線文が施される。	内面口縁部強い横ナデ調整。外面上口縁部横ナデ、胴部縱方向ハケ調整。		
310	+	+	17.9 (5.7)	ぐの字状に強く屈曲し、斜め上に開く口縁部。口縁部は下に拡張され、内傾し2条の凹線文が施される。	内面白口縁部横ナデ調整。		
311	+	+	14.6 (17.5)	ぐの字状に強く屈曲し、短く外傾へ開く口縁部。口縁部は上に拡張され2条の凹線文が施される。最大径は上胴部に位置する。	内外面とも不明。		
312	+	+	16.6 (21.7) 21.3	ぐの字状に屈曲し、斜め上に開く口縁部。口縁部は下に拡張され、外傾し2条の凹線文が施される。最大径は胴部中央よりやや上に位置する。	内面ヘラ削り。外面上胴部ハケ調整。		
313	+	+	16.3 29.2 20.5 6.2	ぐの字状に屈曲し、短く斜め上に開く口縁部。口縁部はわざかに拡張され内傾する面をなし、凹線文が施される。最大径は胴部中央よりやや上に位置する。	内面頭部下までヘラ削り。外面上胴部ハケ調整。		
314	+	+	15.1 28.8 23.9 8.4	短く斜め上に開く口縁部。口縁部は上に拡張され凹面をなす。最大径は胴部中央に位置する。	内面ヘラ削り。外面上胴部ハケ調整。		
315	+	+	16.0 (24.2) 19.0	ぐの字状に屈曲し、短く斜め上に伸びる口縁部。口縁部は上にわざかに拡張し、内傾する面をなし横ナデによって仕上げる。最大径は胴部上位に位置する。	内面頭部下までヘラ削り。外面上胴部ハケ調整。		
316	+	+	17.6 (5.8)	ぐの字状に屈曲し、斜め上に開く口縁部。口縁部ははは垂直な面をなす。	内面白口縁部横ナデ調整。外面上胴部ハケ調整。		
317	+	+	10.5 (8.7) 11.4	短く斜め上に開く口縁部。端部は丸くおさめる。最大径は胴部中央よりやや上に位置する。	廢耗のため内外面とも不明。		
318	+	+	11.4 (10.0) 11.8	短くゆるやかなくの字状を呈する口縁部。口縁部は面をなし、わざかに下に膨張し、下部に肩部が施される。胴部中央に最大径をもつ。	内外面とも口縁部横ナデ。外面上胴部ハケ調整。		

遺物観察表19

博岡番号	遺構番号	器種	11種 法量 (m) 縦横 直径 底径	形態・文様	手 汰	備考
319	II-A区 旧谷尻地形	甌	16.8 14.8 14.2 6.6	短く斜め上に開く口縫部、口縫部は内傾し直底をなす。最大径は口縫部下に位置し、内湾して平底の底部に到る。	内外面とも不明。	-
320	*	*	17.0 (8.5)	くの字状に強く屈曲し斜め上に開く口縫。口縫部は直底をなす。	外側縫方向のハケ調整。	
321	*	*	16.2 (9.3)	くの字状に強く屈曲し斜め上に開く口縫。口縫部は直底をなす。	内面指標圧痕が残る。外側縫方向のハケ調整。	
322	*	*	16.0 (7.2)	くの字状に強く屈曲し、斜め上に開く口縫部、縫部は円周状をなすかに下に拡張される。	外側縫ナデ。	外側縫付着。
323	*	甌	(7.6)	上側部には3条の微隆起帯が盛りその間に横縫沈痕が施される。上部には円形浮文に剥離した浮文が貼りつけられる。	内外面とも不明。	薄手式口縫
324	*	台付甌	(8.6) 15.4	算盤玉状の副部をもつ。台付甌と思われる。	内面ハケ調整	
325	*	*	(13.0) 21.0	台付甌、八の字状に強く屈曲、縫部は拡張され、内面ヘラ削り。円底充填2条の凹縫が施される。	内面ヘラ削り。	
326	*	甌	(8.0) 9.8	平底の底部から直線的に立ち上がる。	外側にハケ目が残る。	
327	*	*	(7.4) 6.8	*	内面ヘラ削り。外側ハケ調整。	
328	*	*	(7.8) 6.4	平底の底部から立ち上がり、張り出した副部、副部中央に最大径を有する。	内外にヘラ削り痕がわずかに残る。	
329	*	*	(8.0) 6.4	あげ底の底部から内湾気味に立ち上がる。	内外面とも不明。	
330	*	*	(5.0) 11.4	平底の底部から立ち上がる。	*	
331	*	*	(4.4) 4.0	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	*	
332	*	*	(3.6) 5.2	*	*	外側縫付着。
333	*	*	(4.5) 10.8	平底の底部から立ち上がる。	*	
334	*	*	(8.3) 9.3	平底の底部から直線的に立ち上がる。	内面にわずかに指痕压痕。	
335	*	*	(4.1) 8.6	*	外側ヘラ削き。	
336	*	*	(8.5) 9.2	*	内面ヘラ削り。外側ヘラ削き。	

遺物観察表20

検査番号	追跡番号	器種	法量 cm	口徑 基部 底径	形態・文様	手法	備考
337	II-A区 田谷状地形	壺	— (7.5) — 9.4	平底の底部からやや外反気味に立ち上がる。	内外面とも不明。		
338	*	*	— (6.7) — 8.5	平底の底脚。	内面底部近くに指頭圧痕。外面ナデ。	外面黒斑	
339	*	壺	— (10.5) — 7.4	あげ底の底部から直線的に立ち上がる。	内面ヘラ削り。		
340	*	*	— (4.0) — 5.2	平底の底脚から立ち上がる。	内面ヘラ削り。外面ヘラ磨き。		
341	*	*	— (4.9) — 5.4	平底の底脚。	内面わずかに指頭が残る。外面不明。		
342	*	*	— (3.7) — 6.6	あげ底気味の体部より張り出した底脚。	内外面とも不明。		
343	*	*	— (2.5) — 6.6	*	*		全体にうすい
344	*	*	— (3.5) — 7.3	平底の裏部から直線的に立ち上がる。体部より張り出した底脚。	*		
345	*	*	— (4.3) — 10.2	体部から張り出した平底の底脚。	*		
346	*	高环	25.6 (7.1) —	口縁はほぼ直立し、口縁端部は上方を向く面をなす。口縁品と体部の屈曲部は口縁部の外側へ張り出し棱をなす。口縁外側は凹面状を呈し、口縁端部下には浅い凹痕がある。	内面ハケがわずかに残る。外面ヘラ磨き。		
347	*	*	30.8 (5.6) —	環部より直立する口縁部。口縁端部は拡張され、上方を向く面をなし、2条の凹縞文が施される。口縁部と体部の屈曲部は、口縁部の外側へ張り出し棱をなす。口縁外側は凹面状を呈し、端部に浅い凹痕がある。	外面ハケ、ヘラ磨き。		
348	*	*	24.6 (2.3) —	水平口縁をもつ高环。口縁端部は拡張され、垂直な面をなし4条の凹縞文が施される。	外面ヘラ磨き。		
349	*	*	17.6 (3.2) —	水平口縁をもつ高环。端部は拡張され垂直な面をなし。3条の凹縞文が施される。	内外面とも不明。		
350	*	*	25.8 (11.1) —	水平口縫をもつ高环。口縫端部には、2条の凹縫が施される。端部は瓶状を呈する。	*		
351	*	*	26.0 (6.4) —	—	*		大型高环
352	*	*	— (12.8) — 21.6	八の字形に開く瓶部。端部は拡張され、凹縫文がわざりに残る。端部外側には金属器と考えられる留傳で2条の横方向の直縫が延び、その上下に鋸歯文の中に縱方向の直縫文が入ったものが描かれる。竹管文が施され、器部外側にはヘラ先に生ずる羽状の留点文が施される。	内外面とも不明。		
353	*	*	— (13.1) — 10.8	八の字形に開く瓶部。端部は拡張され2条の凹縫文が施される。端部外側には金属器と思われる鋸歯文によって直縫文、鋸歯文が施される。器部には刺突文が施される。	内面ヘラ削り。		

遺物観察表21

件目番号	造構番号	器種	法量 器高 幅径 厚径 此様	形態・文様	手法	備考
354	E-A区 田谷状地形	高环	(7.9) — —	八の字状に聞く縦部。脚部外面には、2条と4条の捲曲文。円孔が施される。	内面ヘラ削り。円盤光磨法。	—
355	+	タ	(6.9) — 10.0	短く八の字状に聞く脚部。端部は拡張され2条の凹線文が施される。窓部外面には金属性の先による刻目が入る。	脚内面ヘラ削り。円盤光磨法。	—
356	+	タ	(13.1) — 16.4	八の字状に聞く縦部。端部は拡張され2条の凹線文が施される。脚部外面には12条の直線文があり、複数の直線文が施される。円盤光磨法。	内面横方向のヘラ削り。	—
357	+	タ	(5.3) — 11.4	八の字状に聞く縦部。端部は拡張され2条の凹線文が施される。脚部外面には3条の直線文と羽伏式列点文が施され、巻曲文の中に斜め直線文があり、円孔、列点文が施されている。	内面ヘラ削り痕がわずかに残る。	—
358	タ	タ	(3.0) — 9.2	八の字状に聞く縦部。端部は拡張され、3条の凹線文が施される。脚部外面には、不規則に縱方向のヘラ先と見られる直線文。円孔が施される。	内面ヘラ削り。	—
359	+	タ	(5.6) — 9.0	八の字状に聞く縦部。端部は拡張され2段になる。縦部外面には竹葉文、列点文が施される。	外外面とも磨耗のため不明。	—
360	+	タ	(12.8) — 12.0	八の字状に聞く縦部。端部は内傾した面をなす。	内面脚上部はしおり痕が見られ縦部削ナダ。外表面ヘラ磨き。円盤光磨法。	—
361	+	タ	(10.7) — 11.0	八の字状に聞く縦部。端部は内傾した面をなす。	内外面とも不明。	—
362	+	タ	(9.4) — 14.0	八の字状に聞く縦部。端部は内傾した面をなす。	—	—
363	+	タ	(8.0) — 11.8	八の字状に大きく聞く縦部。	内面横ハケ調整。外表面ヘラ磨き。	—
364	+	タ	(4.8) — 13.7	内済気味に円盤状に聞く縦部。	外表面ハケ調整。	—
365	+	タ	(6.3) — 13.2	短い縦部から八の字状に聞く縦部。	内面に指頭圧痕が残る。	—
366	タ	タ	(6.0) — 6.0	短く八の字状に聞く縦部。	内外面とも不明。	—
367	タ	タ	(5.3) — 6.0	短く柱状の脚部に輪のせまい水平の縦部。	外表面ヘラ削り痕が残る。	—
368	タ	鉢	13.8 (3.9) —	内済して立ち上がる脚部から水平口縁がのがり。口縁端部は外傾し2条の凹線文が施される。	内外面とも不明。	—
369	+	タ	23.8 (8.4) —	口縁端部は拡張されやや内傾した面をなし。横ナデにより2条の凹が入る。外表面は4条の凹線文が施される。	内面口縁記憶ナデ。外表面ハケ。ヘラ磨き。	—
370	タ	甌	21.2 (7.0) —	内済して立ち上がる脚部から、短く斜め上に聞く口縁部。端部は外傾した面をなす。最大径は口縁部。	内面指頭圧痕が残る。外表面脚部指頭圧痕。口縁部下側ナデ調整。貼付口縫。	—

遺物観察表22

博岡番号	遺構番号	器種	法量 口径 器高 胸径 底径	形態・文様	手法	備考
371	II-A区 田谷状地形	器台	32.0 (6.9) — —	大きく開く口縁。口縁端部は施張され、不規則な凹線文があり、円形浮文に轉変を施した浮文が2側1組で貼り付けられる。頭部外面に凹線文が施される。口縁内面には、帶描き波状文が描かれる。	内面ハケ調整。	
372	*	*	30.0 (12.0) — —	大きく開く口縁。口縁端部には4条の凹線文が施され、内面浮文に剥離された浮文が貼り付けられる。頭部外面に幅の広い凹線文。口縁内面には帶描き波状文が描かれる。	内面にわずかに指頭圧痕が残る。	
373	*	*	— (15.6) — 25.0	筒状の器部には凹線文が施され、頭部は八の字間に開く。脚端部は施張され、外接する面をなす。2条の凹線文が施される。	端部内面横ナダ調整。	
374	*	*	— (12.2) — 25.4	八の字に開く断面。頭部は施張され3条の凹線文が施され、外側には幅の広い凹線文が施される。	内外面とも不明。	
375	*	*	— (10.7) — 23.8	脚部外面上には幅の広い凹線文が施される。	*	
376	*	*	— 27.2 (6.5) —	平坦な上面を持ち、筒状の脚がつく。	内外面指頭圧痕が残る。	
377	*	把手	—	断面長方形のへん平な把手。	内外面とも不明。	
378	*	*	—	断面長方形の把手。	*	
379	*	*	—	断面円形の把手。	*	
380	*	*	—	断面略円形の把手。	*	
381	S T 3	手鍔 土器	— (3.6) — 2.8	円筒形の中央がくびれ、鼓形を呈する。	手押ね。	
382	*	*	— (2.4) — 2.2	円筒形を呈する。	*	
383	S T 4	*	— 4.0 2.0 — 2.8	小さな耳状。	*	
384	*	小型 土器	— (4.5) — 4.4	わずかに底部が開く円筒形で、管状を呈する。	内外面とも不明。	
385	S K 2	*	— (2.7) — 3.6	あげ底氣味の底部から直立し立ち上がる。	内面指頭押圧。外面指頭押圧痕がわずかに残る。	
386	*	*	— (3.3) — 3.2	。	内面不明。外面指頭押圧後ヘラナダ調整。	
387	*	*	— (11.6) — 5.8	頭部から張り出した肩、最大径を持つ肩から半底の底部に直線的に下る。	内面指頭圧痕が残る。外底はヘラ削り。下脚部はヘラ削き。	
388	S D 6	*	— 4.6 4.7 — 3.6	円筒形でわずかに口縁部が開き、斜面文が施される。	内面圧痕がわずかに残る。	

遺物観察表23

検査番号	遺構番号	器種	法基 (cm)	L1種 器高 胴深 底径	形態・文様	手 法	備考
289	S D 6	小型上器	— (8.3) 4.0	半底の底部から直線的に立ち上がり最大径は上 部に位置する。	内面指ナデ。外面ハケ調整。	—	
290	—	—	— (6.7) 4.0	円筒形の胴部より直線的に外傾する口縁部。	内外面とも不明。		
291	S D 8	手捏土器	— 4.0 4.4 1.0	筒状の胴部から斜め上へ直線的に斜く口縁部。	指頭圧痕が残る。		
292	S X 1	小型上器	— 4.2 6.1 3.6	あげ底の底部、胴部はほぼ中位で最大径をなす。 縁部は上方を向き丸くおさめる。外面はていね いにつくられる。	+		
293	—	—	— (5.1) 3.0	上部に最大径を持ち、半底の底から直線的に 立ち上がる。	外面に指頭圧痕が残る。		
294	—	—	— (3.3) 3.6	半底の底部。	内面棒状のもので押付。 外面ハク刷り。		
295	—	—	— (5.0) 4.8	短い脚がついた底部、脚はやや内溝気味に上方 に上がる。	内面ハク刷り。外側わずかに指ナデ痕が残る。		
296	—	— (舞台)	— (2.3) 3.0	円筒形の中央部がくびれた菱形を呈す。	内外面とも不明。		
297	—	— —	— 4.1 3.2	円筒形の中央部がくびれた菱形をなし、上面が 平面をなす。	+		
298	—	— —	— 3.6 3.8	円筒形の中央部を押出し、菱形に成形、上面は 平面をなす。	+		
299	—	—	— 3.4 2.0	円筒形で中央部がくびれ、菱形を呈す。	+		
300	—	—	— (4.8) 6.6	短く八の字に開く複縫から、粘土充実の脚へ直 線的に立ち上がる。	外面指頭圧痕。わずかに ハク刷りが残る。		
301	包含器	— (無頭蓋)	— (4.5)	丸くおさめる口縁部。円孔があく。	内外面とも不明。		
302	—	— (舞台)	— (3.0)	円筒形を呈す。	手捏ね。		
303	—	— —	— (5.8) 2.4	円筒状の粘土を中央部からしほり上部を腰くす る。上面は平面をなす。	+		
304	—	— —	— 5.4 2.4	円筒状の粘土をつまみあげ、菱形をなす。平面 な上面をなす。	+		
305	—	—	— 8.8 5.6	丸底の底部から立ち上がり、口縁部は直立し、 口縁端部は丸くさおめ上方を向く。	内面指ナデ。		
306	—	—	— 5.8 6.8 2.8	半底の底部から内溝気味に立ち上がり、縁部上 位に最大径を有す。口縁部は斜め上に向かって 大きく開く。	内面指ナデ。外側指頭押 痕後ハケ調整。		

遺物觀察表24

遺物觀察表25

図版番号	出土地点	器種	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	備 考
421	S K 2	鉄劍	鉄	3.9	2.2	0.2	11.1	先端はやや中心より右側にあり、細長い三角形状を呈する。剣部は欠損している。平基式、扁平。
422	*	*	*	5.5	2.8	0.3	12.6	最大幅が中央部にあり、剣部に行くにつれて細くなる木の葉型を呈する。厚さは鈍平で薄い。
423	S X 1	*	*	4.0	2.3	0.4	—	先端部で彎曲する五角形状を呈する。右側脚部、茎端が欠損する。
424	S T 2	石鎚	サヌカイト	3.2	1.2	0.3	1.2	凸基式有茎石鎚。錐辺部に細かな調整を施す。
425	D区 包含層	*	*	2.9	1.5	0.2	1.2	凸基式無茎石鎚と考えられる。最大幅は中央部でくる。錐辺部に細かな調整を施す。扁平で薄い。
426	S D 6	*	*	1.9	1.4	0.4	0.8	先端部が欠損する。剣部はわずかに凹む凸基式無茎石鎚。扁平で薄い。
427	S X 1	*	*	4.0	1.6	0.6	3.1	凸基式有茎石鎚。錐辺部には細かな調整が施される。
428	*	*	*	2.8	1.6	0.4	2.2	先端部が欠損する。木の葉型を呈する凸基式有茎石鎚。錐辺部には細かな調整が施される。
429	*	*	*	2.3	1.5	0.5	1.6	先端部が欠損する。凸基式有茎石鎚と考えられるが石鎚の可能性もある。中央部に最大厚がある。
430	*	P 5	*	2.7	1.7	0.3	1.5	凸基式無茎石鎚。錐辺部には細かな調整を施す。扁平で薄い。
431	C区 包含層	*	*	2.4	2.8	2.2	2.3	先端部が欠損する。凸基式無茎石鎚。二等辺三角形形状を呈する。大型石鎚であるが鋸歯で削り出されている。
432	D区 包含層	*	*	3.4	2.0	0.5	2.9	先端部がわずかに欠損する。凸基式有茎石鎚、刃部には細かな調整が施される。
433	*	*	*	2.4	2.1	0.5	1.5	先端部が欠損する。凸基式無茎石鎚。二等辺三角形形状を呈する。錐辺部には細かな調整が施される。
434	*	*	*	3.7	1.5	0.5	3.4	先端部が欠損する。凸基式有茎石鎚。柳葉状を呈し直線状の長い刃部を有する。錐辺部には細かな調整が施される。
435	*	*	*	2.8	2.0	0.4	2.5	左側脚部が欠損する。先端は鍔角で二等辺三角形形状を呈する。凸基式無茎石鎚、錐辺部に細かな調整を施す扁平で薄い。
436	表探	*	*	2.7	2.3	0.6	3.0	先端部、左側脚部が欠損する。凸基式無茎石鎚。表探のため表面の風化が著しい。
437	C区 寄生層	*	チャート	1.8	1.7	0.4	0.8	凸基式無茎石鎚。正一角形状を呈し斜りは浅い。全体に細かな調整がみられる。縄文時代の石鎚と考えられる。
438	*	*	*	1.5	1.3	0.3	0.5	先端部、右側脚部が欠損する。細かな調整が施され縄文時代の石鎚か。
439	*	*	*	1.5	1.1	0.3	0.4	先端部、両脚部が欠損する凸基式無茎石鎚。縄文時代の石鎚と考えられる。
440	D区	*	*	1.5	1.1	0.2	0.3	先端部、左側脚部欠損。凸基式無茎石鎚。細かな調整が施され全体に扁平で薄い。縄文時代の石鎚と考えられる。
441	S T 2	石包丁	頁岩	7.8	3.4	0.6	31.0	直線的な両刃の刃部を持つ。表面は研磨によって仕上げられ、裏面は自然面が残る。

遺物観察表26

国版番号	出土地点	器種	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
442	S T 2	石斧丁	頁岩	4.1	4.9	0.9	17.2	刃部は欠損し残存しない。両面とも研磨によって仕上げられる。穂部には抉りを有する。
443	S T 3	*	粘板岩	11.9	4.4	0.7	65.2	直線的な刃刃を有し長方形を呈する。全体を丁寧な研磨によって仕上げる。反孔が孕まれる。
444	S D 15	*	頁岩	9.0	5.2	0.8	56.0	湾曲部と直線部を持つ双刃右包丁。縁刃表面、裏面とともに研磨されたが大削痕は残る。両端に抉りを有する。
445	S X 1	*	粘板岩	12.0	4.1	0.6	38.0	直線的な刃刃を有する。全体を丁寧な研磨によって仕上げる。中央部よりやや上に反孔が孕まれる。
446	*	未製品	*	9.8	5.1	1.2	101	剥離によって形が整えられる。わずかに擦痕が残る。
447	II-A区 旧谷状地	*	頁岩	8.2	4.7	0.7	47.8	ほぼ半分が欠損する。直線的な刃刃の刃部を持つと考えられる。全体を研磨によって仕上げる。
448	II-A区 旧谷状地	未製品	頁岩 黑色頁岩	10.9	5.5	0.8	91.8	剥離によって形が整えられる。表面にわずかに擦痕が残る。
449	II-A区 旧谷状地	*	硬砂岩	9.5	6.4	1.5	81.7	河原石を大きく剥離させ刃部と片面は自然面が残る。端部は一方に抉りが確認できる。
450	S T 6	石斧 未製品	頁岩	12.5	5.7	2.5	320	先整形され、側面が敲打によって整えられる段階の未製品と考えられる。
451	S K 1	石斧	緑色片岩	6.2	4.2	1.9	90.0	基部が欠損する。断面形が長方形の両刃石斧。全体を丁寧に研磨して仕上げる。
452	D IX 包含層	石斧 未製品	粘板岩	6.6	7.0	1.1	76.0	半分欠損。側面も丁寧に研磨し面取りされている。扁平片刃になると考えられる。
453	G区北 包含層	石斧	緑色片岩	8.0	2.9	2.2	98.0	断面形は梢円を呈する両刃石斧。全体を削構して仕上げる。類似の工具と考えられる。
454	II-A区 旧谷状地	石斧 未製品	*	4.6	3.9	4.1	181	残存する部分が少ない柱状の石斧の未製品と考えられる。
455	表様	石斧	礫岩	7.1	13.2	1.0	152	打製の土器長と考えられ。頭の反対をしたと考えられる。
456	S D 13	*	緑色片岩	6.4	3.7	1.7	52.3	刃部が欠損する。尖った基部を持ち側面は基部近くでは棱をなすが体部は中央から面をなす。全体が研磨されて丁寧に仕上げられる。形態的には縄文時代の石斧の可能性も考えられるが、SD 13の埋土中からは他には弥生時代の遺物しか出土しない。
457	II-A区 旧谷状地	磨製石剣	頁岩	7.7	3.4	1.4	54.9	頭の部分しか残存していない。全体に擦痕が残る。鍛削型石剣と考えられる。
458	D区 包含層	剣片	サヌカイト	4.5	2.3	0.6	6.9	刃部を調整しており。刀器として使用された可能性がある。
459	*	*	*	6.1	3.9	0.9	19.6	-----
460	II-A区 旧谷状地	*	*	5.2	2.5	0.4	3.0	-----
461	D区	*	チャート	3.4	1.8	0.9	6.6	-----

遺物観察表27

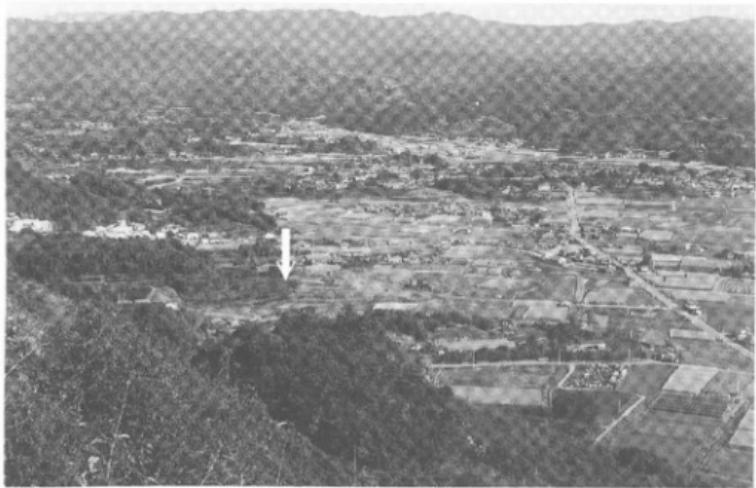
同版番号	出土地点	器種	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	備 考
462	D区	斜片	チャート	3.3	1.9	0.7	4.6	——
463	+	+	+	2.6	2.1	0.6	4.1	——
464	S T 4 壁溝	勾玉	ガラス	1.2	0.8	0.5	0.1	青色(ターコイズブルー)の発色を示している。好みのある側面はC字状をなし頭部の円孔は丁寧に両側から穿孔されている。柄部で仕上げられる
465	S T 4 壁溝	管玉	緑色凝灰岩	1.9	0.7	0.2	1.1	——
466	S T 4 壁溝	+	碧玉	2.2	0.8	0.3	1.8	——
467	S T 1 壁溝	敲石	砂岩	11.9	7.4	2.4	275	河原石を利用した敲石。両端に敲打による剝離がみられる。表面は磨いたようになめらか。
468	S T 2	+	+	16.2	6.1	4.1	530	河原石を利用した敲石。両端と表面に敲打痕が残る。側面には敲打による擦形の跡跡が残る。なめらかな表面。
469	+	+	+	12.4	4.6	4.0	450	河原石を利用した敲石。中央の一部しか残存しない。中央部、端部に敲打痕が残る。
470	S T 3	+	+	12.0	9.8	3.8	580	河原石を利用した敲石。両面の中央部には敲打による凹がみられる。端部、側面にもわずかに敲打痕が残る。
471	+	+	+	10.4	6.5	2.6	285	河原石を利用した敲石。端部にわずかに敲打痕が残る。なめらかな表面。
472	+	+	+	9.8	7.7	4.2	470	河原石を利用した敲石。端部に敲打痕が残る。なめらかな表面。
473	+	+	+	18.0	8.2	3.4	440	河原石を利用した敲石。側面に敲打痕が残る。表面はなめらか。
474	S K 2	+	+	9.6	9.4	3.6	450	河原石を利用した敲石。縁辺部、中央部に敲打痕が残る。
475	S K 3	+	+	7.0	7.9	2.5	220	河原石を利用した敲石。
476	D区 ピット	+	+	8.4	8.3	2.5	280	河原石を利用した敲石。縁辺部にわずかに敲打痕が残る。
477	S D 6	+	+	8.2	8.6	2.7	285	河原石を利用した敲石。中央部、縁辺部に敲打痕が残る。
478	+	+	+	9.9	4.5	5.7	400	河原石を利用した敲石。側面に敲打による凹がみられ、端部にも敲打痕が残る。
479	+	+	+	10.0	9.1	3.3	440	河原石を利用した敲石。中央部と端部に敲打痕が残る。
480	S D 7	+	+	13.0	9.9	3.1	560	河原石を利用した敲石。表面には広範囲に敲打痕が残る。縁辺部も敲打され剥離が起きている。
481	S D 15	+	+	15.7	8.1	7.1	1280	河原石を利用した敲石。中央部と両端部に敲打痕が残る。
482	S D 16	+	+	8.3	7.6	3.2	300	河原石を利用した敲石。

遺物観察表28

岡版番号	出土地点	岩種	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	地 考
483	S X 1	礁石	砂岩	5.8	6.1	4.4	252	河原石を利用した礁石。半分が欠損する。両面中央部とも敲打による凹がみられる。側面と端部は半分になるくらい敲打する。
484	*	*	*	8.4	7.9	5.0	465	河原石を利用した礁石。半分が欠損する。中央部と側面に敲打による凹がみられる。なめらかな表面。
485	*	*	硬砂岩	13.0	7.3	4.6	665	いびつな形の河原石を敲打する。側面、中央部、端部に敲打による凹がみられる。なめらかな表面。
486	*	*	砂岩	11.1	8.8	4.5	665	河原石を利用した礁石。中央部に敲打痕が残る。なめらかな表面。
487	II-A区 旧谷状地	*	*	10.8	11.1	3.4	580	河原石を利用した礁石。中央部に敲打による凹がみられる。側面は敲打によってつぶれ平窪をなす。
488	II-A区 旧谷状地	*	*	14.0	7.8	4.8	875	河原石を利用した礁石。端部が凹む。
489	II-A区 旧谷状地	*	*	10.0	7.6	2.7	285	河原石を利用した礁石。粒子の荒い砂岩で風化が進む。両面中央部とも敲打により凹む。側面にも敲打痕が残る。
490	S X 1	叩台	*	22.1	18.7	8.5	4300	河原石を利用した叩台。断面は厚みのある楕円形。中央部に敲打痕が残る。表面はなめらか。
491	*	*	*	15.8	10.7	6.3	1300	粒子の荒い砂岩。中央部がくぼみ石斑状を呈する。中央部に敲打痕が残る。
492	*	*	*	32.8	16.0	14.2	10.3 Kg	河原石を利用した叩台。表面の2ヶ所に敲打による凹が残る。
493	II-A区 旧谷状地	*	*	15.8	20.8	3.1	1415	河原石を利用した叩台。端平で薄い。中央部に敲打痕が残る。
494	S T 1	礁石	硬砂岩	13.6	8.6	1.7	435	表面、裏面に擦痕が残る。
495	S T 2	*	砂岩	12.3	3.0	2.1	130	粒子の細かな砂岩。表面、両側面に擦痕が残る。
496	S K 2	*	*	7.5	5.4	2.1	70.0	粒子の細かな砂岩。大きな礁石の一部が剥離したものと考えられる。
497	S X 1	*	*	6.7	4.4	1.8	62.5	粒子の細かな砂岩。大きな礁石の一部が剥離したものと考えられる。
498	S T 2 中央P	*	砂質泥岩	27.9	15.0	6.8	3000	粒子が細かく軟質の泥岩。表面のみ使用される。掘え剥きで使用されたと考えられる。
499	S T 3	*	砂岩	24.4	12.0	6.3	2500	表面、裏面の両面が使用され擦痕が残る。
500	*	*	泥質砂岩	30.2	17.4	15.3	11.6 Kg	軟質で粒子が比較的荒い砂質泥岩。表面と側面が使用される。掘え剥きで使用されたと考えられる。表面中央部には敲打痕がわざわざに残り、叩台に使用されたと考えられる。
501	II-A区 旧谷状地	*	砂岩	10.2	9.3	3.7	430	粒子の細かな砂岩。表面、裏面が使用されている。側面にもわざわざに使用痕が残る。
502	II-A区 旧谷状地	*	*	14.3	12.0	5.7	1520	粒子の細かな砂岩。表面、裏面とも側面にも擦痕が残る。

遺物觀察表29

写 真



調査区遠景（三宝山より）

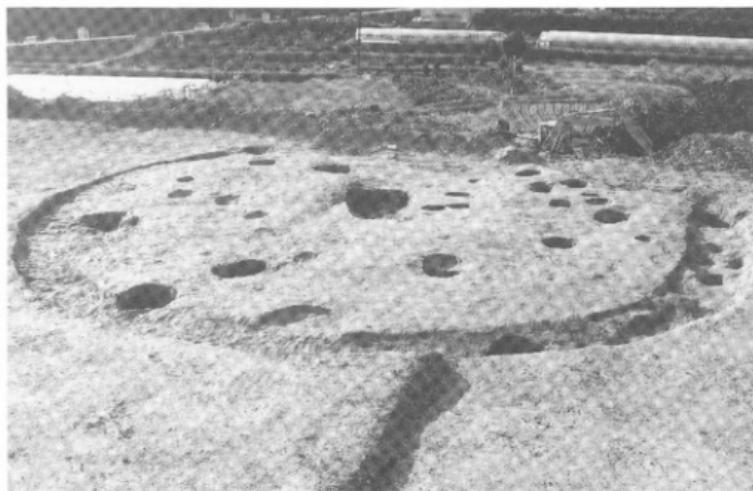


調査区調査前風景

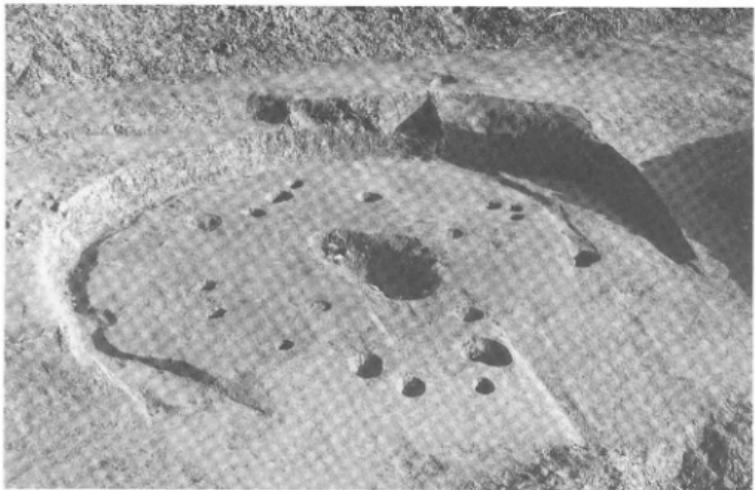
写真 2



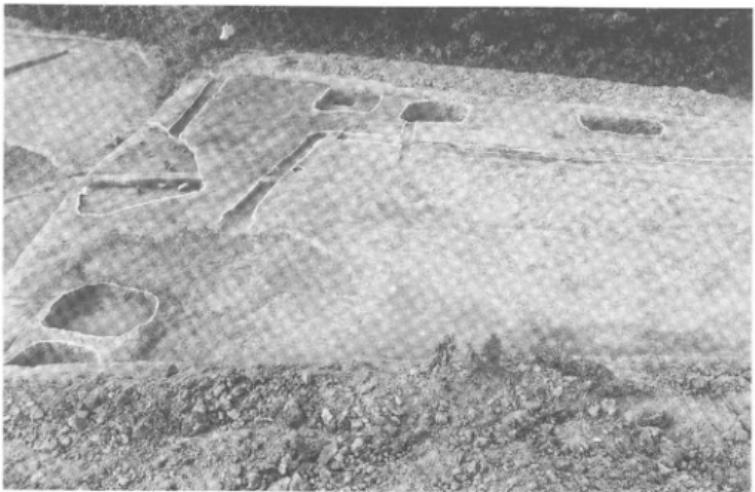
調査区調査前風景



ST 1 完掘状態



S T 2 完掘状態

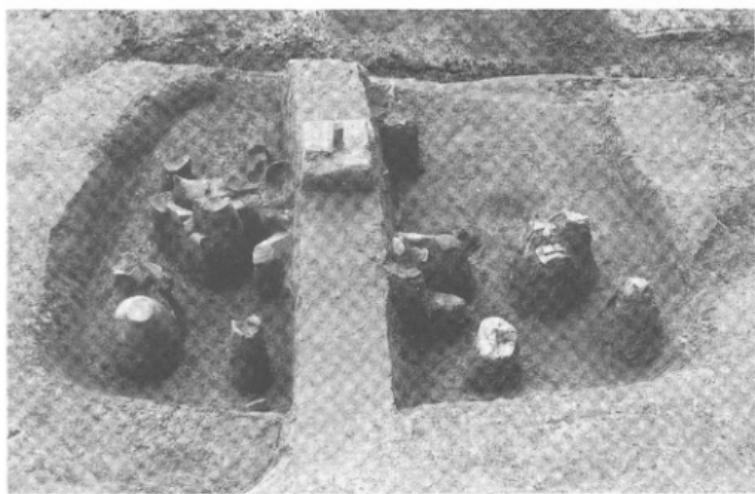


A 区 完掘状態

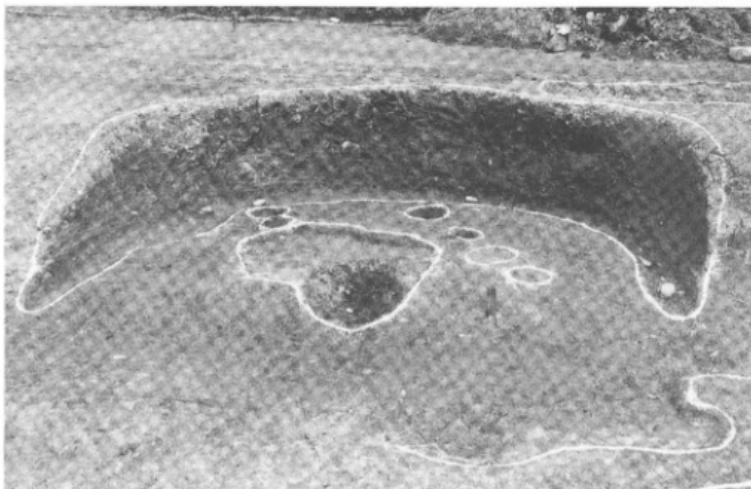
写真 4



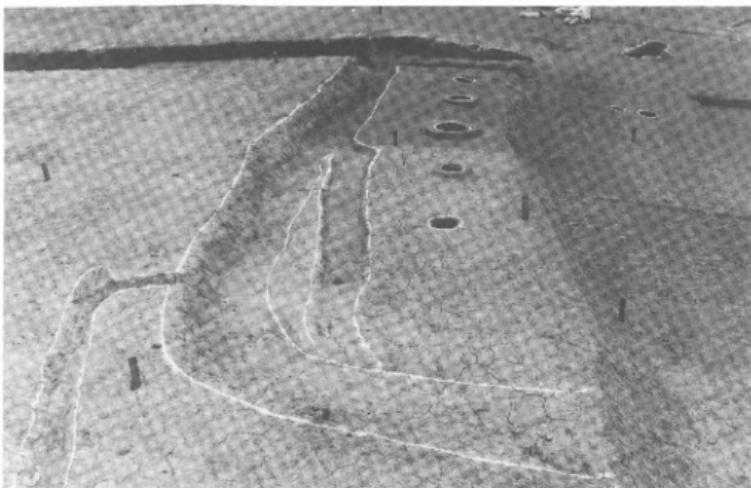
B区 完掘状態



SK2 遺物出土状態

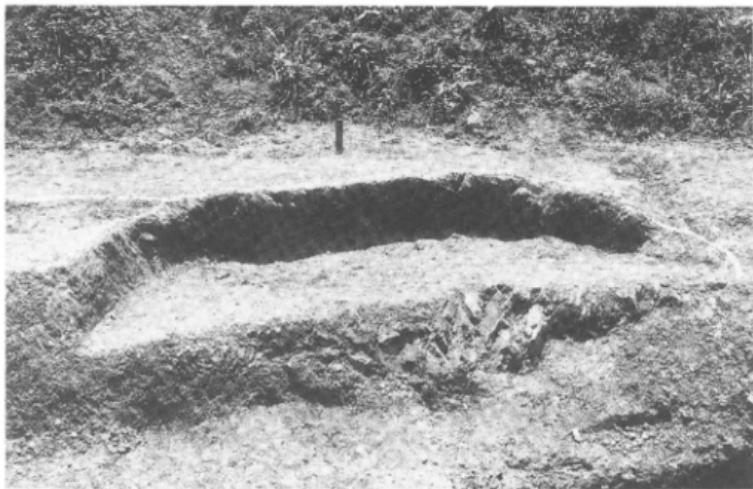


S X 3 完掘状態

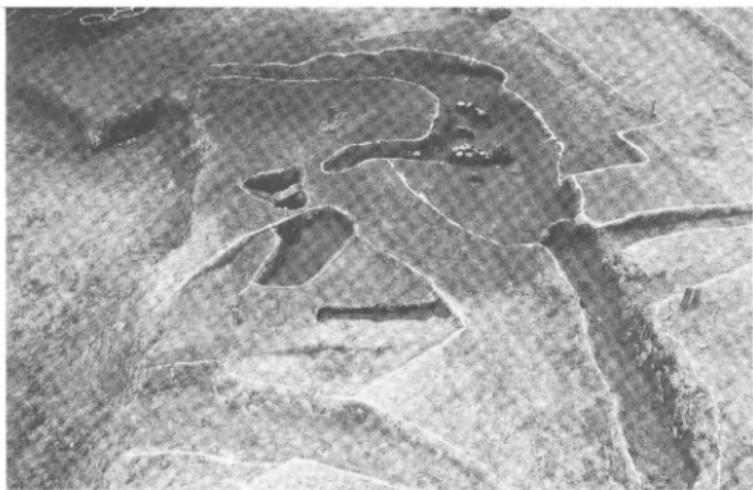


S X 1 完掘状態

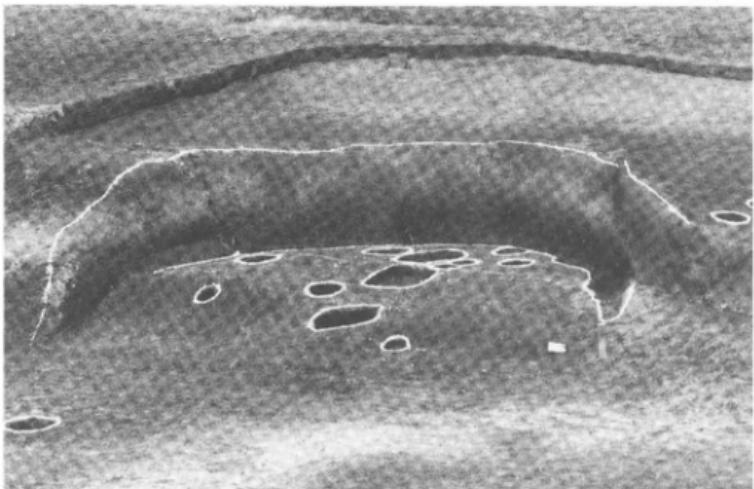
写真 6



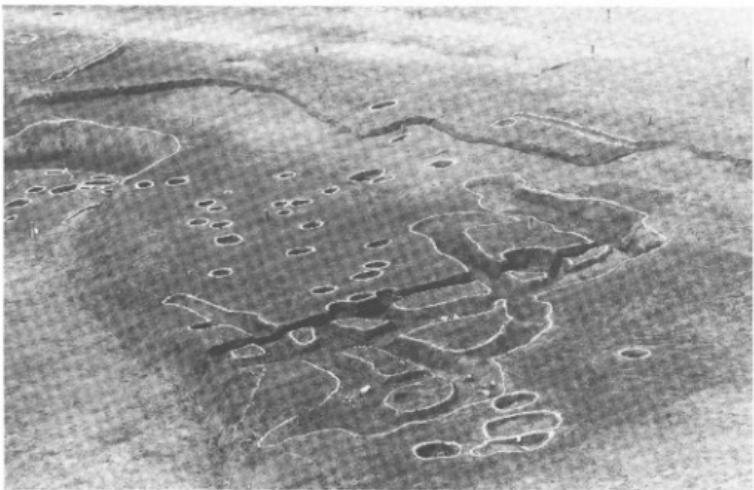
S K 3 完掘状態



S D 6 完掘状態



ST 4 完掘状態

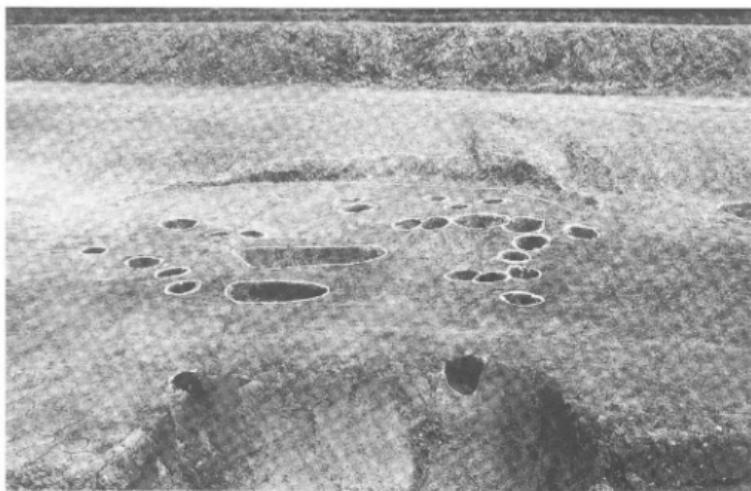


D区 端部完掘

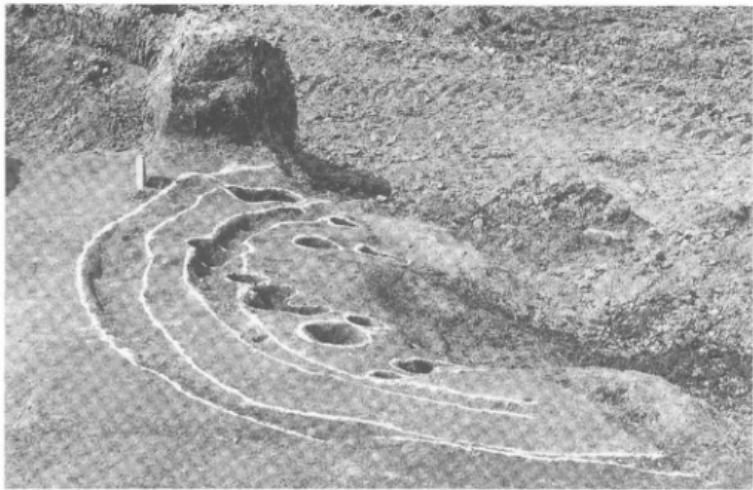
写真 8



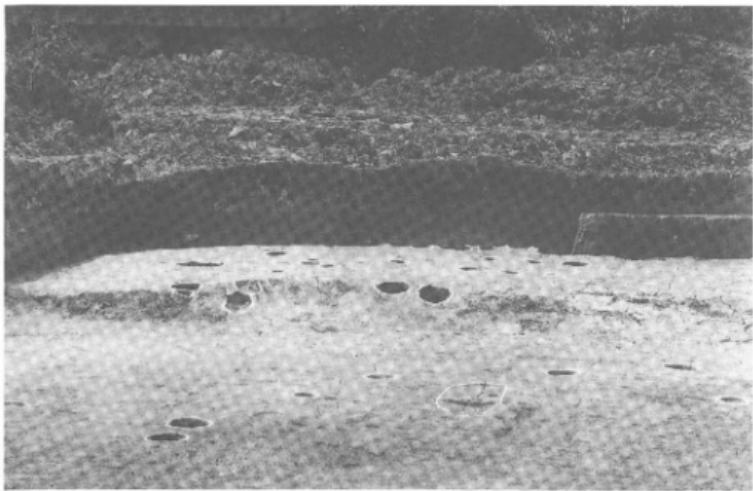
S D 13・14 完整状態



S T 5 完整状態



S T 6 完掘状態



II-A区 ピット完掘状態

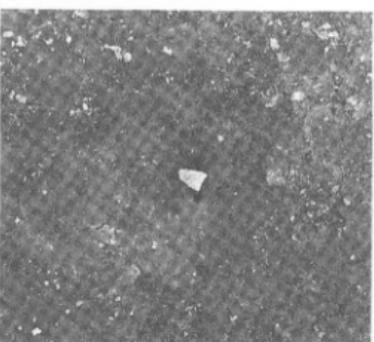
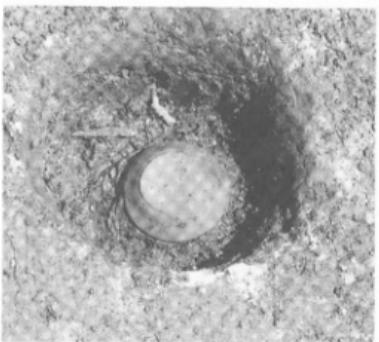
写真 10



調査区完掘状態遠景

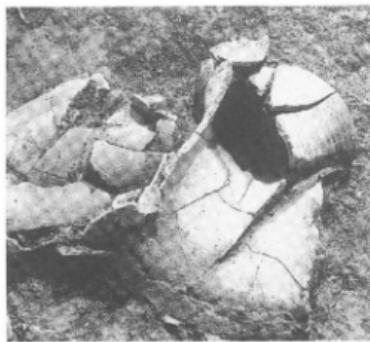
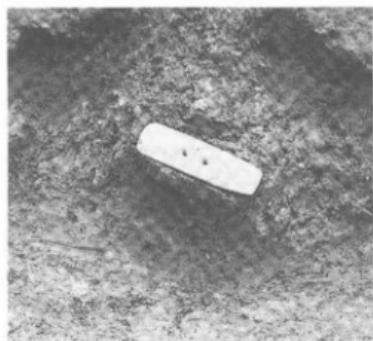


調査区完掘状態遠景



遺物出土状態

写真 12



遺物出土状態

